２０１９年３月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１４日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、前回の番組審議会での答申を受け「2019年度東北地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「2019年度東北地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。

続いて、「東日本大震災から８年」関連の番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、４月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜「東日本大震災から８年」関連の放送番組について＞

○　３月３日(日) 明日へ　つなげよう　証言記録　東日本大震災　第８２回「宮城県石巻市　隣人を救え　命のつなぎ役　民生委員」(総合 前10:20～11:08)を見た。仮設住宅から復興住宅に移って、近所づき合いが減って孤立が深まるという問題は、これからもっと深刻な影響が出てくると思う。東日本大震災で地域社会が崩壊、分断し、孤立に追い込まれた住民の支えをどのようにしていけばいいのか、これからも継続して取材し、放送していってほしいと思った。

３月１１日頃に震災関連の番組を見たが、どれも被災者の問題を丁寧にすくい上げ

る姿勢が感じられて、納得と共感を持って見ることができた。

○　３月３日(日)ＮＨＫスペシャル「“黒い津波”知られざる実像」を見た。巨大津波が入り組んだ湾に進入すると海底の土砂をえぐり巻き上げるため、比重が重くなり破壊力が増したことや、津波に含まれた土砂などの粒子が細かいので、飲み込むと肺の奥まで入り込んで、津波肺という重い肺炎になることなど、黒い津波の恐ろしさがよく分かった。周囲でも話題になった番組で、二度と同じような被害を出さないために、防災の意識を変えなければならないと話し合った。

一つ気になったのは、なぜ震災から８年たった今、当時のまま保管してきた黒い海水を提供してくれたのか、その理由をもう少し詳しく説明してほしかった。

○　３月７日(木) クローズアップ現代＋「今も１０万か所以上　除染ごみがなくならない」を見た。福島県で、除染ごみが民家の軒先や駐車場などに保管されたままになっている現実をきちんと取材していた。また、放射性物質の濃度が一定基準を下回った除染ごみを、道路や防潮堤の建設資材などに再生利用する動きがあることが説明され、その実証実験を受け入れた地域として飯舘村が紹介された。受け入れれば国が除染地域を拡大してくれるから仕方なく受け入れたということだった。国が除染ごみを放置したあげく、弱いところにつけ込む理不尽さに対しての怒りが画面から伝わった。この再生利用について、知らない方が86.2%いるというデータも示されてよかった。ぜひ今後も取材を続けて番組にしてほしいと思った。

○　３月７日(木)「クローズアップ現代＋」は、東京電力福島第一原子力発電所の事故による被害は、未だに現在進行形であることを突きつけていた。今も福島では、自宅の軒先などに除染ごみが放置されていて、８年経過した今も福島を苦しめている事実を日本中の人にもっと知ってもらいたいと思った。最終処分場の問題は福島だけの問題でなく、国として対応しなければならないことだ。今回の番組だけでは、これ以上問題を掘り下げるのは難しいのかもしれない。もっと大きな問題として、さまざまな面から取り上げていってほしい。

○　３月８日(金)東北ココから「あの日の星空」を見た。仙台市天文台がプラネタリウムで震災当時の星空を再現するプログラムを作っていたことに大きな感動を覚えた。番組の中で「こんな残酷なときに何と美しい星空なんだ」、「夜、何も見えなく、ただ星空だけが見えて、それが生きるための前向きな姿勢につながった」などのことばが印象的だった。私たちの記憶の中に残っていた星空が番組として記録されたことに意義を感じた。「知ることで助かる命」がある。記録を残すことで、そこから学び、生き延びるための知識を後世に伝えていくことができると思う。あの夜、自分の家族の

安否も確認できぬまま、自分の使命を果たすために仕事をした警察官や消防隊員、公務員、ジャーナリストなど、どんな思いで仕事をしていたかと考えると、胸が熱くなった。

○　３月８日(金)「東北ココから」は、本当に感動的な内容だった。あの夜の満天の星空を、仙台市天文台のプラネタリウムで再現していることはとてもすばらしいことだと思う。また、星空に関する手紙がＮＨＫにたくさん寄せられ、番組で紹介するほかにＮＨＫ仙台放送局の１階で展示もされていた。ＮＨＫに投稿することが、悩みのはけ口の一つ、救いの一つになっていたのではないかと感じた。

ただ、疑問に思ったのはエンディングで、日中のせわしない仙台駅前の様子や夜の仙台の街の明かりをイメージ映像として使っていたが、その意味合いがよくわからなかった。星空と対比させることで、文明に慣れ切った我々に対する警鐘なのかと想像したが、もう少し工夫がほしかった。

○　３月１１日(月) 震災ドキュメンタリー「あの日の星空」(総合 後10:25～11:10)を見た。仙台天文台の取り組みや仙台、石巻、東京、名古屋など、さまざまな場所で星空について取材していたので、視聴者それぞれが、映像を通して星空についてさまざまな思いを描くことができる内容だったと思う。娘と孫を亡くされたご夫婦が「亡くなった人が道に迷わないように星が光を照らして天国へ導いていると思えるようになった」と話していたのが印象的だった。ナレーションがないことで、悲しみと向き合ってきた８年間の時の重みを感じさせる演出になっていたと思う。被災地の気持ちに寄り添ったとてもいい番組だった。

○　震災ドキュメンタリー「あの日の星空」は、震災の夜の星空に寄せた思いを被災した方々のことばで率直に語りかけてくれる番組だった。ナレーションがない演出で、内容にぴったりだと感じた。震災の日に、停電で真っ暗だった被災地で、人々はどんな思いでその日を過ごしたのか、悲しさや虚しさや寂しさや無力感、亡くなった人への思いなど、ことばにならない気持ちが星空を通して伝わってきたと思う。

ＮＨＫに寄せられた手紙を朗読する場面は、プロの声優が読んでいたようだが、例えば被災地の語り部などアマチュアの人が読んだほうが、身近に感じられたと思う。

番組の冒頭に登場した方のお話が、３月１１日の星空ではなく、何日かたったあとに見た星空の話だった。「あの日の星空」という題名なので、３月１１日の星空の話から膨らませてほしかった。

○　震災ドキュメンタリー「あの日の星空」を見た。題名を聞いただけで、東日本大震災の夜のことを鮮明に思い出すので、題名のつけ方がすばらしいと思った。私も当時、

自宅の前で夜空を見上げたときに降ってくるような星空を見たが、それは忘れられない。震災を風化させないためにも、この番組のように少し違う切り口で番組を制作していくことは重要だと思う。

○　３月８日(金)２画面ドキュメンタリー「無人の町から８年～福島県浪江町～」(総合後10:00～10:43)は、東日本大震災直後と８年後に、全く同じアングルで撮影した福島県浪江町の姿を描いた番組だった。わかりづらい部分もあるのではないかと思ったが、画面の切り替わりで効果音が入ったり、字幕の表示を色分けするなど、切り替わりがわかりやすかった。ただ、大小２つの画面が並んだときに、どこを見ればいいのか迷うことがあった。

印象に残ったのは、震災直後、人や車が全く通らない道路の映像が、2019年には工事のための大型のトラックが行き交う映像になっていた部分。復興は道半ばで、全く終わっていないということを実感させられた。

この番組はとても画期的で、今までにない挑戦的な演出だったと思う。もう少し工夫をして、進化させていってほしいと思った。

○　３月９日（土)「みちのく冬物語スペシャル」(総合 後8:15～8:43)は、岩手の平泉町の中尊寺や毛越寺、福島の裏磐梯のワカサギ釣りやいわき絵のぼり、宮城のせり鍋などを紹介するおもしろい番組だった。東日本大震災の被災地を中心に紹介していてよかったと思う。大崎八幡宮の社殿に使われている黒漆や玉虫塗について、伊達政宗のＤＮＡに結びつけて紹介していたが、少し押しつけがましく感じてしまった。

○　３月９日（土）ＮＨＫスペシャル「崖っぷちでもがんばっぺ～おかみと社長の奮闘記～」を見た。タイトルからすると希望があって明るい番組かと思ったが、不安が残る内容だった。岩手県釜石市にある旅館のおかみと大槌町にある水産加工会社の社長を交互に描いていく構成になっていたが、一人ずつじっくり描いたほうが見やすかったのではないか。国の補助金の制度について、もう少し詳しい説明がほしかった。事業者に対する補助金のうち、無償の部分と返済していく部分の内訳についてはっきり理解ができなかった。両者とも借入金の返済猶予が延期になって、これからが勝負だというところで番組が終わってしまった。ぜひ、その後を取材して番組にしてほしい。

○　３月９日（土)「ＮＨＫスペシャル」を見た。番組に登場した旅館のおかみが「外から来る人には自分の夢を大いに語ったが、従業員には負い目もあり、夢も語ってこなかった」と話していたが、多くの経営者に重くのしかかることばだったと思う。復興支援策で借りた借金の返済について、２人とも返済猶予を得ることができたが、今後どのような道をたどるのか気になるところで、引き続き取材を続けて番組にしてほ

しい。

また、国の復興政策に問題がなかったのか、今回のような人物に焦点を当てるのではなく、根本的な問題を掘り下げて伝える番組も必要なのではないかと感じた。

番組の冒頭と最後に、三陸の海に月の光が一本の道のように照らされる映像があったが、とても印象的ですばらしかった。そして、落ち着きのある室井滋さんの語りがとてもよかった。

○　３月９日(土)「ＮＨＫスペシャル」を見た。復興支援策で借りたお金の返済期間が始まり、一時の復興特需が終わった今、番組で取り上げた企業以外にも経営の危機に直面している企業は非常に多いと思う。震災がなければ新たな借り入れなどせず、身の丈に合った経営で、安定的な事業を継続していたのではないか、震災は人だけではなく企業も大きく変えてしまったと感じた。震災から８年が経過し、復興の局面の変化、立ち位置の変化に伴う経営環境の難しさの中で苦しみ、もがいている経営者の姿を通して、被災地の現状を正確に映し出した番組だったと思う。二重ローンや債権放棄など、他にも根深い問題があると思うので、引き続き、取材を続けてほしい。

○　３月９日(土)ドラマ「女川　いのちの坂道」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:00～10:59)を見た。全編ドローンで撮影するという非常に意欲的な試みだと思い見始めたが、やはりドローンカメラの動きが機械的でぎこちない部分もあり、見ていて多少の違和感は残った。ドローンカメラが上空にスーッと飛び立ち、舞台となった女川を上から映すと、地形が空間的に一瞬で把握できて、津波が押し寄せたことや壊滅的な被害を受けたことが簡単に想像することができた。また、登場人物の表情をアップで映し、途切れることなく上空に上がっていって、今度は彼らをふかんして映す場面があったが、ドローンでないとできない映像表現だったと思う。その意味では、ドローン撮影は効果的で、野心的な試みだったと思う。

内容に関しては、家族を亡くした人たちの心情を見事に浮き彫りにしていたと思う。被災地を思いやるドラマとして、見た人の記憶に長く残るのではないかと思った。

○　３月９日(土)ドラマ「女川　いのちの坂道」を見た。全編ドローンカメラで撮影ということで非常に驚いた。俳優の演技が、カメラマンを意識しない目線や演技になっていたので、非常におもしろい効果があると思った。ただ、深刻な場面になると、俳優がドローンカメラとの位置関係を作るのが難しいのではないかと感じた。

○　３月９日(土)ＥＴＶ特集「誰が命を救うのか　医師たちの原発事故」を見た。東京

電力福島第一原子力発電所の事故があるまで、国も地方自治体も安全な避難の方法や準備を何も考えてもいなかったということがこの番組を通じてはっきりと浮かび上がってきたと思った。医師、看護師、介護従事者が放射線量についてほとんど正確な情報を持たないまま、決死の覚悟で使命感に突き動かされて、病人やけが人の救助に懸命に当たっている様子が、医師たち自身の撮影による写真や映像をもとにリアルに再現されていて、非常に心を動かされた。東京電力福島第一原子力発電所の事故の対応に当たった医師たちが、今、福島県立医科大学や東北大学に移り、当時の経験を踏まえながら後進の指導に当たっている姿は、非常に心強く感じた。

○　３月９日(土)「ＥＴＶ特集」を見た。福島県立医科大学の医師たちが、被ばく医療についてきちんと教育を受けないまま、恐怖を感じながら運び込まれてくるけが人の除染と治療を行っていた。担当の医師が「いつまで国は我々素人に任せるのか」と話していたのが印象的だった。患者の命とともに医療者の安全をどう確保すればいいのかという極限状態で次々に判断を求められて、医療関係者が疲れ果て、毎晩一人ずつ泣き崩れていったというエピソードは衝撃的だった。医師たち自身の撮影による写真や映像を使い、一日一日何が起こっていたのか追っていく構成は、現場の切迫感が伝わり見応えがあった。これまでさまざまな番組があったと思うが、医師の立場からどういう動きをしていたかを描いた番組を見たのは初めてで衝撃を受けた。原子力安全神話は、一体何だったのか考えさせられた。二度と起きてはいけない事故だが、記録を残しておくことは重要で、報道の使命だと感じた。

○　３月１０日(日)ＮＨＫスペシャル東日本大震災「終（つい）の住みかと言うけれど…～取り残される被災者～」を見た。今も津波で壊れた家に住んで修理できずにいる人や災害公営住宅での孤独死、東京電力福島第１原子力発電所の事故の影響で元の家に住み続けるかどうか迷う人たちなどの課題に加え、それでも頑張っていくことの意味を問いかける内容もありとてもよかった。

ただ、自宅の修理に使える補助金の説明について、疑問が残った。災害の支援制度は複雑で、自治体によって違うこともあるので、今回紹介された人の場合や東日本大震災当時の石巻の場合などの補足を入れたほうがよかったと思う。また、自宅が全壊になった人には手厚い支援が国から必ずあるという説明は、誤解を招きかねないと感じた。保険に入るなど、個人の備えも重要なことで、公助のことばかり言うのは危険だと感じた。

８年経った今だからこそ見えてきた課題を取り上げていて、とてもよかったと思う。

○　３月１１日(月)「てれまさむね」を見た。東日本大震災が発生した午後２時４６分に石巻の日和山や仙台市内一番町、東松島、名取など各地で皆さんが黙祷されている様子を放送していた。これだけの場所で一斉に取材をするのは苦労があっただろうと推測した。サンドウィッチマンやゆずからのメッセージがあったが、温かいことばだったので、非常によかった。

○　３月１１日(月)ＮＨＫスペシャル「“震災タイムカプセル”　拝啓　二十歳の自分へ」(総合 後8:00～8:43)は、東日本大震災を明るく前向きに捉えた番組だったと思う。小学６年生のときに二十歳の自分へ宛てた手紙を書いて、タイムカプセルとして埋め、それを今年受け取った若者のドキュメンタリーだった。手紙の内容のとおりになっていなくても、これから頑張っていこうという前向きな姿が捉えられていた。

東日本大震災から復興には、まだまだ課題が多い。９年目、１０年目は、被災した人たちが心の底に眠っている思いを吐き出し、前に向かって歩き始められるような番組をつくってほしいと思った。

○　３月１１日(月)「ＮＨＫスペシャル」を見た。８年前にタイムカプセルを埋めたときの映像が残っていて、この番組自体がタイムカプセルのように放送局で温めていたもののような印象を受けた。震災があったから夢を諦めた人、震災があったからこそ夢をつかんだ人、いろいろな人がいて、子どもたちの将来が震災によって大きく動いたことに胸が痛んだ。タイムカプセルは、子どもたちにとってつらい過去や思い出だけではなく、大人になった自分を見つめ直すよい機会になったと思う。

当時、学校や担任の先生たちが一体どんな思いで、どんな判断でタイムカプセルを埋めることになったのか、その点についてはもう少し詳しく知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

さまざまな番組で、被災地の今をお伝えした。今になって語られること、今になってわかった事実もあった。今後も東日本大震災についての番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　２月１６日(土)ＥＴＶ特集「熊を祟（あが）め　熊を撃つ」を見た。ハンターとマタギの違いや熊をとったらみんなで平等に分け合うマタギ勘定という習わしなど、とても興味深い内容だった。これまでしとめた熊の数を聞かれて、数を言うのは自

慢話になるからことばにできないというインタビューも印象的だった。自然とともに生きるマタギの生活は東北の人がずっと持っている共通の心ではないかと思った。それが伝わるいい番組だったと思う。

○　２月２３日(土) ＦＭシアター「風よとどけよ」は、秋田県大潟村で実際にあった出来事をモチーフにしたラジオドラマだった。登場人物や内容が非常にリアルに表現されていて、取材の深さに驚いた。ただ、秋田を表現するために秋田弁を強調していたが、過剰な感じがした。「ニュースこまち」で録音の様子が放送されていたが、ラジオで表現することの難しさ、効果音のつくり方、出ていた俳優さんの苦労話など、舞台裏を聞くことができてとてもよかった。ラジオドラマを初めて聞いたが、とてもよくできていて、今後、ラジオに注目したいと思わせる番組だった。

○　２月２４日(日)日曜美術館「日本で出会える！印象派の傑作たち」を見た。山形美術館に作家・演出家の大宮エリーさんが訪れ、シスレーやルノワールの傑作に見入っていた。「モレのポプラ並木」に描かれた木立の影が、黒ではなく濃い緑で描かれているという話には感心した。

○　２月２５日(月) プロフェッショナル　仕事の流儀「医療事故をなくせ、信念の歩み～医師・長尾能雅～」は、医療事故の原因を徹底的に解明し、再発防止策を練る医療安全のパイオニアである長尾さんの信念に迫った番組だった。長尾さんの「全ては患者さんのために」ということばが印象的で、原因を究明していく姿、そして再発を防止するために奔走する姿が丁寧に描かれていた。医療事故は、起きてからのことが大きく取り上げられるが、事故までいかない事例を集めて共有することが重大な事故を防ぐということがよくわかった。病院は、さまざまな分野のプロフェッショナルがプライドを持って関わっているので、それぞれの意見を聞いて調整するのが本当に難しいと思う。その難しさがきちんと伝わる構成になっていた。長尾さんは、優しい口調の中にも揺るぎない強さを感じさせる人柄でとても引きつけられた。

○　３月９日（土）ブラタモリ「＃１２８　阿波踊り」を見た。なぜ路上で踊るか、何で大規模な盆踊りになったのか、今のお囃子や踊りのルーツを探り、阿波踊りの謎が見事に解明されていて、とても興味深かった。現在の振り付けを考案した女性も登場し、踊りがどんどん進化していったことも分かり、おもしろい内容だった。

○　３月９日(土)ＢＳ１スペシャル「天皇・皇后の肖像画」（ＢＳ１　後 8:00～8:49）は、リアリズム絵画の巨匠、野田弘志さんが、天皇皇后両陛下の肖像画を完成させるまでの最後の半年間に密着した番組だった。完成したかどうかわからないと言いながら描き続ける姿が非常に印象に残った。完成した肖像画は、お二人のお人柄、優しさ、象徴として自分の役割を追及してきた厳粛さなどがにじみ出てくるような感じがして、実際に見てみたいと思わせるものがあった。

○　３月１１日(月)「あさイチ」を見た。暗いイメージになりがちな避難所生活の体験について、なるべく楽しく取り上げますと冒頭でコメントが入り、明るい感じで番組が進行し、視聴者のハードルを下げてくれたと思った。防災がテーマの特別番組だと、初めから見ない人もいると思うので、毎日放送している番組の中で、防災をテーマに取り上げたのはとてもよかったと思う。「あさイチ」は、災害が起きるたびにさまざまな災害に関する情報を伝えている番組なので、ぜひこれからも続けてほしいと思った。

○　３月１２日(火)クローズアップ現代＋「“転勤”が廃止される！？　働き方の新潮流」を見た。４月から全国転勤を原則廃止する保険会社の事例や夫の転勤が原因で離職する女性が多い中で、配偶者の転勤先の地域にある他社に移籍できる制度などの紹介があった。人手不足、採用難、社員の離職など人材を確保することは企業の大きな課題だと思う。女性活躍推進、働き方改革などにもつながることから、このテーマで番組を作ったことは意義あることだ。

今後は、病気になった人やその病状に合わせた仕事を与えること、メンタル疾患にかかっている人の雇用などについても課題になってくると思う。ハードルの高い部分だが、成功事例などを番組で取り上げてほしい。

○　2020年前期の朝の連続テレビ小説「エール」が、福島出身の古関裕而さんをモデルにした内容になると決まり、とてもうれしい。新聞の号外が出るほど、福島県では盛り上がっている。古関さんは、福島市の名誉市民で、駅前に銅像があるほど有名な人物。どのようなドラマになるのか、期待している。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０１９年度東北地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出 席 委 員)

委 員 長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　ＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋについて、大相撲の中継はＢＳ８Ｋで放送しているが、ＢＳ４Ｋでも放送するといいのではないか。最近ＢＳ４Ｋは普及し始めているので、より多くの人にダイナミックな映像で大相撲を見てもえると思う。ミュージカルやオペラなどの大型番組を編成するということだが、小劇場や中劇場などで行う劇場中継も取り上げて、新しい文化の醸成につながるような番組をぜひお願いしたい。

それから、「ＥＴＶ特集」は、とてもいい番組だと感じているので、今後も継続していってほしい。

（ＮＨＫ側）

大相撲は、国技館で行う場所をＢＳ８Ｋで放送している。カメラなどの機材が８Ｋと４Ｋでは違うこともあり、すぐにＢＳ４Ｋでの中継を行うことは難しいが、４Ｋの機材の整備を進めるなど、さまざまな問題をクリアした上で、２Ｋとの同時放送についても検討をしていきたい。

劇場の中継はＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋに適したテーマだと考えている。文化振興につながるようなさまざまなジャンルを扱うような番組を今後検討していきたい。

「ＥＴＶ特集」は、２０１９年度も継続して放送していく予定だ。

○　番組が偏った視点で作られることがないよう、その分野に詳しい人に意見を求めるなど、正確で公平な番組づくりをお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

取材制作の直接の担当者とは別の職員や上司、局内で高い専門性を持つ者などが放送前の試写に参加する「複眼的試写を行ったり、提案の段階から危機管理の意識を持ったりするなど、公平公正な番組作りに向けた取り組みを行っている。ご意見は、今後の番組作りにいかしていきたい。

○　最近、「チコちゃんに叱られる」や「よるドラ」など、チャレンジングな番組が多く見応えがあるので、ぜひ続けて欲しい。

また正確で公平、公正な情報を流すことは、ＮＨＫにとって一番の課題であり使命だと思う。インターネットの普及などで、正確なのかどうか分からない情報が飛び交うようになっているが、ＮＨＫは、社会の基盤になるような正確な情報を放送して欲しい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとしては何があっても正確さや公平性は担保していくべきだと考えている。さまざまな情報があふれる中でもＮＨＫは自ら情報の真偽を確かめて放送する姿勢を貫くことを大切にしていきたい。また、「チコちゃんに叱られる」も含め、できるだけ多くの人に見てもらえる番組を放送していきたい。

○　全国のニュースの気象情報で、細かい地域の情報が省略されることがある。ことばで触れなくても画面上に地域の情報を出してもらいたい。

○　土曜日、日曜日になると地域のニュースの時間が減ってしまうのが残念だ。また、その日にあったニュースをテレビでいつでも見られるようになると、視聴者にとって安心感につながるのではないか。

（ＮＨＫ側）

地域の情報をどうやって届けていくのか、非常に難しい問題だと認識している。放送とインターネットをうまく組み合わせて、さまざまな形でニュースなどの情報を届けられるように検討を重ねている。

＜「２０１９年度 東北地方向け地域放送番組編集計画(案)」について＞

○　ＮＨＫニュース・防災アプリは、情報が早く、非常に使いやすい。さらに、各地域の放送局のホームページとリンクができるようになると、地域の情報がより伝わりやすくなるのではないか。

○　東日本大震災を風化させないことは大切だ。震災の経験をしっかり受けとめ、それを生かす、防災や減災につながるような番組をぜひ制作していってほしい。風化防止で終わらせないで、未来につなげるような番組をつくっていってほしい。

○　青森ねぶた祭について、歴史が古く、地元では当たり前になっている文化だが、もう一度見直し、歴史的な背景も含めた番組をぜひ放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

いただいた意見は、今後の放送にいかしていきたい。

○　諮問された「2019年度東北地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、委員の皆さまの意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１５日(土) 映像詩　宮沢賢治　銀河への旅～慟哭の愛と祈り～「前編」(ＢＳ４Ｋ 後 7:30～9:00)を見た。これまでの宮澤賢治像を覆すような展開で、神格化した賢治ではなく、同性に寄せる苦悩の心、妹とし子の切ない思いを知り、怒りを増幅させ、自ら修羅となっていく賢治が描かれていた。ＢＳ４Ｋの映像は「映像詩」という冠にふさわしく、美しい岩手の大地と賢治の愛した宇宙を描いていた。難解な賢治の世界を、本の大胆な解釈を軸に描いていくのは、大変な労力があったと思うが、わかりやすく、かつ賢治らしい透明で深い映像に仕上がっていて感激した。

○　１月１８日(金)あさイチ「プレミアムトーク　村木厚子」を見た。番組が重い雰囲気にならないかとはじめは心配だったが、拘留されている間の家族との面会で、話を聞いていた守衛さんが笑いをこらえていたエピソードなどを楽しく聞き、人が生きていく上で家族がどれほど大事かというメッセージがよく伝わってきた。「あさイチ」の中でもいい企画だった。

○　１月１９日(土)よるドラ「ゾンビが来たから人生見つめ直した件(１)」を見た。町中にゾンビがあふれる状況は危機感に満ちており、恐怖映画のようなドラマなのかと思ったが、生き残った人がゾンビをあまり怖がらず、人間関係や不倫相手といったエピソードにストーリー展開していくのが斬新だった。研究所の火災がゾンビの発生にどう関わっているのかなど伏線がどう扱われるのかが気になり、結末を見たい。

○　１月１９日(土)「ねぶた　美の競演～名人の父と天才の娘～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 6:30～7:29)は、ナレーションを入れず、音楽と映像登場人物の語りと字幕だけの演出が効果的で、今年度見た中で一番いいドキュメンタリーだった。父と娘の言葉の一つ一つが、作家や脚本家には書けない説得力に富んでいた。父と娘の関係を葛飾北斎と娘の応為に重ねながら、互いの信頼や尊敬、葛藤、反発を描いていたが、祭りの裏側にあるドラマに驚きを覚えた。昔のねぶたの白黒ニュース映像や歌舞伎の舞台、

錦絵、北斎の絵画、浮世絵を織り込み、ねぶたの魅力を余すところなく紹介しており、鑑賞の仕方を教わった思いだ。カメラワークもすばらしく、特に祭りが終わった翌日にねぶたを取り壊す最後のシーンは、ひんやりした青森の空気感や寂しさまで映し出しているようだった。昨年８月の「ＮＨＫスペシャル」を再構成した番組だったが、サブタイトルを「父と娘の挑戦」から「名人の父と天才の娘」に変えたのも適切だった。父と娘の個性が際立っていたため、娘さんの夫の存在感が薄く感じられた。もう少し登場する場面を増やしてもよかったかもしれない。

○　１月２５日(金)「あっぷるワイド」を見た。１週間の出来事をまとめて紹介するコーナーはとても分かりやすくていい企画だと思う。また、元気あっぷる体操というコーナーでは、青森県内各地に出向き、地域の元気な人たちを紹介し一緒に体操をしている。振り付けを担当した青森大学新体操部の皆さんのお手本動画が合わせて放送されるが、とてもさわやかでいい。ほかの地域の参考にもなると思うので、全国放送してもいいのではないか。

　また、毎週月曜日に放送している「つながる道南ワイド」は、函館の情報を伝えている。青函連携は、地元にとって重要な話題なので、これからもきちんと伝えていってほしい。

○　１月２６日(土) 土曜ドラマみかづき（１)「輝く瞳」を見た。塾の存在を美化するような内容かと思って見始めたが、教育の理想、塾経営の厳しさ、家族のつながりなど、５回で終わらせるにはもったいないほどの中身が濃いドラマだと感じた。永作博美さんの演技がすばらしく、ドラマ全体をうまく引き締めていると思う。昭和から始まり、現代の問題にどうつなげていくのか、最終回までの展開がとても楽しみだ。

○　１月２８日(月)「はまなかあいづＴｏｄａｙ」で、一時帰国中の駐ルワンダ大使が福島を訪問したニュースが伝えられた。内戦を乗り越えて発展を続けるルワンダは「アフリカの奇跡」とも呼ばれるが、経済復興の側面だけではなく、出身者が毎年決まった日にふるさとへ戻り、悲劇を繰り返さないと話し合っていることを紹介していた点もよかった。お互いに許しあう姿は、大震災を経験した私たちに、子どもたちが安心して眠れる当たり前のことがありがたいのだというメッセージになったと思う。短いニュースだったが全国で放送してほしい内容だ。

○　１月３１日(木) 世界はほしいモノにあふれてる選～旅するバイヤー　極上リスト～「美食の国で“極上の肉”を探す旅　フランス」は、この道３０年のフランス食材のバイヤー石塚奈帆美さんにスポットを当てて、フランスの肉文化の奥深さ伝える番組だった。興味深かったのは、フランスにも地域特有のブランド牛があり、それらをかけ合わせるなど、差別化のために個性を競い合ってしているという点だった。石塚さんが「おいしいものは世の中にたくさんある。さらにその上のおいしさを求めるときに、そこには感動や驚きが必要だ」と話していたが、とても感銘を受けた。

　この番組には、日本人のバイヤーだけでなく、現地コーディネーターが出演することがあるが、その人の紹介がほとんどない。どういう立場の人かもう少し説明があってもいいのではないか。

○　２月１日(金)きんよる秋田「中井精也のてつたび！　由利高原鉄道鳥海山ろく線」は、普段ＢＳで放送されている番組とのことだが、存在を知らなかったので、「きんよる秋田」で初めて知ることができ、楽しく見た。中井さんの大きな体と優しい口調、笑顔が印象的だった。鉄道と人、鉄道と土地といったストーリーも紹介されるので、鉄道にあまり興味がない自分も楽しく見られた。中井さんの笑顔が地元の方の笑顔をうまく引き出しており、鉄道だけではなく人を写した写真も素晴らしかった。流れる音楽も、風景や人の笑顔に寄り添うような優しい歌声がよかった。秋田の冬の鉄道の旅に出てみようと、背中を押してくれる番組だったと思う。ＢＳの番組で秋田が取り上げられているのを知らない方も多いので、そうした番組を選んで持ってくるのはよいと感じた。

○　２月３日(日) 明日へ　つなげよう　証言記録　東日本大震災　第８１回「豊穣(じょう)の海を取り戻せ～闘う漁師　８年の記録」を見た。出荷する魚介類の放射線量を国の基準より厳しく設定しても、あまり売れないという苦境に立たされた漁師たちの静かな怒りが伝わってきた。震災から８年になるが、放射性物質による直接的な被害よりも風評被害がより大きい中で、薄皮を一枚ずつはがすように払拭(ふっしょく)してきた漁業関係者の苦労がきちんと捉えられていた。ナレーションにあった「福島の厳しい現実が置き去りにされていきます」は、まさにそのとおりだ。随所に挟まれる朝焼けの海や、どんよりした曇り空の映像も、テーマを象徴しているようで効果的だった。風評被害を完全になくしていくため、こうした番組を今後も期待したい。

○　２月７日(木)ネーミングバラエティー　日本人のおなまえっ！「おなまえっ！ミステリー」を見た。福島県の檜枝岐村では、互いを名字ではなく下の名前で呼び合う習慣があり、理由として主要な名字が３つしかないことが紹介された。そこから展開し、桧枝岐にその名字が生まれた歴史的背景や、平和で平等な暮らしぶりから「桃源郷」と呼ばれているエピソードも紹介された。住民の思いが少子化対策につながっていることや、水道から温泉が出るという福祉の充実も紹介され、名前を入り口として、地域に夢と希望を与えてくれるバラエティー番組になっており楽しかった。

○　２月８日(金)きんよる秋田「卓のユメグリア　スペシャル」を見た。「ニュースこまち」の中で放送されている、増田卓アナウンサーが温泉を巡るコーナーの総集編だっただが、ゲストのスギちゃんが秋田県民歌を熱唱する姿をほほえましく思いながら見た。金曜夜という家族がゆっくり見られる時間帯で、秋田をもっと好きになってほしいという、コンセプトがしっかりしている番組だった。今は月に１回から２回の放送だが、毎週の放送でもいい。

○　２月９日(土)「東北のパラアスリートにエールを！～Ｔｏｋｙｏ２０２０への挑戦～」(総合 前 11:05～11:54　東北地方)を見た。いつも訪れている仙台放送局の１階がギャラリーや体験コーナーになっているのが新鮮だった。ゲストの篠田麻里子さんの笑顔は明るく好印象だったが、２月なのに服装が半袖にサマーサンダルで、もう少し季節に合ったものでもよかった。会場に展示されているアスリートを描いた迫力ある墨絵は目を引いたし、ステージに向かうスロープに、白地にカラフルな文字で番組タイトルが書かれていたのも明るい雰囲気があった。紹介されるアスリートは、障害のつらさを乗り越え、希望や強さ、夢に向かう姿がしっかり描かれており、高い目標への思いが伝わってきた。質問の仕方も適切だったのだろう。番組を通じて選手や競技を知ることでパラリンピックが盛り上がってほしいし、東北の選手をこれからも追い続けてほしい。

○　２月９日(土)「東北のパラアスリートにエールを！～Ｔｏｋｙｏ２０２０への挑戦～」を見た。選手やゲスト３人の大会に対する思いを聞くことができたいい番組だった。番組を公開し家族連れにも楽しんでもらう形式は「メディア基地」を目指す仙台放送局のコンセプトにも合致している。ゲストのほかにも、東北で活躍が期

待される選手の紹介もあり、これから決まる競技もあるので、この１回で終わらせず次にも期待したい。パラリンピックだけでなく、オリンピックへの出場が期待される選手も東北にはいるので、彼らにも出場が決まる前、決まった後と脚光を当てることで、「東京２０２０」を盛り上げていってほしい。

○　２月１０日(日) ダーウィンが来た！生きもの新伝説「全力スクープ　追跡！クロマグロ大産卵」を見た。タイトルからクロマグロが産卵する現場を取材班が撮影したのだと想像したが、漁師の方がスマートフォンで撮った映像だったので、少し拍子抜けしてしまった。ただ、ほとんど知られていないクロマグロの生態に迫るために、さまざまな取材を続けていて、すばらしいと感じた。

○　２月１２日(火) クローズアップ現代＋「金回りも恋もスコア次第？個人情報格付け社会」を見た。中国企業による個人格付けは、細かい個人情報をＡＩが評価し、そのスコアで受けられるサービスが変わるだけでなく、人生や恋愛にも影響を及ぼすとのことで、恐ろしさすら覚えた。コネや裏金など日本ではコンプライアンスに抵触する案件が横行する中国だからこそ、人を同じ物差しで評価する基準が求められるのではないか。「信用はお金に並ぶ大切なもの」という考え方が、金融の世界だけでなく、個人の関係や恋愛にまで及んでいることにも驚かされた。日本もこれからマイナンバーで個人の情報を全部国が把握する時代になるので、個人情報がしっかり守られるのかが心配だし、日本人も格付けされるような世の中にはなってほしくないとも思った。

○　２月１３日(水) 探検バクモン「山中教授とめぐる京都大学　ｉＰＳ細胞研究所」を見た。脊髄損傷の治療への臨床応用がニュースとして報じられ、重い後遺障害や難病の患者・家族がｉＰＳ細胞に大きな期待を寄せているが、多くの人が実際どんなものなのかを知らないのが現実だと思う。番組では山中先生が研究所を案内し、誰にでもわかるような説明をしてくれた。ｉＰＳ細胞から心筋細胞を作り、それが心臓の鼓動のように動いている様子には目を見張った。また細胞をストックしておき必要なときにすぐに使えるシステムを構築する取り組みも興味深かった。番組は娯楽的な側面もある一方、ｉＰＳ細胞入門のために最適の科学番組だった。

○　２月１３日(水) 「ノージーのひらめき工房　くじであそぼう！」を見た。今回はくじがテーマで、ビー玉を一つだけ出すにはどうしたらいいのか、電池にラーメン

カップをかぶせて動かすと変な動きをするなど、大人から見ると「そこに注目するのか」という不思議な視点でひらめきというものに気づかせてくれる番組だった。きれいにつくることが目的ではなくて、工夫することの大切さ、気づきを大事にしていて、いかにも子どもがつくったぞというような作品ができ上がる。子どもの目線から見ると、これなら自分でも同じものがつくれるかもしれないと思えるので、リアルな遊び活動への誘導という点で、とてもよい番組だと思う。

○　２月１３日(水) ねほりんぱほりん「戸籍のない人」を見た。家庭の事情で戸籍を持てず、３０年ほど引きこもっていた女性が出ていた。支援団体の人に相談し、戸籍をとったということだったが、そのきっかけが 2014 年に放送したクローズアップ現代＋「戸籍のない子どもたち」だったそうだ。テレビの力を感じた番組だった。

○　２月１５日(金) みちたん～ああ！すばらしきセカイ～「厄除け――――――――！！３３回目」を見た。山形県朝日町の非公式ＰＲキャラクター「桃色ウサヒ」は個性がないゆえに、いろいろ要望に応えてくれることで身近に感じられるが、狙ってそうしているのであれば驚くべきことだ。岩手県北上市の「鬼の館」はこれまで知らなかったが、自分の中の鬼を見つめ直すアトラクションは、一度経験してみたい。この番組は、紀行番組なのか、地域紹介番組なのか、バラエティーなのか、区別が難しいが楽しく見ている。普通なら紹介されない場所や出来事を独特の語りで紹介している点がよく、町おこしや地域紹介に資する番組になっていると思う。

○　２月１７日(日) ＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント　第５回「“ノーベル賞会社員”～科学技術立国の苦闘～」を見た。田中耕一さんが受賞後に多くの悩みを抱えながら研究を続けてきたことを初めて知った。控え目でまじめな人柄、研究に対して一途に取り組む姿勢を尊敬している。人間的にできている方だからこそノーベル賞を受賞できたのではないか。国谷裕子さんが本庶佑さんに行ったインタビューで、本庶さんが今の日本の科学技術に対する姿勢や予算配分の問題、博士号を取った後の研究環境への不安を訴え、日本の技術力の将来を憂いていたが、自分の周りにも同じことを言う方が多くいる。ＮＨＫがその問題をノーベル賞受賞者の意見として取り上げたことに重要な意義があると思う。

○　２月１８日(月) プロフェッショナル　仕事の流儀「笑わせたい男の、笑えない日々～新喜劇座長・小籔千豊～」を見た。笑いをとるということはどういうことなのか

を考えさせられる番組だった。小藪さんに密着して、舞台の脚本を作り上げるまでの苦悩の日々を描いていたが、そこから何が見えるのか、もう一歩踏み込んだ構成がほしかった。笑いをとるということの意味をもっと深められればさらによい番組になったのではないか。

○　「〈ＮＨＫ〉2020 応援ソングプロジェクト」のテーマソング「パプリカ」について、子どもたちの間で話題になっている。小学校の行事で取り入れられたり、「パプリカ知っている？」と言うだけで、その場で合唱が始まるほど、なじみのある曲だと感じている。記憶に残りやすいのに聞いていて飽きない曲だと思う。主にＥテレで放送している「パプリカ」のミニ番組は、出演者や演出が違うさまざまなバージョンがあっておもしろい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、１１月４日(日) 目撃！にっぽん「記憶と向きあう～作家・柳美里と高校生～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、２月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出 席 委 員)

委 員 長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜目撃！にっぽん「記憶と向きあう～作家・柳美里と高校生～」
(総合　１１月４日(日)放送) について＞

○　２回ほど繰り返して見たが、番組全体の背景がつかみ切れなかった。見終わった後にインターネットで調べたら、美術アドバイザーや華道家、舞台照明の専門家も関わり、生徒たちはチームに分かれて公演をしたということだった。背景についてもう少し詳しい説明があれば分かりやすかったと思う。

生徒の幼い日の大切な思い出が語られたが、彼らにとっては重要な場面だと思うが、そういう場面だけが編集されているので、全体の重みやその場で演劇を見ていたらもっと心にずっしり響くような思いのようなものが番組からは伝わりにくかった。

今回は柳さんが演劇部の生徒たちの気持ちを引き出し、記憶をたどる作業をしていたが、ほかの多くの高校生にとっても必要なことで貴重な経験になるのではない

かと思った。

○　東日本大震災が発生した当時小学生だった子どもたちが、夏の記憶を少しずつこじ開けていく様子や最後にその記憶を劇で演じるというその作り込みは、大変すばらしかったと思う。番組では、重い迷いを持っていた二人の男子生徒に焦点を当てていた。自分のふるさとに対して、最初は「好きだけど好きな場所がない」と話した広野町出身の生徒。最終的には「建物が建って町の風景は変わったけど、海は変わらなくてきれいって言える自信がある」と言った場面で迷いが少し吹っ切れたようだった。福島市出身で自分には震災を語る資格はないと迷う生徒に対し、柳さんが「距離があるからこそ逆に知りたいという磁力が強い。」と語りかけていた。この二人のエピソードは非常に感動的だった。

○　舞台の制作過程を丁寧に描いた、ドキュメンタリー番組だが、この番組そのものがいいドラマになっていて、共感しながら見た。高校生たちが小学生のときに経験した東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所の事故、避難生活、それから津波で破壊された町に対する高校生たちの思いがストレートに伝わってくる作り方だったと思う。いつも明るく笑い転げているような高校生たちが実は心の底に複雑な感情、封印してきた記憶を抱えていて、それを柳さんがユニークな演劇指導で引き出していくプロセスが感動的な印象を与えた。高校生たちも真剣に取り組んでいる様子がよく伝わってきた。

高校生たちの演劇が番組の中で劇中劇のように描かれ重層的な効果はあったと思うが、もう少し演劇の中身自体が伝わるように、内容説明の部分に時間をとってもよかったのではないか。

○　感想がことばにならないほど感動し泣きながら見た。東日本大震災直後の記憶は、思い出したくない記憶として思い出さないようにしてきたことを改めて思い出させてもらった。自分の記憶を振り返り、その記憶に対じする時間になった気がする。

当事者でなければ震災を語る資格はないのではないかという戸惑いは、多くの人が持ち続けていることだと思う。柳さんが「自分は在日韓国人だけど、韓国語はしゃべれない。だけれどもある思いはある。」という話にとても勇気づけられた。柳さんがすばらしいのは、忘れ去られようとしている現実にきちんと向き合い、付き添って伴走していることだと思う。東日本大震災前の記憶を高校生にもう一度取り戻させながら、彼らが失ったものは何か、この先何を大切にしていくべきかを考えさせ

ていた。過去の変えることのできない出来事として捉えるのではなく、未来を見て、今の自分を考えさせてくれる内容構成になっていて、とてもよかった。

○　柳さんの「聞き手がいれば、そこに向かって悲しみを流すことができる」という言葉が印象的だった。演劇部の生徒たちは、演劇で表現することによって、自分の気持ちを整理して悲しみを流すことができたのかもしれないと思った。広野町出身の生徒の思いと福島市出身の生徒の思いに焦点を絞って構成していたのはとてもよかったと思う。広野町出身の生徒が言っていた「好きなところが思い浮かばない。でも嫌いじゃない」という複雑な気持ちは、避難して町を離れた経験のある人の多くが抱いている感情だと思う。また、福島市出身の生徒が「当事者じゃないから、ほかの人よりも気持ちがわからない」という悩みは、多くの人が抱えている感情だと思う。その悩みに、「距離があるからこそ知りたいと思う気持ちが強くなるのではないか」と柳さんが答えたシーンでは、見ていて少し心が軽くなるような気がした。

演劇が終わった後の生徒たちのやり切った笑顔が印象的だったが、生徒たちが一生懸命表現しているのが演劇全体のどういう場面で使われたのかが全くわからなかった。劇の内容についてもう少し説明してほしかった。

○　この番組は、高校生の気持ちの変化を捉えていたが、同時に柳さんのすばらしいことばもきちんと番組の中で捉えていた。「記憶の中の風景を大切にすることが必要」、「悲しみは聞き手がいればそこに向かって流すことができる」などのことばは、演劇が何をしなければならないのかという柳さんの答えのような気がする。

福島市出身の生徒が、当事者ではないから語ってはいけないのではないかと悩んでいるときに、柳さんは「当事者じゃないから、遠くにいるからこそ、より知ろうと思うんじゃないの」と語りかけた。それこそが柳さんの思いだったのだと思う。

高校生の舞台成果としての番組ではなくて、これは柳さんの思いを描いた番組だったように感じた。

ナレーションの声質はとてもよかったが、アクセントの位置や間合いのとり方をもう少し演出側が指導すべきだったと思う。高校生目線のナレーションとしてはよかったと思うが、柳さんの気持ちを伝えることを考えるともう少し違う人選もあったのではないか。

○　柳さんが３年前に南相馬市に移住したときの背景について、もっと説明があってもよかったのではないか。

高校生たちの素直なことばや様子から、ディレクターが高校生と心を通わせながらいい関係を作って撮影をしていたことが伝わり、非常に好感が持てた。

柳さんのことばをさまざまな場面で取り上げて、上手に使っていたと思う。「記憶の中の風景は棄損されない。それを大事にすればきらめきが残っていく」ということばが印象的だった。柳さんは、東日本大震災を経験した人にこのきらめきを思い出してほしいと思っているのだと感じた。それが癒しや救いになって震災後を生きるということにつながるというメッセージなのだと思った。

○　番組の中で、柳さんの髪型が長かったり、短かったり変化していて、時間の流れがよくわからなくなった。演劇の本番まであと何日など、時系列が分かる情報を画面表記してもらえればもっと入り込んで見られたような気がする。

柳さんの「悲しみは聞き手がいなければそれは流れない。悲しみを孤立させない」ということばが一番印象に残った。また実際に避難はしていないので当事者ではないと悩む生徒に「知りたいという心の磁力がすばらしい」と諭す場面は、柳さんが心で向き合っているのが伝わり感動的だった。

最後に柳さんが生徒たちが乗ったバスを見送る場面で締めくくっていたが、とても温かい気持ちになった。被災した子どもが今高校生になって被災の記憶を語ることができる最後の子どもだということに目をつけたのはとても意義のあることだと思う。

○　高校生の東日本大震災以降の夏の記憶がないということばが胸に残った。子どもに限らず、ふるさとを失った人、ふるさとの景色が変わってしまった人のことばなのだと思う。柳さんは、南相馬市に移住して、生活し、福島の人々の思いに近づこうとしている作家なので、子どもたちの思いや悩みに踏み込めたのだと思う。柳さんの「悲しみは聞き手がいなければそれは流れない。悲しみを孤立させない」ということばに共感した。東日本大震災は、ほかの災害と比べ物にならないくらい被災者の数が多い。そのため自分だけが悲しいのではない、ことばに出してはいけないと、心にふたをし、ことばにできない人が多いと思う。その多くの人の悲しみを理解し、心を解き放せることは重要なことだと思う。番組は、子どもたちの思いや悩みを丁寧にひもとく柳さん、対話の中で悩みながらも今を受け入れ、前に進んでいく高校生の姿と心情の変化を生徒たちの目線で描いていた。最後の演劇の場面では、頑張れという思いで涙が出てきた。今後も多くの人の心に寄り添った番組をお願いしたい。

○　この番組を見て「不条理」ということばが頭に浮かんだ。東日本大震災や原発事故が起きたという事実は、どれほど努力しても変えられない事で、被災者や柳さんにとってもやりきれないことだと思う。在日韓国人の作家である柳さん自身の体験から得た「不条理」をもっと深く掘り起こして高校生たちを鼓舞してほしかった。

人生は不条理との戦いの連続だと思う。大きな苦しみも深い悲しみもいつか思い出にするような人間の強さを柳さんのような影響力の大きな方が発信することは、苦しむ若者の力になると感じた。

（ＮＨＫ側）

演劇の全体像をもう少し知りたかったという点については、一言でストーリーを伝えるのが非常に難しい内容だった。どこまで説明すべきか、かなり試行錯誤したが、説明すればするほど、大切な高校生の気持ちを短くすることになるので、今回は演劇に取り組む子どもたちと柳さんの思いをきちんと積み上げることに集中した。

「悲しみを孤立させてはいけない」という柳さんのことばは、まさに柳さんご自身の体験からきている。在日韓国人ということでつらい経験をたくさんされたが、そこから救ってくれたのが演劇だった。だからこそ高校生にも同じように体験してほしいと思って今回の演劇につながっていった。それをしっかり感じてもらえてありがたかった。

＜放送番組一般について＞

○　１２月２５日(月)～２８日(金)「バビブベボディ」（Ｅテレ 前 9:20～9:30）を見た。８月に放送されてとてもおもしろかったので、新作を見ることができてとてもよかった。今回も貴重な映像がたくさんあり、大変興味深かった。中でも脳の回は、ほかの臓器と違って複雑で目に見えない部分が多いが、シナプスや海馬の役割を子どもにもわかりやすく伝えていたと思う。

○　１２月２８日(金) ＮＨＫスペシャル「女７人おひとりさま　みんなで一緒に暮らしたら」(総合 後 10:00～10:45)を見た。独身の高齢女性たちが、マンションの部屋を別個に購入し、それぞれの部屋を行き来し見守り合う共同生活を実践しており、女性としてすばらしい経歴を生きた方たちの生活を見ることができてとても興味深かった。成功した女性でもさみしさや悩み、不安を抱えていることがわかり、心に

響くことばがたくさんあった。今後もさまざまな試練があると思う。これからどんなふうに生きていくのかなど興味を持ちながら視聴した。

○　１２月３０日(日) Ｙスペ！「長州と会津～明治１５０年　未来への模索～」(総合 前10:25～10:55福島県域)を見た。戊辰戦争で戦った長州藩と会津藩の人々。今も根深い遺恨があるとされ、行政の交流はほとんど進んでこなかったが、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故をきっかけに民間で新しい関係が生まれているという内容だった。過去に左右されず、未来をしっかりと見据えて今の自分たちを変えようとしている高校生たちのまなざし、若い人たちに焦点を当てて描かれていて、希望を持てる内容だった。山口放送局で制作された番組を福島県で放送したそうなので、地域を越えた比較を見せてもらえてとてもよかった。

１２月３１日(月)「第６９回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。福島市の女子ダンスチームが登場したり、嵐が飯舘村を訪ねる企画があったり、東日本大震災の被災地への思いが伝わる内容がありとてもよかった。最後には、サザンオールスターズも出演し、大変な盛り上がりで見応えがあった。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。歌の喜びと力を感じたすばらしい内容だった。北島三郎さん、ＭＩＳＩＡさん、松任谷由実さん、サザンオールスターズなど、ＮＨＫでなければできない共演が見られ、涙が出るほどうれしかった。ところどころ、裏方が映るなどのミスも見受けられ残念だったが、生放送のよさでもあり、ドキドキハラハラしながら見た。子ども向けの企画もあったが、ＮＨＫの放送の歴史の中で子どもの教育はとても重要なもので、それを紅白歌合戦という番組の中で取り入れたことはとても意義のあることだと思う。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」は、演出が工夫されていて、すばらしかった。特に終盤にかけて内容が濃く、さすがＮＨＫだなと感じた。ただ、人によってはにぎやか過ぎてあまりよくなかったという意見も聞いたので、人によって感じるところは違うのだと思った。勝敗を考えながら家族で楽しみながら見られる内容であった。

○　１月１日(火) 新世代が解く！ニッポンのジレンマ元日ＳＰ２０１９「“コスパ社会”を越えて@渋谷」(Eﾃﾚ 後11:00～２日(水)前0:59)を見た。さまざまな業界でトップクラスの３０代の論客たちがディスカッションする番組で、発言内容に片仮名が多く、よく聞いていないと理解できない部分もあるが、内容が多岐にわたって

いて、とても興味深く見た。これからコストパフォーマンスが悪いものや数値ではかれないものに価値が出てくる時代になるなど、共感できる意見がたくさん出た。

出演していた若い世代がこれから日本を背負っていくという意味で頼もしい気がした。

毎回、人選が多岐にわたっていておもしろいので、さらに別の分野の方を集めた番組を期待している。

○　１月２日(水)「究極ガイドＴＶ　２時間でまわるヴェルサイユ宮殿」(総合 1:06～3:05)は、映像がとても美しく、２時間番組だったが、いっきに最後まで見ることができた。コースの案内や歴史、背景など細かい説明もあり、そこに行きたいという気持ちよりも、番組だけでも満足できるすばらしい内容だった。画像の美しさだけではなく、臨場感があり、本当にその場所にいる気持ちになれて、これからのテレビの先を行く番組だったと思う。

○　１月４日(金)ファミリーヒストリー「宮藤官九郎～人の中で人は育つ　亡き父の教え～」を見た。「ファミリーヒストリー」はゲスト本人も知らない家庭の歴史を説き明かしていく番組で、画面の右上に常にゲストの表情を映し出す演出がとてもいいと思う。番組の後半は、父親の人柄に焦点を当てた内容だったが、とても興味深かった。宮藤さんには見せなかった父親の姿を見たときの動揺と驚きが伝わってきた。人を楽しくさせることに長けていたという父親の周囲の評価を宮藤さんも知らなかったようだが、やはり血は争えないと思った。大河ドラマ「いだてん」は、宮藤さんの脚本なので、この番組を見たらさらに興味が増していくと感じた。

○　１月６日(日)大河ドラマ　いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～(１)「夜明け前」(総合 後 8:00～8:58)は、ストーリーの疾走感、爽快感、わくわく感がみなぎっていると感じた。１回目の内容で登場人物を全て出して、視聴者に期待感を抱かせたというのは、おもしろい手法だと思った。綾瀬はるかさんの明るさも際立っていてとてもいいと思った。ぜひ 2020 年の東京オリンピックをさらに盛り上げるような番組になってほしいと感じている。

○　大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～(１)」を見た。前半主役の金栗四三さんは、あまり知名度のない人なので、番組に影響しないか心配だが、宮藤官九郎さんの脚本なので、おもしろくて親しみやすい内容になると期待してい

る。

オープニングの音楽の映像で、「いだてん」の文字の上を３本のピンクの足のイラストがぐるぐる回っていたり、阿部サダヲさんが背広姿で泳いでいたり、東京オリンピックの名シーンが登場するなど、期待感の持てるものになっていた。第１回目は、全ての登場人物が出てきて、人物相関図を見ていないと理解できないのではないかと感じるほどだった。一番印象に残ったのは、金栗さんが走るときのスースー、ハーハーという息の音。大きくなったり小さくなったりする音がマラソンを印象づけるいい演出だと思う。今後の展開がとても楽しみだ。

○　１月６日(日) ＮＨＫスペシャル「サグラダ・ファミリア　天才ガウディの謎に挑む」(総合 後9:10～9:59)は、４Ｋカメラを使ったり、上空からドローンで雄大な景観を映し出したり、ＮＨＫならではの番組だった。芸術工房監督として４０年ほど前から建設に関わってきた外尾悦郎さんを追いかけたドキュメンタリーだった。スペイン人と日本人の感覚は果たしてマッチしているのかと疑問に思いながら見ていたので、なぜ外尾さんがそういう立場につくことができたのかという説明をもう少し詳しくしてほしかった。建築資料がほとんど消失した中で、作り手が工夫をしながらガウディに真摯(しんし)に向き合っている様子がうまく表現されていてよかった。

○　ＮＨＫスペシャル「サグラダ・ファミリア　天才ガウディの謎に挑む」を見た。

今回の番組で、サグラダ・ファミリアを作ろうとしたガウディの意図がはっきりと示されたのがよかったと思う。また、ガウディが路面電車の事故で亡くなったなど、聞いたことがない話が多く、非常に興味深かった。外尾さんが苦悩していた色使いについて、グラデーションがキーワードになると分かったシーンがよかった。

人間が境目をつくっているだけで、自然には境目ない、色使いも境目がないグラデーションにするということだった。「やっと見つけた」という外尾さんのことばが非常に印象的で、外尾さんが制作に邁進する意気込みが感じられ感動した。ぜひ今後も取材を続けて完成までを番組で紹介してほしい。

○　１月７日(月)グレーテルのかまど「新春をことほぐ　花びらもち」を見た。瀬戸康史さんが毎回さまざまなスイーツをつくる番組だが、簡単なものばかりではなく、かなり手の込んだものを作ることもある。今回はごぼうを砂糖と水で煮て一晩漬け込むところからやっていて見応えがあった。毎回、でき上がったスイーツがどれも

おいしそうで、しかも人気のある俳優の瀬戸さんがつくるという設定がとてもいいと思う。

○　１月８日(火)イッピン「悠久の時が生む　漆黒の器～宮城　雄勝石～」を見た。雄勝石の生成過程が図解でわかりやすく説明してあったり、実際に石を削る様子を拡大して撮影してあったり、わかりやすく見せる工夫が番組の随所にあったと思う。
石の盃について、硯が昔ほど売れなくなり、料理用のプレート皿など別の製品に活路を見出していく中で生まれてきた新しい商品だということも詳しく紹介されていてよかった。企業秘密の部分もある中で、石を削る非常に高い技術を持つ工場も紹介されていて興味深かった。石の盃は、2016 年に仙台で開催された７か国財務大臣・中央銀行総裁会議のレセプションで披露されたことや、去年、イギリスのビクトリア・アンド・アルバート博物館のコレクションに収蔵されたなど、エピソードも紹介されるとよかったと思う。

○　１月１１日(金) 東北ココから「宮城で就職を夢みて～アジア系留学生たちの実態～」を見た。外国人労働者の受け入れが、今社会的な問題になっている中で、タイムリーなテーマを取り上げたと思う。主にアジアから留学生が増えているようだが、留学生イコール低賃金の労働力として捉えてしまう悪い傾向が根づいているように思う。政府の明確なビジョンがないままに漫然と留学生を増やしてきたための弊害が出ているのと思う。そういう中でアルバイトと勉強に必死に頑張っている留学生を応援したいという制作側の意図も感じられて、共感できる部分が多かった。この問題は非常に根が深く、どう解決に向かうのかわからないが、このような難しい問題に直球でよく取り組んだと思う。

○　１月１１日(金)「東北ココから」を見た。宮城県にいる外国人留学生が全国で５番目に多いという実態を初めて聞いてびっくりした。留学生の苦労している姿や、留学生を採用したいと考えている企業側に現状を伝えたという面で非常によかったと思う。
留学生の多くは、日本語学校で学んでいるが、卒業してもすぐに就職につながらないので、その先に専門学校を案内されるということだった。その専門学校の知識が採用を考えている企業のニーズに合っているのか疑問もあり、単に問題の先送りをしているようにも見えた。留学生に日本で働いてもらうために、もう少し制度や受け入れ体制を整えてあげる必要があると感じた。

また、留学生を採用したいと思っている企業の意見をもっと出したほうがよかったと思う。今タイムリーな話題で、まさに地元の中小企業の人手不足を解消するためには非常にいいテーマだったと思う。

○　１月１１日(金)ドキュメント７２時間「新宿・音楽スタジオ　ぼくらがバンドを組む理由」はおもしろい番組だった。新宿にある２４時間営業の音楽スタジオに集まるさまざまなミュージシャンの姿を描いていた。アマチュアミュージシャンだけでなく、大学時代の仲間同士や工事現場で働いている人など、さまざまな年代の人が音楽をやるために集まってくる。さまざまな人たちの人間模様が出て非常におもしろかった。音楽スタジオに集まるという設定というのが新鮮で、音楽スタジオが一つのコミュニティーの場になっていることを知ることができてとてもよかった。

○　１月１３日(日)明日へ　つなげよう「西日本広域災害　最後の一人まで」を見た。

災害ボランティアについて、ブルーシートを張るテクニカルボランティア、ボランティアの調整をするボランティア、学生ボランティア、自治体の対口支援などについて分かりやすく取り上げていた。ボランティアというと、力仕事をやりに行くようなイメージが根強くある中で、こういう視点で番組をつくったことはとてもよかったと思う。ボランティアは災害が起きるたびにいろいろな分野が出てきて日々進化していると感じている。ボランティアが自治体や大学、地域住民などとのつながりで活躍できていることを知ってもらえるいい番組だったと思う。

○　１月１３日(日) ＮＨＫスペシャル　東京ミラクル第１集「美食の街　受け継がれる“築地の魂”」を見た。訪れた外国人が驚く、さまざまな東京のミラクル現象を取り上げるシリーズの１回目で、築地を軸に東京の食文化をテーマにしていた。築地の仲卸(なかおろし)の人たちの誇りをうまく引き出して、東京の食文化、ひいては日本の食文化にその人たちの思いが息づいていることがよくわかる内容だった。現代の若者がタイムスリップして戦後の築地に行くという演出になっていておもしろかった。

第２集のテーマは、鉄道ということで、期待している。

○　１月１４日(月) ひとモノガタリ「ハカチョウの涙」(総合 後 6:05～6:34)を見た。

神奈川県横須賀市役所で、引き取り手のない無縁遺骨をできるだけ身内の人に返していくために奮闘する生活福祉課の北見万幸担当課長の話だった。生活保護の人

が増えている今、現場は大変忙しいと思う。それでも人に寄り添うことを大切にしている北見さんは、自治体の中では変わり者だと言われているかもしれない。その北見さんが、自分のさまざまな人生経験を経て、今の仕事に打ち込むようになったということが上手に描かれていたと思う。

○　アニメ「ピアノの森」第１シリーズの再放送を見た。絵がとてもきれいで、ピアノの音もすばらしい。ピアノを弾く部分は、モーションキャプチャという技術で、実際にピアニストが弾いている映像をＣＧで埋め込むという方法をとっていて本当にリアルにピアノを弾いているようなアニメになっていて見応えがある。ピアノの音源も登場人物のキャラクターに合わせて、若手のピアニストや世界的に有名なピアニストが弾いているということで、見どころの一つだと思う。第２シリーズも期待している。

○　「にほんごであそぼ」は、とてもおもしろい番組だと思う。今日の名文、狂言や歌舞伎などの古典芸能を見せながら古文の紹介をするなど、日本語の楽しさを小さい子どもたちに伝えている番組だ。その中に野村萬斎さんや中村勘九郎さんなど人気のある一流の人が登場しているのも魅力的だと思う。鼻濁音がきちんと言えない子どもたちが増え、日本語が乱れている中で、この番組はとてもいい内容なのでぜひ続けてほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１８年１２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、１２月９日(金) 発見！あおもり深世界「けっぱれ！青森の女性社長～元気のヒミツ～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、１月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜発見！あおもり深世界「けっぱれ！青森の女性社長～元気のヒミツ～」
(総合　１２月９日(金)放送）について＞

○　３人の女性社長を紹介していたが、自分で起業した人、親から家業を引き継いだ人、スカウトされた人、それぞれ違う背景を持つ人だったのはよかった。

直売所の社長の村上美栄子さんは、社員手帳を作る、交換日記をするなど独自の工夫をしていて、女性スタッフの心をぐっとつかんでいた。幅広い女性の雇用にも効果的な事例だと思った。老舗料亭のおかみ大舘むつ子さんは、昼の営業を始めたり、外国人観光客を積極的に受け入れるなど、青森の女性のたくましい姿が伝わってきた。地鶏を生産する会社にスカウトされて社長になった北梨恵さんは、３つの名刺で人脈を生かして販路を開拓していた。社外から社長になっているので、社員の声を聞いてみたかった。３人の社長それぞれに部下の男性のコメントが全くなかったことには違和感があった。

○　社長に占める女性の割合が青森県は２年連続で日本一という点にまず驚いた。社長になった経緯は、自分で起業する、親から家業を受け継ぐなどいろいろあると思うが、それぞれ比率も分かるとさらによかった。

直売所を経営する村上さんは、女性の力で地元を元気にするという信念を持っていて立派だと思った。女性の悩みやアイデアを受け止めて、常に女性の働きやすさを意識したという点がよかったと思う。老舗料亭のおかみ大舘さんは、６８歳にして海外からの客をもてなすためにインターネットを使って英会話を習っていて感服した。

スタジオゲストの堤静子八戸学院大学准教のコメントは、的確な内容で好感が持てた。短いながらも核心をついていたと思う。全体的にまとまっていていい番組だった。

○　３人の女性社長の働く姿を丁寧に描いていて、その必死さが画面からも伝わり、見た人にもいい刺激になったと思う。特に、これから就職する高校生や大学生に番組の感想を聞いてみたいと思った。社長と従業員の交換日記や社員のアイデアを何でもやってみる、低価格のランチを料亭が始めるなど、女性の消費者としての視点を上手に経営に生かしている点が紹介されていて興味深かった。ただ、女性社長が多いといっても、まだ１０％ほどというのは、圧倒的に少ないのが現状だと思う。女性の経営者であることの難しさ、苦労、悩みなどの紹介もあるとよかったと思う。

○　女性社長率が 10.6％という数字は、低いと認識している。番組では、青森県に女性の社長が多い理由について、高齢化や後継者不足などの理由で親族から引き継ぐ、また意志の強い女性が多いからと紹介されたが、ほかにも理由があるのではないかと考えながら見た。また、ひとくくりに青森といっても津軽地方と南部地方という２つの文化圏があるので分けて考えてもよかったのではないか。

番組の雰囲気がせわしないと感じた。話す口調や音楽が早いので、内容を理解する前に流れていってしまうように感じた。番組キャスターのＲＩＮＧＯＭＵＳＵＭＥの王林さんは、自己紹介もなく登場したがもう少し丁寧に紹介したほうがよかったと思う。ゲストの堤さんが、最後のまとめで「忘れられない女性社長のコミュニケーション力」が重要だとまとめていたが、男性でも女性でも共通だと思った。

○　大学生など若い世代に見せたい番組だと感じた。三者三様の女性社長像が見事に

描かれていて、新しいリーダーシップのあり方を学ばせてもらえる内容だった。ただ、青森県が全国で女性社長率がトップという理由について、後継者不足と青森の女性の意思が強いという紹介があったが、全国的にも言える傾向で、いまひとつ納得できなかった。単に社長が女性だという話題提供よりももっと踏み込んで、女性の労働力、女性が社会で働く意義まで深めた内容であればもっとよかったと思う。

○　女性社長ということで番組になるということは、数が少ないことの裏返しで、全国的にはまだまだ女性社長は少ないと思う。

試行錯誤しながら作り出してきた女性ならではの経営手法、社員手帳や交換日記をするというアイデアなどがとてもいいと思った。人脈やコミュニケーション力の大切さなどが印象に残った。少子高齢化が進む中で、これからの時代、女性社長や女性の幹部をもっと活用していかなければならないと思う。女性社長の比率はまだ多くても１０％程度。それを増やすためには何が問題で何が必要なのかというところまでもう一歩踏み込んで、番組を制作してほしいと思った。

○　青森は歴史的な経緯から女性社長が多いのではないかと思っている。青森は北前船で近江商人も多く入ってきた土地柄で、家業を引き継ぐときにも独特な考え方があったと思う。そういった歴史的な視点も加えて番組を制作してほしかった。今後、女性がますます活躍できる場が増えることはとても大切だと考えている。

○　青森に女性社長が多い理由について、その分析があいまいで納得いくものではなかった。調査方法や分析の仕方なども明らかにしてもっと詳しく知りたかった。

地鶏生産会社の社長になった北さんは３枚の名刺を使い分けて販路を開拓していたが、その名刺を使い分ける営業方法について、地域性によるものなのか、もう少し深く知りたかった。

王林さんがキャスターとして出ていたが、とてもかわいらしかった。ただ冒頭で自己紹介をしてもいいのではないかと思った。

○　経営者にとってヒントがいっぱい詰まっているおもしろい番組だった。王林さんの方言の入ったしゃべり方は親近感があった。青森に女性社長が多い理由を調査会社の分析結果を元に冒頭に示したのはよかった。最後にまとめで結果を出す番組も多いが、今回は冒頭に出したので、見やすくなっていたと思う。

番組の進行に合わせて、右上にテーマが表示されていたのがよかった。テーマご

とに解説があって、わかりやすかった。見方によっては番組の進行が早いと感じるかもしれないが、テンポがよく、視聴者を飽きさせない工夫が感じられた。残念だったのは、バックミュージックの音量が大き過ぎて、聞きづらく感じた部分があったことだ。概してテンポも構成も非常によく、完成度の高い番組で、青森放送局による青森の情報番組をあえて東北全体で放送したことに納得できた。

（ＮＨＫ側）

今回の番組は、女性社長の活躍を伝えるということが大きな狙いだった。青森県は社長に占める女性の割合が 10.6％と全国一だが、まだまだ少ない。だからこそ女性社長の活躍や女性が地域を元気にしているという事実を丁寧に伝えていくことが大切だと考えている。

青森が女性社長の比率で日本一になった理由について、今回は、大手調査会社が毎年発表しているデータを採用し、その担当者に取材をしてまとめて紹介したが、答えを断定することは難しかった。

キャスターの王林さんについては、地元で親しまれているアイドルでＮＨＫに限らず、青森では公的なキャンペーンなどさまざまな場面に登場していて認知度がある。番組の第１回では自己紹介を簡単にしたが、それ以降はあまりしない形にしている。

この番組は、タイトルの「あおもり深世界」に合わせて、なるべく多くの情報をぎゅっと圧縮してテンポよく伝えていくことを狙いにしているので、せわしないと感じるかもしれない。表面的な伝え方にならないように、いただいた意見を踏まえながら番組制作にいかしていきたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　１０月３０日(火)アナザーストーリーズ　運命の分岐点・選「浅田真央　伝説のソチ五輪」を見た。浅田さんがソチ五輪のフィギュア、ショートで失敗し１６位と出遅れながらも、フリーで生涯最高得点をたたき出す。そのフリーの演技に至るまでの知られざるエピソードを「皇帝」と呼ばれるプルシェンコさんらロシアの名選手たちが証言していた。浅田さんへの尊敬の念やライバルとしての彼女のすばらしさなどが語られていてとても感動的だった。そして最後にノーカットでフリーの演技が流れたが、今見てもジャンプや表現力がすばらしく、多くの人々を感動させる力があったことが改めてわかった。

○　１１月１６日(金)「ものほん　第２回～ウワサの東北見聞録～」は、東北の３つの祭りをとてもおもしろく紹介していた。一番感動したのは、山形の出羽三山の山伏修行。生まれ変わって新しい人生を歩むという深い意味が込められていた。パンサーの尾形貴弘さんがリポーターだったので笑いもありよかった。東北の奥深い文化や歴史的な背景も伝えてくれるすばらしい番組だった。今回は第２回目ということだったので、次回も期待している。

○　１１月２６日(月)プロフェッショナル　仕事の流儀「笑顔のために、私は逃げない～人工ボディ技師・福島有佳子～」を見た。人工ボディのリアルさにとても驚いた。見た目を重視するイメージがあったが、長時間の歩行に耐えられるようにする、指がもつれないようにするという機能面でも細やかな調整を重ねてつくられていて衝撃を受けた。徹底したフルオーダーで、形や色だけでなく表情やしぐさを見て、その人に最も合った人工ボディをつくり出すという点が神業のようで、番組に引き込まれた。福島さんが特別だからできるということではなく、特別に頑張っているからこそできるようになったという視点で番組がつくられていたのがとても印象的でよかった。

○　１２月２日(日）ダーウィンが来た！生きもの新伝説「救世主はフクロウ！青森リンゴ園」を見た。食べ物が少なくなる冬の間、リンゴ園に住み着いたハタネズミがリンゴの木の皮や根を食べて枯らしてしまうことが問題になっていた。そこで農家がリンゴ園にフクロウ専用の巣箱を用意し、フクロウにハタネズミを駆除してもらうことにしたのだ。番組では、巣箱に４Ｋカメラを設置し、フクロウの子育ての様子を紹介していた。農家にとっては農薬に頼らず被害が減らせ、フクロウにとっては獲物の多い場所で子育てができるという双方にいい関係になっていた。自然の摂理の中で、人間の身勝手な部分と知恵の両面を感じることができる番組だった。

○　１２月４日(火)クローズアップ現代＋「宅配ドライバー争奪戦～ネット通販拡大の舞台裏～」を見た。大手宅配会社が当日配送などサービスの見直しや送料値上げに踏み切る中、新興勢力といわれる中堅物流会社が次々と参入し、ドライバー争奪戦が激化しているという話だったが、番組の意図しているところがよくわからなかった。大手ネット通販の宅配業務に新規参入した中堅物流会社の社長のインタビューがあったが、ドライバーの長時間労働やコストの面などで根本的な問題解決

がないままに進めているように感じられて、その発言に違和感があった。北海学園大学の川村雅則教授が「過剰な安い・早い・便利のコストを、ドライバーではなく荷主や物流会社、消費者が適切に負うべき」とコメントしたのでまとまった気がした。

○　１２月４日(火) グッと！スポーツ「華麗に舞う　新体操　フェアリージャパン」は、嵐の相葉雅紀さんがＭＣで、毎回、楽しみにしている。今回は、フェアリージャパンを取り上げていて、実際にスタジオで演技が披露されたり、相葉さんが挑戦してみたりと、単なるスポーツ番組ではない魅力があると思う。スポーツの裏側や選手の素顔が見えるのでとてもおもしろい。

○　１２月７日(金) 再発見いわて「合唱にかける　～水沢高校音楽部　のど自慢からの挑戦～」を見た。水沢高校音楽部が部員数を増やすために去年１１月に奥州市で行われた「ＮＨＫのど自慢」に出場し、チャンピオンに輝いた。その翌年の４月に新入生が７名入って１４名になり、全日本合唱コンクールに出場することができた。最終的に全国大会には行けなかったが、水沢高校としては東北大会で過去最高順位になった。そこまでの苦しみや部員同士の葛藤などを描いた番組だったが、本当にさわやかな印象で終った。非常にいいところに目をつけた番組だったと思う。ナレーションもさわやかな声質でよかったと思う。

○　１２月７日(金) チコちゃんに叱られる！「“三本締め”って何？」を見た。森田美由紀アナウンサーの沈着冷静なナレーションやどことなく昭和の香りのする演出、発想の奇抜さを楽しみながら見ている。「今こそ全ての日本国民に問います」や「そんなことも知らずにやれ～と言っている日本人の何と多いことか」などギャグのようなナレーションに笑わせてもらっている。番組内容に関しては、答えが一言では分かりにくいことがある。今回は、「花」と「鼻」、なぜどちらも「ハナ」という質問で、その答えをチコちゃんが「ぱっと目につくものだから」伝えると、回答者はきょとんとしてしまう。舌足らずな部分も含めて楽しめばいい番組なのかもしれないが、最近、質問自体が苦しいケースが増えてきているような印象も受けている。

○　１２月８日(土)ＥＴＶ特集「キャメラマンＭＩＹＡＧＡＷＡの奇跡」を見た。黒澤明や溝口健二、小津安二郎などの巨匠と組み、「羅生門」「雨月物語」などで数々

の世界的映画賞を受賞した作品を担当した日本映画を代表するカメラマン宮川一夫さん。その作品が世界の映画人によって４Ｋ復元が進み、光と色を取り戻しているという内容だった。４Ｋのすばらしさが、非常にわかりやすく伝わった。こうした番組でよさが伝われば、４Ｋ８Ｋは、もっと普及するのではないかと思う。

○　１２月９日(日) 天皇杯ＪＦＡ第９８回全日本サッカー選手権決勝「浦和レッズ」対「ベガルタ仙台」(総合 後 5:45～6:00／総合サブチャンネル 6:00～8:25 宮城県域)を見た。仙台放送局では、独自で放送していて、地元を応援するいい番組だった。仙台放送局の大型モニターでパブリックビューイングを行っていたが、大画面での視聴は迫力があったと思う。パブリックビューイングを行うことはもう少し宣伝してもよかったのではないか。仙台局の会場のゲストにベガルタ仙台の元監督、手倉森誠さんを招いていたがとてもよかった。試合の解説は全国放送のまま放送していたが、仙台局独自で手倉森さんにベガルタ仙台について詳しい解説をしてもらうとさらに盛り上がったのではないかと思う。

○　１２月１０日(月)あさイチ「鈴木亮平　生出演！最終回直前“西郷どん”スペシャル」を見た。４月からキャスターが博多華丸さんと大吉さんにかわったが、２人とも自然で、話もおもしろく、近江友里恵アナウンサーがほんわかした雰囲気でうまく進行していて、朝の番組にふさわしいいい番組だと思っている。この日は、大河ドラマ「西郷どん」の最終回前のゲストとして鈴木亮平さんが出ていた。渡辺謙さんと相撲をとるシーンの裏話や最後まで緊張感があった瑛太さんとのシーンを振り返るなど興味深い内容だった。話の端々に西郷隆盛がまだ半分残っているような感じもあって、とても楽しくおもしろい番組だった。

○　１２月１１日(火) アナザーストーリーズ　運命の分岐点「ゆとり教育～戦後最大の教育改革～」を見た。2002 年から 2009 年という短命に終わったゆとり教育について、その背景にはオウム真理教による地下鉄サリン事件に見られるような偏差値教育偏重によるゆがんだ人格形成が挙げられていた。学校教育の現場では、七五三と言われていて、小学校で７割、中学校で５割、高校に行くと３割しか学生たちは理解できていないという実態があった。そこから新たな教育観、学習観が出てきたのだが、そこはあまり取り上げられずに、円周率が３だとか、台形の面積を計算できなくなったとか、そんな枝葉末節なところでバッシングにあって消えていった改革だったと思う。2020 年から始まる大きな教育改革でも、生涯学び続けるという当時

うたわれた大切な学力観が貫かれており、真の学ぶ力、学力観が、今も教育改革の中に生きているんだ、というところまで描いてくれたらもっとよかったと思う。

○　１２月１３日(木)ガールズクラフト「クリップが大変身！もこもこイヤリング」を見た。岩手県大槌町で公開収録された番組で、「すてきにハンドメイド」という別の番組のコーナーから毛糸を分けてもらって、その余り毛糸を使ってイヤリングをつくるという内容だった。家に余った毛糸やリボンがあればすぐにつくることができるというのがとても魅力的だと思った。毛糸だとボンドを使ってつくりたくなるが、番組では両面テープを使っていたので、子どもと一緒にやる場合でも手軽でいいと思った。東日本大震災の当時を振り返る番組はもちろん必要だが、この番組のように被災地の人たちの元気な姿を伝える番組もぜひ続けてほしいと思った。

○　１２月１４日(金)東北ココから「わが子と、あたりまえの幸せを～医療的ケア児と家族の日々～」は、取材が丁寧にされていてよかった。児童福祉法という法律が２年前に改正されて、医療的ケア児の教育に関しても行政は支援に努めなくてはいけないという内容になった。でも現実には全然進んでいない。この問題はＥテレの「ハートネットＴＶ」でも何回か取り上げていると思うが、地方でも同じ問題はあるので、こういう問題は息長く取り上げていって、家族を十分に支援できる体制など解決策を模索してほしいと思う。今回は、金曜の午後７時半に放送されたので、多くの人に問題提起することができたのではないか。

○　１２月１４日(金) きんよる秋田「アナトーク　～歴代アナ大集合！～」を見た。秋田局に在籍していたアナウンサー５名がトークショーを行う公開番組だった。会場が満席で県民の関心の高さがうかがえた。民放のバラエティ番組の名前を模したタイトルだったが、会場のお客さんの年齢層からするとあまり必要のない演出だったのではないか。秋田局は、外に出向いて中継をしたり、リポーターが取材に行くことに力を入れているように感じている。今後も公民館や体育館など現地に行って地域の情報を発信していく番組をぜひお願いしたい。

○　１２月１４日(金) 再発見いわてスペシャル「つなぐ　ーいわての芸能ー」(総合 後 7:30～8:42 岩手県域) を見た。とても長い番組だったが、あっという間に過ぎて見入ってしまった。鹿踊りや虎舞を東京とつなぎ、ロックやダンスなど異分野のアートとつなぐ。元ザ・ブルーハーツのドラマー・梶原徹也さんと一関市室根の太

鼓がコラボレーションするなど「つなぐ」というテーマで、全てがつながっていてとてもいい内容だった。ナビゲーターの全日本郷土芸能協会の理事の小岩秀太郎さんが、外からの出会いが新しい芸能を生み出すと説明していたのが印象的だった。民俗芸能は単に守るだけ、伝えるだけではなく、暮らしの中に生きていくことはどういうことなのかという問いかけにもなるいい番組だった。岩手出身のタレント福田萌さんが、番組の中でどんどん成長していく様子が伝わり非常におもしろかった。

○　１２月１４日(金) ドラマ１０昭和元禄落語心中（１０）「八雲」を見た。落語と心中してしまうのかと思ったが、最終的には自分を必要としてくれる大切な人のために人は生きているのだということを教えてくれた番組だった。とても心が温かくなった。また、全１０回を通して古典落語の名作が次々と描かれるので、落語好きにもたまらないとてもいいドラマだった。

○　１２月１６日(日)「ＮＨＫのど自慢　熱唱熱演名場面２０１８」は、これまでの名場面を４５分に凝縮した内容だった。８月に放送した洞爺湖町の「のど自慢」の１２日後に北海道地震が起きたということで、１０月中旬に取材に行って、徐々に観光客が戻りつつあるという状況を伝えるなど、震災復興という意味で洞爺湖を取り上げたのは非常によかったと思う。小田切千アナウンサーと出場者の絶妙なやりとりで会場がどっと沸く。出演者も、鐘が鳴るたびに感情をストレートに出し、涙あり笑いありで引き込まれて見た。それぞれの出演者に物語があり、「のど自慢」を通じてさまざまな人間模様を示し、視聴者の心を引きつけるいい企画だったと思う。長寿番組になる理由が理解できた。

○　１２月１６日(日) ＮＨＫスペシャル「アウラ　未知のイゾラド　最後のひとり」(総合 後9:10～9:59)を見た。同じ日の午後にＮＨＫスペシャル「大アマゾン　最後の秘境」の第１集から第４集のシリーズも再放送されていて見応えがあった。文明化で乱開発が進むと、原住民は消滅するか保護するしかないという中で、文明側から見れば単に取り残されているとしか思えないが、本当にそれでいいのかと考えさせられた。アマゾンは人が入りにくい特殊な地域だということで、改めてアマゾンのすごさ、消滅しつつある大自然というのを考えながら見た。今後も新たな切り口でぜひ続けてほしい。

○　１２月１７日(月)「ニュースウオッチ９」を見た。岩手県雫石町の山あいの地区

で、水道が止まるという話題を取り上げていた。民間の水道運営会社が水を供給していたが井戸水をくみ上げるポンプの電気料が払えず止められる可能性があり、住民が立て替えたことで今回は水道が止まることはなかった。水道法が改正され、水道事業が岐路に立っている中で、重要な話題だ。さらに内容を深めて番組化してほしい。

○　１２月１９日(水)４Ｋ国際共同制作　ブループラネット完全版第２集「深海　最後のフロンティア」(総合 後 7:30～8:15)を見た。目の前に広がる深海の世界、絶対に直接見ることができない世界が４Ｋのきれいな映像で描かれていた。自宅のテレビが４Ｋだったらなおすばらしかったと思う。水中カメラがブクブク沈んでいくときの泡やサメの肌までもとてもきれいで、息をのむ映像だった。豊川悦司さんと仲間由紀恵さんの語りは、映像を邪魔しない、口調も説明も非常にわかりやすかった。もう一度見たいと感じさせる番組だった。

○　「チコちゃんに叱られる」は、回を重ねて慣れてきた感じがあり、チコちゃんとＭＣの岡村隆史さんとのやりとりに遠慮がなくなってきていておもしろいと思う。ＶＴＲのナレーションの森田美由紀アナウンサーが非常に真面目にふざけたことを言う点も回を重ねるごとにエスカレートしているように思う。ＮＨＫにはあまりない雰囲気でおもしろいと感じている。

○　ニュース番組で事件を伝える際に、「腹を刺された」ということばを女性キャスターが使っている場面を見た。「腹部を刺された」などの表現に言いかえたほうがよかったと思う。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１８年１１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、１０月２０日(土)「ウイークエンド東北」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、１２月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜ウイークエンド東北　　(総合　１０月２０日(土)放送）について＞

○　スタジオの装飾が地味で、さみしい印象だった。明るい暖色を取り入れるなど、土曜の朝に合った華やかなスタジオにした方がいいのではないかと思った。また、鉄道の運行情報を伝える画面が、ＪＲ仙台駅の動きのない線路だけの映像で、情報が少ないので工夫してほしいと感じた。「おでかけ天気」のコーナーでは、秋田県由利本荘市の「笹子キノコまつり」が紹介されたが、写真だけで話を進める構成で、映像がないのが残念だった。これから行ってみようと思わせる工夫がもう少しあってもいいのではないか。「東北小さな旅」のコーナーでは、廃校を利用した温泉が舞台で、学校の元教師が常連客で通っている話や、過去の資料も使いながら紹介されていて共感が持てる内容だった。ただ、入浴シーンが長過ぎたと感じた。ことばでも温泉の魅力は伝えられると思うので、別の演出方法を考えてもよかったのではな

いか。

○　天気予報や各地のイベント情報を紹介する番組で、土曜の朝に放送することで、視聴者に役立つ内容だと感じた。鉄道の運行情報は、動きのない映像でさみしいと感じたので、地図を出すなど分かりやすく伝える工夫をしてほしい。「東北小さな旅」で紹介された温泉の話は、とてもおもしろく、行ってみたいと思わせる内容だった。お客が元教師の男性１人しか登場しなかったが、高齢化社会とその地域の現状まで見えてきたように感じられた。全体的にほのぼのとしていて、いい情報番組だと思った。

○　番組タイトルから想像すると、１週間のニュースがまとめて紹介されるのではないかと思ったが、ニュースが３本しかなく、違和感があった。気象情報が、番組内に３回あったが、多すぎると感じた。最後の「おでかけ天気」では、画面の下に各地の天気予報をずっと流すなど工夫があれば、見え方が変わるのではないだろうか。この日は、秋田のイベント情報が中心だったが、東北の他の地域の情報も増やしてもよかったのではないか。「東北小さな旅」は、元教師の話題や、従業員との会話など、心温まる話でとてもよかった。

○　天気予報やイベント情報が充実していて、週末の番組として、とても参考になる。各地の様子を天気カメラで紹介していて街の様子が見えるのでとてもいい演出だ。「東北小さな旅」は、廃校を温泉施設に活用しているという内容で、廃校の魅力がとても伝わってきた。昔の学校通信や写真など、古い資料も使われていて、厚みのある内容で、行ってみたいと思わせる企画になっていた。「おでかけ天気」は、女性キャスターが現地に取材に行っているが、映像は使わずあえて写真だけで構成している点がおもしろいと感じた。平日のニュース番組とは違い、ニュースは短くまとめて、地域の話題をたくさん紹介しているので、休日らしさを感じられる番組だと思う。

○　番組の冒頭に、内容と放送の予定時間が紹介されていて、見る人にとって優しい工夫でとてもいいと思う。気象情報やイベント情報の際、東北各地の様子を天気カメラの映像で見せているが、それぞれの地域の天気が分かり、地域の一体感も生まれているようでいい演出だと感じた。「東北小さな旅」は、廃校が交流の場になっていていい取り組みだと感じた。温泉の定義が紹介されて、勉強になった。「おでかけ

天気」で紹介するイベントを選定するのは、苦労があるのではないかと感じた。特にイベントの多い季節はより大変だと思うが、その地域の魅力が伝わるイベントをぜひ紹介してほしい。

○　土曜の朝の番組にしては、衣装がかたいと思う。全体的に土曜日らしい、わくわくした雰囲気を出した方がいいのではないか。番組のコンセプトが、ニュースの特集なのか、１週間のまとめなのか、週末のイベント情報なのか、明確になっていない。そもそも東北全体の情報をまとめる番組にするのは難しいのではないか。地域の有識者をゲストにするなど、情報をおもしろく伝える工夫があったほうがいいのではないかと感じた。「東北小さな旅」では、温泉の効能の話よりも廃校を再活用した面を強く出した方が魅力が伝わったのではないか。「おでかけ天気」では、キャスター３人が会話をしながら進めるが、テンポが悪いと感じた。内容をもっと充実させてテンポよく進めてほしい。

○　「東北小さな旅」の廃校利用した温泉の話題には感動した。登場した元教師が、はじめは学校が温泉施設になる事に対して、複雑な気持だったが、完成して通ううちに交流が生まれ楽しくなったと語っていた。心の変化をよく捉えていて、人生を感じさせるいい企画だった。各地で学校の統廃合が進み廃校も増えている。学校は、地域の核になる場所なので、今回の温泉施設への再活用は市町村にとってとても参考になる内容だったと思う。天気予報について、各県を５～６カ所にくくって紹介しているが、もっと細かい地域の情報がほしい。画面の下にテロップでもいいので、細かい地域の気象情報を流してほしい。

○　「東北小さな旅」は、廃校を温泉施設に、元教師などその場所に思い入れのある人たちが集う場所になっていてとても心が温まる内容だった。学校だけでなく地元の人にとって思い入れのある建物が、大切に保存され、形を変えても地域に貢献している姿は、見る人を感動させるのだと思った。福島市で映画の撮影が行われているというニュースについて、エキストラへのインタビューもあり、地元の人たちの頑張る姿も紹介されていて、とてもいい内容だった。今回、番組で紹介する話題は高齢者を取り上げるものが多かった。もっと若い人が地域で生き生きと活躍している話題を取り上げてほしいと思った。

○　スタジオの壁の装飾に緑の葉が使われているが、もっと元気が感じられるような

ものにした方がいいのではないか。テロップが水色を基調にしているものが多く、寒々しい感じを受けた。キャスターの衣装も地味な印象で、特に女性はもっと華やかでもいいと思う。全体的にもっと温かい印象を受けるような工夫がほしいと感じた。また、番組のコンセプトが週間ニュースなのか、週末のイベント情報なのか、何を一番集中して報道したいのかが分からなかった。この日は、秋田の話題が多かったが、東北の各地の情報をバランス良く伝えることも必要ではないかと感じた。

○　週末の気分に合った肩ひじ張らずに見られる番組で、民放の華々しさとはかけはなれた素朴な印象を受けた。天気予報も何回かに分けてきめ細かに伝えていて、途中から見始めた人にとっても有効だと思った。「東北小さな旅」の廃校を利用した温泉施設については、増田卓アナウンサーの体当たりのリポートが印象的で、ほのぼのとした地域の温かさが伝わってきた。「おでかけ天気」は、映像ではなく写真だけで構成していたが、他のコーナーと差別化もできてとてもいい演出だったと思う。各県の天気カメラを使うなど、東北各地の様子を均等に紹介しようという気配りが伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

長く続いている番組で、１週間のニュースをまとめて伝えるというコンセプトではなく、ニュースと地域の情報を届ける番組としてやっている。特に最近は、気象情報とイベント情報に力を入れている。土曜の朝は、起きる時間にばらつきがあり、番組の途中から見てもいいように、気象情報は意図的に多くしている。スタジオや衣装は、ほのぼのとやわらかい雰囲気を意識しているが、見る人によっては地味に感じるところもあるかもしれない。ご意見は、今後の参考にしたい。「おでかけ天気」は、以前は提供してもらった写真で構成していたが、現在はキャスターが現地に赴いて取材し撮影してきた写真を使ってプレゼンテーションしている。スタジオで会話をしながら伝える良さを全面に出せるようにしていきたい。今回は、メインの企画が秋田の話題だったので、秋田色が強くなってしまったが、東北６県全ての話題を入れるように毎回工夫している。

＜放送番組一般について＞

○　１０月７日(日)明日へつなげよう「北の鉄人　７年の夢～釜石の復興にかけたラガーマン～」を見た。震災直後から釜石にラグビーワールドカップを誘致しようと奔走してきた石山次郎さんの姿を描いていた。当初は複雑な住民感情や仲間との葛藤もあったが、地道に思いを伝えて実現に向けて頑張る姿に感動した。見ていてすがすがしい番組だった。高橋克典さんの語りもとてもよかった。

○　１０月２３日(火)先人たちの底力　知恵泉（ちえいず)「こんなカッコいい男になりたい　白洲次郎（前編)」を見た。多くの実業家や文化人に愛され、日本の歴史にも大きな影響を与えた白洲さんの人生が描かれていて、とても興味深かった。若い世代では、白洲さんを知らない人も多いと聞くので、2009 年に放送されたＮＨＫドラマスペシャル「白洲次郎」を再放送するなど、歴史も含めてもう少し番組で紹介してもいいのではないか。

○　１０月２４日(水)沼にハマってきいてみた「ハロウィーン特集！女子高生コスプレイヤーＶＳ松井愛莉」を見た。コスプレ沼、フェイスペイント沼、スイーツ沼の３つについて特集していた。どれも「沼」という表現にふさわしい極め具合で、圧倒されるクオリティだった。ただ、内容が自分の日常からあまりにもかけ離れているため、最初は抵抗感もあったが、スタジオのゲストが視聴者と同じ目線でコメントをしていたので、見やすくなっていたと思う。テレビは、自分が知らない文化に簡単に触れることができる媒体だと思うので、この番組のようにさまざまな文化を知る機会を与えてくれることはとてもいいことだと思った。

○　１０月２６日(金）東北ココから「語りのバトン～震災と歩む子どもたち～」は、子どもたちが震災を語り継ぐ中で成長していく姿を描いた番組だった。新井隆太アナウンサーが企画したということだったが、非常に好感度の高い番組だった。語り部の一人が言った「私の中で一番辛かったのは震災から２～３年後なんです」という言葉がとても印象的だった。そして番組の最後のコメントで「心に閉ざされた思いをことばで語る。子どもたちの心が開かれ、進んでいく。語りのバトンです。」というナレーションに本当に感動した。全国放送してほしいと思った。

○　１０月２６日(金)東北ココから「ブルガリアの妖精がやってきた　ホストタウン村山　２年目の夏」は、東京五輪で初の金メダルを目指すブルガリア新体操チームと、そのホストタウンになった村山市の人たちを追いかけた番組だった。単なるホ

ストタウンの紹介にとどまらず、ブルガリアの選手たちの激しい代表争いの様子も描かれていて、スポーツの世界の厳しさもきちんと伝わってきてとてもよい内容だった。また、地元のボランティアの人たちと選手たちとのふれあいも描かれていた。今回は２回目の合宿だったことで、親密さが増している様子もうまく伝わってきた。柴田徹アナウンサーのナレーションで、ところどころに山形弁が入っていて親しみを感じさせる演出だった。ぜひ今後も取材を続けて、続編も放送してほしい。

○　１０月２８日(日)ＮＨＫスペシャル「知床　シャチ　謎の大集団を追え」は、知床に春から夏にかけ繁殖のために訪れるシャチの群れの様子を、２年にわたって追跡取材した番組だった。高精細ドローンカメラも使い、撮影方法にも工夫があって、すばらしい映像だった。知られざるシャチの生態が見えてきて、人間以外の哺乳類、動物の世界でも繁殖のためにさまざまな営みがあるということが分かり、非常に興味深い番組だった。

○　１０月３０日(火) にっぽん縦断　こころ旅～とうちゃこ～　７７６日目　宮城県気仙沼市を見た。火野正平さんが日本全国を自転車で回る旅で、火野さんが出会った人たちと気さくに写真を撮ったり、走りながら歌を歌うなど、自然体でとても親しみを感じる番組だ。各地域の何気ない風景が映るので、地元の人はもちろん、地元を離れた人が見ても懐かしく、地域の魅力を伝えるいい内容だと思う。車で移動して取材するよりも、自転車で取材しているので、地域の風景がよく見えて、非常にいい演出だと思う。

○　１０月３０日(火)クローズアップ現代＋「あなたの資産をどう守る？～超低金利時代の処方箋～」を見た。全国共済農業協同組合連合会の保険の勧誘方法が、自分の実績を上げるためにお客さんをだますセールスになっているという内容で本当なのかと驚きの思いで見た。もっとたくさんの当事者に取材するなど内容を深めて伝えてほしかった。新たな取り組みを始めた金融機関についてももっと広く取材して、さまざまな例を取り上げたほうがよかったのではないか。

○　１０月３１日(水) ガッテン！「放送１０００回！風邪に負けない真の“免疫力”ゲットＳＰ」を見た。放送開始から２３年、話題に欠くことなく続いてきたことを称賛したい。番組が始まった当初は、結論までの過程が長すぎると思うこともあったが、司会の立川志の輔さんの落語を聞いているという感覚で見るようになり、ア

ナウンサーやゲストとのかけ合いも含めて非常に楽しい番組だと感心するようになった。どこまで台本でどこまでアドリブなのか分からないが、立川志の輔さんの司会はこの番組の魅力だと思う。取り上げるテーマは、健康や医療が多いが、食や料理、暮らし全般の話題も幅広く取り上げていて、非常に役に立つ情報が多い番組だと思う。番組のホームページも充実していて参考になる。

○　１０月３１日(水)クローズアップ現代＋「ＡＩがうまい米を作った！～“農業革命”最前線～」を見た。農業の現場に取り入れられた人工知能・ＡＩの最新事情が分かり興味深かった。米づくりの名人の解説とＡＩの農業の様子を対比しながら構成していて、非常に分かりやすかった。先人の経験を無駄にしないで、機械化することによって後世につなげるということは、高齢化が進む中で必要なことだと感じた。人工衛星で赤外線カメラを使い田んぼを撮影することで、味の決め手のタンパク質の割合が分かると紹介していた。そこまでできてしまうことに怖さも感じた。

○　１１月１日(木)「開局まであと１か月！これが４Ｋ・８Ｋだ！」(総合 後 7:30～8:43)は、勉強になるいい内容だった。２Ｋと８Ｋの違いを、小さい文字をアップで映していったときに、２Ｋでは映らないが、８Ｋでははっきり「祝・開局」という文字が見えるという演出がよかった。　　来年始まる大河ドラマ「いだてん」が４Ｋで放送されるということで、その舞台裏が紹介されたが、精細な映像になることで、セットや小道具、化粧にも従来以上の作り込みが必要だという点に驚いた。デジタルリマスターという技術で、名作の映画やドラマが本来持っていたきれいな映像で見られるようになるということで非常に楽しみだ。

○　１１月１日(木)クローズアップ現代＋「“リサイクル破綻”どう解決？～脱プラスチック社会への模索～」を見た。廃プラスチックの輸入を禁止した「中国ショック」によって、日本国内にさまざまな影響が出ていることやマイクロプラスチックという５ミリ以下のプラスチックが、魚や人間の体内にも入り込まれていることなど、プラスチックを取り巻く問題が分かりやすくまとまっていた。今後どうしたらいいのか問題提起をするいい内容だったと思う。

○　１１月２日(金)東北ココから「黒い波　～新たな津波の脅威とは～」を見た。今回の番組で、津波が海底を数メートルも掘り下げて、土砂や汚泥を巻き込んで、しかも速度を速めて陸上を襲ったという事実を初めて知ることができた。震災からあ

る程度時間がたって、ようやく明らかになることもある。新しい研究成果に着目して、そこから得られる教訓を紹介する取り組みは非常に貴重だと思う。ただ、津波肺については、もう少し詳しく死に至るメカニズムを知りたいと思った。東日本大震災を忘れないようにするためにも、これからも取材を継続してほしい。

○　１１月２日(金)「東北ココから」を見た。気仙沼市のシミュレーションの結果から分かった黒い波の正体と、海底が掘り下げられたことによる影響についてわかりやすく伝えていた。実際に津波を体験した方の話と、津波の速さや強さ、そして体内に入ったときの影響などさまざまな角度から説明していて津波の恐ろしさがよく分かった。ただ、最大水位と流速のシミュレーションの映像は、色合いが似ていて、どちらの映像なのか一回では分からなかった。何のデータなのか瞬時に分かるような工夫が必要だと思った。番組の中で、「条件が同じであればどこでも起こり得る」ということばが印象的だった。津波防災の意識を薄れさせないためにもぜひ継続して取材していってほしい。

○　１１月２日(金)きんよる秋田「あきた鉄道出会い旅　～田沢湖編～」は、中川安奈アナウンサーとディレクターが田沢湖線を舞台に名物を探す旅番組だった。地域の魅力が伝わり、鉄道で旅をしたくなるような内容になっていた。　　ただ、今回紹介した場所が、駅から遠い場所ばかりで、鉄道の旅なのに残念だった。鉄道の旅というコンセプトなので、駅周辺で話題を探してほしいと感じた。

○　１１月２日(金) 発見！あおもり深世界「けっぱれ！青森の女性社長～元気のヒミツ～」は非常におもしろかった。社長に占める女性の割合が青森県は２年連続日本一で、３人の女性社長が紹介されていた。なぜ青森で女性社長が多いのかという点を調査会社の分析を元に紹介していたが、もっと違う視点の考察もあればよかった。キャスターの女性が津軽弁を多用しているのが気になった。方言を使うということは、親しみやすさがあっていい部分もあるが、青森県でもみんなが津軽弁を話すわけではないので、もう少し配慮が必要だと感じた。

○　１１月４日(日)にっぽんカメラアイ「ナマハゲとの約束秋田・男鹿」を見た。ナマハゲ役を務める猿田真さんとその一人息子を追いかけた番組だった。全体的なカメラのアングルが子ども目線で、無駄な音楽やナレーションがない演出がとてもよかった。ナマハゲの恐ろしさや伝承することの大切さがよく伝わった。若者がナマ

ハゲになるということは、地域の人たちがその地域の一員として認めたということ。その様子がしっかりと描かれていて感動した。

○　１１月７日(水)クローズアップ現代＋「どう乗り切る？英会話時代」を見た。英語教育の必要性が叫ばれているが、メイドカフェや病院、薬局など、あらゆる生活の場で、今は英語が一つのツールとして必要になってきている現状が分かった。説得力のある内容でとてもよかった。

○　１１月９日(金)「ニュースウオッチ９」を見た。ゆるキャラグランプリで、自治体による組織投票が行われたというニュースの中で、くまモンに電話取材をしていた。くまモンのことばとして、「みんなで大会を盛り上げていきたかモン、僕も会場に応援に行くモン」とテロップで紹介があり大変おもしろかった。真面目に放送したのか、笑いをとることを狙ったのか分からないが、ＮＨＫのニュースで爆笑したのは初めてだった。これからもさまざまな切り口でニュースを伝えていってほしい。

○　「いないいないばあっ！」と「おかあさんといっしょ」は、小さな子どもと一緒に見るのにはとてもすばらしい内容だと思う。子どもの発達に沿った構成になっている。子どもが番組で扱うことばを覚えたり、影響力の強さを感じている。土曜日や日曜日にも、平日と同じような時間帯で放送してもらえると助かる家庭が多いのではないか。

○　朝の連続テレビ小説「まんぷく」は、主人公の前向きさ、明るさ、人を憎まない性格のよさを感じる物語で、見る者を安心させる番組だ。物語のポイントとなる場面に登場するラーメン、この夫婦が将来、大きくかかわっていくラーメンをうまく使っている思う。毎朝、元気に前向きにさせてくれるよい内容だ。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１８年１０月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、１０月１２日(金) 東北ココから「野菜おいしいよ！　～インドから来た２７歳～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、１１月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜東北ココから「野菜おいしいよ！　～インドから来た２７歳～」
(総合　１０月１２日(金)放送) について＞

○　活力あふれる番組だった。就農の壁について、農地をどう借りるかというところから紹介があり、それを乗り越えていくブシャン・アケボノさんの力強さに好感が持てた。農業に希望を感じさせてくれる内容だった。

アケボノさんは、非常に高いコミュニケーション能力を持っていると感じたが、どのように身につけたのか、何かきっかけがあったのかという点が気になった。昔の農業は、どちらかというと無口で黙々と働くというイメージがあったが、現代はコミュニケーション能力も必要な時代だと感じた。

また、ナレーションの声が小さいという印象だった。もう少し大きくした

ほうが聞き取りやすくなったと思う。

○　アケボノさんのことばや行動から、本当に農業が好きだということが伝わってきた。人間として使命感を持ってやる仕事と、好きでやりたい仕事は、一致しないことが多いが、アケボノさんは、それが合致していると思う。ぜひ１０年後、２０年後も取材を続けて、どのような苦労や喜びがあったのか伝えてほしい。

常々、農業系の学校に行っても就農する人が少ないと感じている。農業系の学校に通う学生たちに、将来の目標や何をテーマにして学んでいるのかを聞くなど、就農を後押しするような番組もぜひ作ってほしい。

また、アケボノさんに農地を貸した葛西エミ子さんが言った「農家にとって畑は宝だ」という言葉に心打たれた。ただ、宝であるはずの畑が、高齢化が進む中で、きちんと使えず荒れ放題になっている現実もあると思う。今後、その点もテーマに番組を作ってほしい。新規就農を考えている人に畑を貸せるような組織や仕組みができればいいと思う。

○　インド人の若い女性が農業をやっているという部分に興味を持って楽しく見たが、それ以上に深い意味と問題提起をしてくれた番組だった。農業大学校などで農業を学んでも、実家が農家であれば就農するが、新規に農業を始める人はほとんどいないという現実。さらに農地を借りることも大変で、興味はあっても踏み切れない若者が多いということがよく分かった。印象に残ったのは、アケボノさんの農業を楽しむ姿勢と地域の人と積極的にコミュニケーションをとって協力し合いおいしいオーガニックの野菜を作って届けたいという信念。２７歳でとても若いのに考え方がしっかりしていて感心させられた。この番組を見て、もっと多くの若い人が農業を見直してやり始めることができればいいし、アケボノさんのような日本の若者も紹介してほしい。

お金の話は出てこなかったが、きちんと収支が成り立っているのか知りたかった。農業を始めようと考えている人たちの参考になると思う。

○　楽しそうに農業に励んでいるインド人女性と、地域の人たちがアケボノさんを温かく見守る様子が画面を通じて伝わってきた。アケボノさんが、イベントでカレーをふるまう場面があったが、地域に溶け込んでいる様子がよく

分かるいいシーンで、うまく捉えていたと思う。

一方で、アケボノさんと対照的に、収入面から新規就農に二の足を踏んでいる農業高校や農業大学校の同級生、同窓生たちのためらいも対照的に伝えられていた。農業が今抱えている問題を考える材料になっていたと思う。

アケボノさんが就農できたのは、本人のやる気や強い興味・関心はもちろんだが、家族の影響は大きいと思う。両親と兄がインド料理店を経営し、アケボノさんの野菜を使っていて、家族で生産・加工・販売まで行う、６次産業化になっていた。そういう意味では単なる新規就農ではなくて農業の新しい一つの形をこの番組で見ることができた。

ただ、この一家がなぜ美里町に来たのか、外国籍での農業参入に困難な点はなかったのか、収入はどれくらいなのかなど、もう少し説明がほしかった。

○　全体を通してアケボノさんの人柄のよさが伝わってきて、心が温かくなる番組だった。外国人という立場で日本の農業に取り組む姿を伝える番組だと思って見始めたが、日本人でも、外国人でも、新規就農は、今の日本ではとても大変なことなのだということが分かった。途中からアケボノさんがインドから来たということは重要視せず、一人の日本で暮らす女性が農業という職業で頑張っているという視点で見せてもらった。自分の感覚を大切に野菜づくりに励む姿が印象的で、つくった野菜について直売所でお客さんと話しをしたり、食べ方を教えたり、農業を楽しんでいることが伝わってきた。

「直売所で売っているほかの野菜が安過ぎる」、「欲しい人がいるから無農薬でつくっている」というコメントがあったが、日本人はあまり言わないことで、彼女だからこそ言えたと思う。消費者としては知っておくべきとても大事なことだったと思う。

農地を貸してくれた葛西さんとの話しは、新しく農業を始めたいと思っている人と農地を貸すべきか迷っている人、双方にとってとても参考になる話しだったと思う。

○　アケボノさんの農業が好きでたまらないという感じが画面から伝わってきた。地域の人たちがアケボノさんを支え、しっかりと溶け込んでいる様子など、丁寧に取材をしてつくられた番組だった。

いくつか気になる点があった。１つは、タイトルと内容にギャップがあっ

た点。「インドから来た２７歳」というタイトルだと、わざわざ農業をするために来日したのかと思ったが、実は中学生のときに家族と一緒に来日し、そこから農業を学んでいた。誤解がないようにもう一工夫してもよかったのではないか。また、家族が経営するインド料理店の紹介の際、外観を映していたが、少し長すぎたように感じた。公平性を保つためにもう少し配慮が必要だったと思う。新規就農の難しさについてはよく分かったが、農家になることと農業をすることの違いや日本人と外国人では新規就農の難しさに違いがあるのかなど、もう少し詳しい説明がほしかった。

○　アケボノさんが、１年かけて３０軒以上の農家を回っても農地を貸してくれる人が見つからなかったというエピソードなどから、日本で新規就農することの難しさを問題提起していたと思う。最終的に葛西さんという女性が農地を貸してくれたが、そのことばが印象的だった。「５０年以上守ってきた土地は宝だよ」。先祖代々の土地は貸せない、大事にしたいという日本人の気質を改めて感じた。依然として大規模営農が進まない原因を垣間見た気がする。

アケボノさんの明るくて元気なコミュニケーションのとり方がおもしろかった。農作業中に「楽しいですか」とインタビューされて「楽しそうに見える？楽しいよ」と応える。「楽しそうに見える？」と逆に質問することは、日本人にはできないと思う。直売所では、別の農家の男性に「この人の野菜は高いんだよ」と言われ、アケボノさんは「余計なことは言わないで。一言多い。このおじさんには口では勝てない」と返す。外国人の発想で、そのウイットに富んだやりとりがすばらしかった。

ただ、アケボノさんは家族がインド料理店を経営するなど、恵まれている点もある。地盤も全くなく新規就農する人とは少し違うと感じた。

○　インド人の若い女性が宮城で就農しているということで、話題性は抜群だったと思う。しかし、番組は、インド人女性が日本で就農していることがメインテーマではなく、農業を志す若者、特に農家出身ではない若者が新規に就農することの難しさをテーマにしていたと思う。その難しいテーマをアケボノさんの人柄とインド人とは思えない流ちょうな日本語で、地元の農家と触れ合い溶け込んでいる彼女の姿を通して伝えていた。高くても無農薬にこだわる農業への熱意が地元の消費者から共感を得ていた。アケボノさんの人

柄がよく、熱心に農業に取り組む姿から、そのメインテーマが薄れ、彼女の日常がメインになっていたようにさえ思えた。

東北にとって、農業を初めとする１次産業は、大切なもの。後継者不足の問題、農業だけでは食べていけない、生計が成り立たない現状など、さまざまな問題を抱えていると思う。多くの人にとって１次産業は決してなじみのある産業ではないが、食を維持するため欠くことのできないものだと思う。その問題を丁寧に取材し、伝え、考えてもらうことは、大切なことだと思う。

○　インド出身のアケボノさんから見た日本の農業は、夢のある魅力的な職業だと感じられた。アケボノさんの考え方や行動力は、いま就農を悩んでいる若者や夢を追いかける全ての人へのメッセージのように感じた。一番印象的だったのは、お客さんに値段が高いと言われた時に、アケボノさんがきっぱりと「私の苦労を見ていないのに高いと言わないで」と言った場面。農家が消費者に伝えたい大切な言葉のひとつだと思う。そのやりとりは短くまとめられていたが、大切な本音の場面だったと思うので、もっと聞きたかった。就農して５年でこれだけ農業を語り、切り盛りするアケボノさんの魅力があふれる、元気が出る番組だった。

（ＮＨＫ側）

アケボノさんの日常を通して、新規就農が進まないという問題点が見えてくるという作りにしたが、そこをくみ取って見ていただき、ありがたかった。

アケボノさんのコミュニケーション能力については、カレーを広めたいという思いでインドから日本に移住して、自分で事業を起こした父親の資質を受け継いでいるのではないかと思う。またもともと人とコミュニケーションをとるのが好きだったと聞いている。

タイトルについては、当初、新規就農の難しさを全面に出したジャーナルな番組でいく予定だったが、今回はアケボノさんの人柄を立てた方が自然だと思い、最後で変えることになった。「おいしいよ！」という部分にいろいろ考えていただきたいという思いを込めた。

収支について、家族が経営するインド料理店に卸している部分は

メインではないと聞いている。今、農業だけで成り立つように努力しているところだ。

就農の壁について、農地を借りることは外国籍だから難しいということではない。日本人でもぶつかる壁にアケボノさんもぶつかっていた。

アケボノさんが目指しているのは、野菜を売るだけでなく、つくった野菜を使った料理を届けること。今後も取材を続け、日本の農業が抱えている問題点や６次産業化についても描いていきたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　９月２１日（土）ドラマ１０　透明なゆりかご（１０）「７日間の命」を見た。生死のはざまを描いたドラマで、演出も出演者の演技もすばらしかった。タイトルの意味が最初は分からなかったが、最終回で輝く命と透明な命の重さはどちらも同じというナレーションを聞いてふに落ちた。産婦人科医など医学を志す学生の教材にもなり得るようなドラマだったと思う。

○　９月２２日(土)「ＮＨＫと日テレ同時生放送！テレビ６５年」について。さまざまな番組でＮＨＫと日テレがコラボレーションをしていた。番組を作るきっかけや日本のスポーツ中継の歴史がよく分かった。同じ番組を同時に放送するという企画だったが、どちらを見たらいいか迷ってしまった。面白い企画だったが、あまり話題にならなかったような気する。同時放送したことで強く印象に残る名場面がなかったことも残念だった。

○　９月２６日(水)ＮＨＫスペシャル「“樹木希林”を生きる」(総合 後 7:30～8:43)は、樹木さんの最期の１年間にディレクターがカメラを持って密着取材した番組だった。「何を撮ろうとしているの」と樹木さんに問われたディレクターが、うまく返答できない場面があった。客観的に取材すべき取材者が、自分の悩みや本音を樹木さんに話す場面もあり驚いた。最後まで樹木希林の何を引き出すのか明確に出てこなかった気がする。それに対して樹木さんも

いらだっているのが伝わってきた。ＮＨＫの作る番組は明確な意図があり、きちんと形にしていくイメージだったが、これまでの番組づくりのスタンスを少し外したような気がして、好感が持てた。

○　９月２８日(金)みちたん～ああ！すばらしきセカイ～「男のロマンで２７回目」は、秀作だった。福島の自宅に富士山をつくった男性の話は、他のメディアでも何度か紹介され、存在は知っていたが、今回の「みちたん」は深く掘り下げて紹介していた。作製のエピソード、自分が作製した富士山を見ながら風呂に入ってお酒を飲む場面などがおもしろかった。また、木で魚の彫刻を作る男性は、以前は自宅を占拠する形で展示していたが、きちんと場所を借りて美術館を始めていた。福島では一度は閉館した映画館をかたくなに守り続けてきた男性の願いがかない、全国から見学者がくるようになっていた。まさに男のロマンだと思った。いずれの話題も妻の理解と協力があり、自分にとっての男のロマンとは何かを考えながら楽しく見ることができた。

○　９月２９日(土)ブラタモリ「＃１１３　山形・酒田」は、非常におもしろかった。お題は「山形・酒田はなぜ日本の中心！？」で、それを解き明かしていく番組だった。山形県内の最上川沿いに内陸含めて幕府の天領が点在していて合計すると２０万石あったということ。酒田は風が強く決して恵まれた地形ではなかったが、沖合３９キロ離れた飛島が酒田に船が寄港できないときに、避難港になって重要な役割を果たしていたことなど、今回初めて知ったことがいくつもあり、とても興味深かった。

○　９月２９日(土)「ブラタモリ」を見た。今回、収録日が雨で、タモリさんのテンションが最初は上がっていないように見えた。この番組は、タモリさんが、どんなところに興味を持つのか、いつテンションが上がるのかを見るのも楽しみの一つ。今回は、最後の飛島の流紋岩を見た時に最高潮になっていたと思う。今度は、山形県の内陸部も取り上げてほしい。

○　９月２９日(土)ＮＨＫスペシャル　秘島探検　東京ロストワールド　第２集「孀婦（そうふ）岩」は、ロマンがあり、冒険心をくすぐられる番組だった。孀婦（そうふ）岩は、東京都心から南へ 650 キロの伊豆諸島最南端にあ

る巨大な岩の柱で、高さ 100 メートルの断崖絶壁。なぜ生まれたのか、どんな生きものがすんでいるのか、これまで一度も詳しい調査がされていない場所を２年間かけて取材していた。登頂して岩石を採取したり、潜水撮影をするなど、さまざまな視点から描かれていて目が離せなかった。数百年の間には侵食されて全部消えてしまう場所だということで、今回見ることができて大変勉強になった。

○　１０月３日(水)探検バクモン「東京大学地震研究所　防災・予測の最先端を探る」を見た。地震研究の最前線が図解入りで分かりやすく、感心しながら見た。

スロー地震という新しく観測できるようになった地震の解析で巨大地震の予測精度を上げられる可能性があることや、ミューオンという宇宙からの粒子を使って地下の断層の様子を調べられるという研究が紹介されていた。地震研究は着実に進んでいると感じた。この番組は、毎回バラエティー仕立てで最先端の研究成果を分かりやすく伝えてくれる。このような作りだと、難しい話題でも視聴者の理解を深められるし、研究に対する支援にもつながると思う。

○　１０月５日(日)「のど自慢 由利本荘市」を見た。司会の小田切千アナウンサーさんの進行が柔らかくて親しみを感じた。２０組の出場者のストーリーがバラエティ豊かで、プロポーズする人、翌日挙式の父、闘病の息子さんにメッセージなど、笑いはもちろん、感動の涙もあった。秋田の良さが話や歌からたくさん伝わってきた。優勝した中学生の民謡はとてもすばらしかった。手が震えているところまでしっかり映っていて、緊張がこちらにも伝わってきた。

○　１０月５日(金)東北ココから「再び海へ　～福島　ある漁師の７年半～」を見た。海を非常に大事に思っている漁師の気持ちが手に取るように伝わってきた。漁師は、海の上で魚をとっている姿が一番生き生きしていて、その表情をきれいな景色と一緒にうまくまとめていた。東京電力福島第一原子力発電所の事故で、まだ試験操業しかできない中で、新しい船をつくった小野春雄さんが長男と一緒に漁に出る前向きな姿に励まされるような思いがした。

小野さんは、東日本大震災の津波で弟を亡くしていて、その当時の映像や操業ができない時期の家族の様子など、これまで撮りためてきた映像もあり、番組に厚みがあった。さらに風評被害で、かつて主力だったヒラメが高値では売れなくなったという苦境も紹介されて、福島の漁業の今がよくわかる内容だった。小野さんは、地元の山に毎日登りながら体を鍛えていて、「百歳まで漁師を続ける」と話していて、大変力強い言葉だと思った。

○　１０月５日(金)「東北ココから」は、根強い風評被害の中でも、漁師を続けることを目指す小野春雄さんの姿を７年間追い続けた番組だった。漁業者の９割が漁業を再開するなど、漁師の暮らしも震災前に戻りつつあると思っていたが、実情は、魚価が安いなど、収入が震災以前の３割程度、漁ができるのも週に二、三日程度で、本格的な操業再開の見通しは立っていない。それでも、小野さんは、親子二代でこれから４０年間頑張ると言い、新しい船を作り、積極的に取り組んでいた。「福島の海が元どおりになることを見届けるまでは生きたい」という言葉は心に響くものがあった。

今後も震災の影響や復興に向けて取り組む人々の姿を取り上げる番組を制作していってほしい。

○　１０月５日(金)新日本風土記「下北半島　夏」は、総花的な番組だったよう思う。生者も死者も行き交う境界の地が下北半島だということを描いていたが、そこをもう少し強く出してもよかったのではないか。

「新日本紀行」も「新日本風土記」もテーマ音楽がとても印象深い。番組のテーマ音楽は本当に大切だと思う。そういった観点で、「東北ココから」など、東北発信の番組にも、心にずっと残るようなテーマ音楽があってもいいのではないかと思う。

○　１０月６日(土)ＮＨＫスペシャル　マネー・ワールド～資本主義の未来～第１集「お金が消える！？」は、大変勉強になる番組だった。内容が盛りだくさんだったが、司会の爆笑問題の２人が視聴者の目線で質問しながら進行していて分かりやすかった。経済学者の安田洋祐さんとＩＴ企業社長の佐藤航陽さんがゲストだったが、説明が明快でとてもよかった。ポイントカードやモバイル決済、仮想通貨の拡大で世界中から現金が消えていくという現実

や時間の交換に着目した時間通貨という新しい通貨が誕生していることなど、内容の濃いよい番組だった。

○　１０月７日(日)バリバラ「相次ぐ大規模災害　障害者は…」を見た。北海道胆振東部地震や西日本豪雨について、障害者の視点から災害を考える内容だった。北海道の地震では道内全域にわたる停電で、エレベーターが使えず、車椅子の方の避難が遅れたという事例。西日本豪雨では、精神障害者が通う作業所が被災したことで、障害者の長期の避難や支援の難しさを紹介していた。障害者が助けてもらうだけではなく、地域の一員として災害時の対策を考えるなど、復旧・復興を一緒に頑張ることの大切さ伝えていた。ふだん障害者とつき合いがない人にも知ってもらいたい内容だったので、この番組以外でも取り上げてほしいと思った。

○　１０月１０日(水)と１１日(木)の「もりすた！」を見た。仙台局の公開スタジオからの生放送で、外光も入り明るい印象だった。若い女性アナウンサーとキャスターの２人で進行していて、フレッシュな感じがした。進行の役割が明確ではないところもあり、もう少し工夫してほしいと思った。また、全般的に声のキーが高い気がして、落ち着きがないようにも感じられた。

「教えて！ろっけん」というコーナーが２日間続けて山形の話題だったが、東北６県向けの番組なので、日替わりで各県の情報を紹介した方がいいのではないかと感じた。番組冒頭で、各地の天気カメラを使って外の様子を伝える場面でも、２県ほどしか紹介がないので、６県の様子があるといいのではないかと思った。

○　１０月１０日(水)クローズアップ現代＋「追跡！スルガ銀行問題～超低金利時代の“闇”～」を見た。優良銀行とされてきたスルガ銀行だったが、ノルマ達成のためにはどんな手段を使ってもいいというパワハラがまん延し、その結果、営業現場の暴走につながったり、審査機能が働かず案件の９９％が承認されていたり、今回の問題が分かりやすく解説されていた。この番組を通じて銀行の役割を改めて認識した。また個人投資家に対しても警鐘を鳴らすよい内容だったと思う。

○　１０月１０日(水)ｕ＆ｉ＃１「授業に集中したいのに…(感じ方のちがい)」は、発達障害のあるクラスメートを理解するのを助けてくれる内容だった。子どもに多様性を認めることを教えるのはとても難しいと思う。番組では、身近な話題から「そういうことで困っている子もいるのか」という気づきや「どう接したらいいのだろう」と考えるヒントが分かりやすく説明されていた。中でもカレーの辛さを例えにした感じ方の違いについては、辛いと思う人もいれば、ちょうどいいと思う人もいるということが、子どもにもよく分かったと思う。親子で見たい番組だと思う。

○　１０月１３日(土)ＮＨＫスペシャル　ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン　第３回「健康寿命」は、マツコ・デラックスさんと有働由美子さんの掛け合いがおもしろい番組だった。ＮＨＫが開発したＡＩが健康で長生きするために３つの提案をしていた。１つ目が読書、２つ目がひとり暮らし、３つ目は地域の治安をよくすること。今までの発想とは違う視点だったことで、専門家が思いも寄らないポイントを指摘していた。体の健康だけではなくて精神的な健康が大切、無理やり体を動かすのではなく、自然に動くようにすることがいいということだった。さまざまな観点から分析をされていて、おもしろかった。ＡＩが、膨大なデータを解析していく過程も見てみたいと思った。

○　１０月１３日(土)有田Ｐおもてなす「Ｐｒｏｄｕｃｅ　２１　十朱幸代」を見た。司会の有田哲平さんがプロデュースして、お笑いライブを開催したり、クイズを出して答えてもらうなど、ゲストをおもてなしする番組だった。芸歴６０年の十朱さんの生き生きとした姿が印象的だった。今後も視聴者を引きつけるようなゲストを登場させてほしい。

○　１０月１５日(月)プロフェッショナル　仕事の流儀「何度でも、立ち上がれ～バレーボール全日本女子監督・中田久美～」見た。オリンピックのメダル獲得という大きな使命を持って監督に就任した中田さんの苦悩をうまく捉えていたと思う。「心が折れてなんぼだ」ということばが印象的だった。さまざまな経験や努力をして、成果を出してきた人のことばは心に響くものがある。努力してもなかなか成果が出ないことも多いが、この番組を見て成果が

出るような努力をしていきたいと励ましてもらった気がする。

○　朝の連続テレビ小説について。「カーネーション」や「べっぴんさん」、「半分、青い。」などでは、主人公の女性がものづくりに一生懸命取り組む姿が題材になっていた。今回の「まんぷく」もインスタントラーメンを開発するまでが描かれる。今、日本のものづくりは、衰退していて、企業も減っているので、若い世代にものづくりのおもしろさを伝えるようなドラマを今後もぜひお願いしたい。

○　アナウンサーは正しい日本語を普及するという大きな使命を持っていると思う。一字一句、気をつけて発音していくべきだと思う。特にＮＨＫのアナウンサーには強く意識して、若い人の手本になるような、ことば遣いをしてほしいと思う。ことばは時代で変わっていく流動性のあるものなので、正しいことばづかいを常に意識してほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年９月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成３０年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成３１年度の番組改定について意見交換を行った。９月７日(金) 東北ココから「原発事故　命を脅かす心の傷」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜平成３１年度の番組改定について＞

○　自然災害が増える中、防災意識・減災意識・危機意識を喚起する番組をこれまで以上に放送してほしい。角度を変えて、繰り返し放送することで、視聴者の意識を変えてほしい。

スポーツ中継の中で、人気のあるバドミントンや卓球の放送が少ないと感じている。日本人選手が活躍しているので、もっと多くの試合を放送してほしい。

１２月１日からスタートする４Ｋ・８Ｋの本放送については、多彩な番組を企画し、民放との差別化をはかり、高水準の放送を目指してほしい。

○　異常気象が頻発しており、気象情報がさらに大切になってきている。予報の精度が年々上がってきていると感じているが、より詳細な地域の予報、数時間後の予報など、きめ細かく正確な情報を今後もお願いしたい。

民放も含めて、生放送、生演奏の歌番組が少なくなっている。その中で、「うたコン」は、ライブ感覚でゆったりと楽しめる番組だ。このような歌番組は、今後も継続してほしい。

「のど自慢」は、長寿で人気もある番組だ。ぜひ地域向けに「のど自慢」のような番組を作って、地域を盛り上げてほしい。

○　平日に比べると土曜日、日曜日、祝日はニュースが少ないと感じている。ニュースは暮らしに欠かせないものであり、休日であってもニュースをもっと放送してほしい。

ラジオ第１で、土曜日、日曜日の夜に、若者向けの番組があるが、芸人に頼り過ぎることなく、もっとＮＨＫとしての品格を大切にした番組づくりをしてほしい。

○　４Ｋ・８Ｋでは、舞台、美術作品など芸術に関する番組をぜひ放送してほしい。視聴率が低くても、質の高い番組を作れるのはＮＨＫの良さだと思う。

＜東北ココから「原発事故　命を脅かす心の傷」

（９月７日(金)放送）について＞

○　東日本大震災から７年半経ち、風化が進む中でこのような番組をＮＨＫが作ることは重要なことだ。番組の中で、東京電力・福島第一原子力発電所の事故で家に帰れない人と、津波で家を失って家に帰れない人の心の傷の違いがどこにあるのかが分かりにくかった。実際に避難した人の中で、心の傷が原因の関連死の数字が分かればはっきりしたのではないか。また、年齢や性別によって影響の受け方は違うと思う。その中でも若い人は新しい土地に移ってすぐに次に向かって動く人もたくさんいると思うが、一方で、立ち上がれない人もいると思う。その違いがどこにあるのか、今後検証してほしい。

最近、自然災害が多く、帰宅困難になっている人が多くいる中で、東日本大震災での教訓を生かす番組を放送してほしい。

○　番組の中で、東京電力・福島第一原子力発電所の事故の影響で、５０年間続けていた畜産の仕事をやめざるをえず病気になってしまった男性が登場した。その方が、子

牛をまた飼うことで心の傷が癒され笑顔を取り戻す様子が描かれていてとてもよかった。

今回の番組で、フラッシュフォワードと呼ばれる原発事故特有の心理現象が被災者の心身をむしばんでいることが紹介された。しかし、その対策については、国の政策が必要だとまとめていて、具体的な提案がほとんどなかった。１０年先、２０年先を見据えて、若い世代から精神科医やソーシャルワーカーを育て、心のケアに結びつけるなど、具体的な提案が必要だと思う。一歩、二歩、三歩と踏み込んだ提言を行う番組をお願いしたい。

○　番組の中で、乳牛を飼えなくなり、避難先で病気になった人が、また子牛を飼い始めたときに見せた笑顔が、非常によかった。あのシーンを捉えただけでも、この番組の価値があると思えるほど、いいシーンだった。私たちにとって生きがいがどれほど大事かということが伝わった。

東京電力・福島第一原子力発電所の事故で、住民の帰還が遅れた原因の一つは、年間の放射線量１ミリシーベルトという基準を目標に除染を進めていることがあると思う。基準が厳しすぎて、膨大な費用と時間がかかり、住民の帰還も遅れ、長期間の避難でストレスが高じて病気になってしまうという悪循環に陥ったのではないか。除染費用をそれほどかけずに住民の支援に回して、住民の帰還を早める、そういう選択肢もあったのではないかと思う。

また、心身を病んだ人たちの回復のための支援策、今後の対策について、もう少し具体的な提案がほしかった。

○　東京電力・福島第一原子力発電所の事故と、一瞬に人生を奪われる津波、それぞれに起こる心身への影響の違いについて、もっと説明がほしかった。対策については、臨床心理士の方から心をほぐす活動を通じて生きる力をつけていくことが紹介されたが、もう少し具体的な事例や解決方法に踏み込んでほしかった。もっと社会がやることがあるのではないかと感じている。社会的な弱者や行き場を失った人たちが文化芸術の活動を通じて社会に復帰していくなど、社会的包摂活動という視点も必要ではないか。もう一歩進んだ提案を、次の番組で出してほしいと思った。

○　東京電力・福島第一原子力発電所の事故によって避難を余儀なくされた方々の心の傷の深さを改めて考えさせられた。精神科医が「かつて経験したどの災害よりもメンタルのトラウマのリスクは高い」という言葉が印象的だった。原発事故特有のストレ

ス、フラッシュフォワードについて説明されたが、あいまいで未来が見えない状態が長期間続くことは、想像を絶するストレスなのだと思う。

具体的な解決策は難しいと思うが、次に同じような災害が起きたときにどうしたらいいのかという点も考慮して番組を放送してほしい。

心理的ストレスが大きい人は家にこもりがちで外からは見つけにくい中で、取材に応じた方々に感謝したい。テレビ番組という媒体で現状を伝えたことで、これからの支援や教訓として伝えていくことにつながると思った。

○　番組に登場した方々が、率直にインタビューに答えていたのが印象的だった。制作者の真摯（しんし）な姿勢があったからだと思うので、その大きな努力に感心した。

フラッシュフォワードということばを初めて知ったが、その研究が進み、心の傷を抱えた被災者の方々が前を向いて踏み出す力につながってほしいと思う。

今回の事例について、被災された方の中で、心の傷を抱えている人はどのぐらいいるのか、数字で示してほしかった。また、原発事故や津波被害について、補償金が出ていると思うが、その金額は将来への不安に見合うものだったのか、見合わなかったのかという点も知りたかった。お金のことはデリケートな問題だが、今後、検証してほしい。

津波被害の場合は目に見える形で復興していくと思うが、原発事故の場合は目に見えない放射線での影響がこれからも続く。震災からの復興は、原発事故と津波被害の両面から伝えていってほしい。

○　絶望から死に至る、ストレスが命を奪うという、とても胸が締め付けられるような内容だった。目に見えない心の傷は、自覚がある人、ない人も含めると数え切れないのではないかと思う。「原発さえなかったら幸せだった」という、夫を亡くした女性のことばが心に深く残った。

震災から７年半が経ち、福島では震災関連死が今も増加しているという現実に驚いた。フラッシュフォワードという生きがいを失った見えない未来への不安に対しては、明確な解決策が番組の中から見えなかったが、課題を提示してくれたと思う。

番組の最後が、アナウンサーのコメントで終わったが、スタジオゲストの臨床心理士の成井香苗さんが話す時間をもう少し取った方が、真意が伝わったのではないかと感じた。

○　東日本大震災で、なぜ福島だけが震災関連死が増加しているのかと考えたときに、

東京電力・福島第一原子力発電所の事故が現在進行形であることが大きく影響していると思う。ふるさとに帰れない人々の思いが描かれていて、ふるさとの土地がいかに大きな意味を持つか、改めて考えさせられた。

福島の住民はフラッシュバックとフラッシュフォワード、過去と将来の二重の苦しみの中にいることをこの番組を通じて知った。ハード面での復興も時間と費用を要するが、心の復興はもっと時間を要すると思う。東京電力・福島第一原子力発電所の事故は、その地域の住民、地方自治体、東京電力だけの問題ではなく、国の問題として取り組んでいかなければならないと改めて感じさせられた。

(NHK 側)

津波の被害と東京電力・福島第一原子力発電所事故の被害、それぞれの心の傷は、実際どう違うのかという部分について、今回は深くは取り上げなかった。

原発事故の問題を番組で取り上げるときに難しいのが、補償金がどうなっているかという点。金額を言うと、その登場人物に対して関心を失ってしまう視聴者がいるのではないかという恐れがあった。また取材している実感として、補償金をもらっているからといって、償ってもらっていると思えない部分もある。そういった理由から補償金については触れづらいところがあり、いつも頭を悩ませている。指摘いただいたことは今後も番組をつくる上で考える材料にさせていただきたい。

今回、震災関連死が岩手、宮城に比べて突出して多い福島で、何が起きていたのか、その原因を解明するために、心の問題に直面している現場を徹底的に取材した。現時点でわかるところまで紹介したので、具体的な対策について踏み込めていなかった。今後、チェルノブイリ原発事故のあとに確認されたフラッシュフォワードについて取材を進めて内容を深めていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　８月１３日(月)～１７日(金)の「バビブベボディ」(Ｅテレ 前9:20～9:30)を見た。実際の臓器の映像がふんだんに使われており、子どもだましではなく、大人も大変興味をそそられる内容だった。さまざまな研究所や医療機関から集めた高精度な映像で、体の中はどうなっているのかという子どもの興味を引きつけていた。５回で終わってしまうのはもったいなく、他の臓器についてもぜひ制作していただきたい。

○　８月１５日(水)のＮＨＫスペシャル「ノモンハン 責任なき戦い」(総合 後7:30～8:43)を見た。番組は「日本軍の死傷者は約２万人に上り、ソ連とモンゴルの連合軍に惨敗を喫した」との紹介で始まったが、途中で「ソ連軍の死傷者は２万７千人」というナレーションが入り、実はソ連軍の死傷者のほうが多かったのかと驚いた。この戦闘に関しては、旧ソ連が崩壊後に次々と歴史資料が明らかになり、従来言われていた日本側の一方的な大敗北ではなかったという指摘を読んだ記憶があった。そこでインターネットでざっと調べたところ、この戦争を、日本側の旧式の装備や人命軽視の軍の古い体質、あるいは日本軍の無責任体質、といった視点からだけ見ると若干バランスを失する気がした。現在から過去を見ると、つい昔の歴史を断罪する方向になりがちだが、次々明らかになっている新しい事実を踏まえ、冷静に歴史の教訓をくみ取る、そういう態度も必要ではないかと思った。

○　８月２１日(火)の境界調査バラエティー　ニッポンのワケメ」(総合 後8：15～8:43)では、菊の花を食べるかの分け目を探る中で、菊をよく食べているということで山形を取り上げていた。番組には８人ほど芸能人が出演していたが、最近、ＮＨＫのバラエティーは出演者が多いと感じるときがある。あまりに多いと単なるにぎやかしになり、散漫になるのではないかとも感じた。

○８月２４日(金)のきんよる秋田「ザ・ディレクソン　ｉｎ秋田」(総合 後7:30～7:57 秋田県域)を見た。「ザ・ディレクソン」という番組を初めて見たが、地域の若者たちのアイデアで番組作りをするもので、司会が南海キャンディーズの山里亮太さんだったことに驚いた。秋田の若者が本気で番組作りをしている姿がうれしく、過疎など暗いニュースが多い中で、それを覆すように、都会に離れていく人たちを引き戻したり、ストップをかける起爆剤になっていくのではないかと思えた。各県が全部出そろったら、全国大会をしてほしい。自分たちのアイデアでＮＨＫが番組を制作してくれるのはすごいことだ。参加型の大変楽しい番組だった。

○　８月２４日(金)のきんよる秋田ＳＰ「選手出演！ありがとう！金足農業」(総合 後7:57～8:42 秋田県域)を見た。夏の全国高校野球選手権大会に出場した、吉田投手以外全員の選手がひな壇のように並んで出演していた。選手がそろって生出演するのは秋田放送局ならではで、地元はやはりすごいと思った。高校生たちは緊張した面持ちだったが、飾ることなく純粋で、生き生きとしていた。番組は映像を流してインタ

ビューという構成で、とても分かりやすく、試合の流れやそのときの感動がよみがえるような作りだった。司会は、ふるさとリポーターとして甲子園に行った中川杏奈アナウンサーで、感情のこもった司会ぶりだった。中川さんのほんわかとした雰囲気が、緊張した高校生を和らげていた。サムライポーズの秘話や急成長の秘密など、監督や選手の口から真実を非常にうまく引き出していた。ただ、生放送ということもあり、時間切れで、最後が慌ただしく終わってしまったのが残念だ。この番組は全国放送したのだろうか。２億円超える寄付金が集まり、選手たちは感謝の言葉を伝えたいだろう。選手たちの言葉が伝わる全国放送を期待している。

(NHK 側)

８月２６日(日)にＢＳ１で全国放送されたので、選手の声も全国に届いたかと思う。

○　８月２４日(金)の新日本風土記・選「廃墟（きょ)」見た。廃墟と遺産をどう考えたらよいのかと思いながら見た。今、岩手県大槌町で、津波で大勢の方が亡くなった役場庁舎の撤去をめぐり、裁判闘争にまでなっている。負の遺産で壊さなくてはならないのか、残しておくべきなのか、廃墟との違いは何かと考えた。番組で、「これは夢の跡だ」という表現があったが、それを見捨てたのは社会なのか、自分なのか、時代なのかということを深く考えさせられた。

○　８月２５日(土)の「秋田大曲　全国花火競技大会２０１８」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後6:50～9:50)を見た。ＮＨＫの映像で壮大な花火の全体像を見ることができ、非常によかった。カメラがあちこちに配置されており、番組では花火を横からの映像で見せていたり、また、祭りの最後の光景、花火師が対岸でたいまつを灯したのに対し、観客がペンライトで応えるシーンが非常にきれいで、感動的だった。全てに花火師の説明が入っているのもよかった。

○　８月２６日(日)のＮＨＫスペシャル「ねぶた２０１８ 父と娘の挑戦」を見た。本当に楽しく、ねぶたの見方が変わったような気がする。絵師について深く描かれていたが、棟方志功をはじめ、これまでの絵師たちがどのような違いを持ってねぶたを作っていったのかが分かれば、さらによかったと思う。

○　８月２６日(日)の古典芸能への招待 高麗屋三代襲名披露「口上」・歌舞伎「勧進帳」

を見た。これは大変勉強になった。私は歌舞伎が好きで、伝統芸能だけにはとどまらない表現力を持つ舞台だと思っているが、その中で、襲名とは一体何なのか、襲名すればうまくなるのかと、ずっと疑問を持っていた。番組のインタビューで、「紋がかわれば自分も変わる」という表現をされていた。ＮＨＫの中川緑アナウンサーが引き出した言葉だったが、私にとっては大きな収穫だった。

劇場中継が減っているように思うが、４Ｋ・８Ｋの時代になると、舞台物やスポーツの映像はより違った形で見えてくるのではないかと思う。美術作品もしかりで、そういった芸術に対する４Ｋ・８Ｋの取り組みもしていってほしい。視聴率を気にせず、しっかりした番組を作るのがＮＨＫのよさだと思っている。ドラマや歌番組、バラエティー番組などは視聴率を競ってよいと思うが、ドキュメンタリーや本当に残しておきたい日本を描く番組は、視聴率が低いからと潰さず、ぜひ残してほしい。

○　９月１日(土)ＮＨＫスペシャル　ＭＥＧＡＱＵＡＫＥ「南海トラフ巨大地震　迫りくる“Ｘデー”に備えろ」を見た。関東大震災の発生に由来する防災の日にちなんだ放送で、機をとらえていた。防災の大切さを広く知らしめることはとても重要で、ＮＨＫの使命だと思い、視聴した。

今回の番組では、今、警戒意識が高まっている南海トラフの危険性と危機感を改めて認識させられた。最悪３２万3,000人の死者、1,410兆円の経済損失が想定され、まさに亡国の危機とも言える大災害である。この被害をいかに小さくするか、国を挙げて取り組まなければならないことだと思う。

番組では、震源域で発生し続けるスロースリップの危険性が分かりやすく説明され、また、国が昨年１１月に制定した「臨時情報」について、その受け止め方の難しさを再現ドラマでより分かりやすく伝えていた。

○　９月２日(日)のいつか来る日のために　証言記録スペシャル「震災を伝える」(総合 後5:05～5:54)を見た。各地に残る震災遺構が、今、保存か解体かでかなり考えが分かれ、次々と痕跡がなくなっているとのこと。震災の教訓をどう伝えていくのか、次に来る災害にどう生かすのかが重要になっているという内容で、宮城県のさまざまな事例や取り組みが紹介された。

先日イギリスから友人が来て、震災遺構はどこを案内するのがよいのだろうかと考え、荒浜小学校を案内した。震災当時の映像や震災以前の昔の写真など、いろいろな資料があり、かつ英語のパンフレットや説明もあった。当時、小学校の周りに津波が到達したときのビデオが上映されており、友人は半分涙ぐんで見ていた。実際に津波

の恐ろしさや何が起きたかということを説明するのに、実物や現場で見るというのは非常に大きいと感じた。被災地でも震災を知るのにどこに行ったらいいのか、語り部の方がどの辺にいるのかなど、あまり知らない。こういう番組で紹介するのは非常に重要だと思った。サンドウィッチマンとカンニング竹山さんがゲストで、難しい問題を柔らかく伝えており、とても見やすかった。

○　９月３日(月)からスタートした「趣味どきっ！　茶の湯　表千家　清流無間断」を毎回楽しみにしている。なかなか知ることができない家元の様子を番組を通して見られるのはとてもうれしい。緊張感をもちつつも、お茶を楽しんでいるアナウンサーの様子がとてもよい。特に第３回の畳職人の話は、お茶の楽しみの幅が大きく広がり、大変興味深く拝見した。次回以降も楽しみにしている。

○　９月３日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「我々は、最後の砦（とりで）～信用組合理事長・山本明弘～」を興味深く見た。山本さんの言葉や考え方は仕事をする者全てに通じるもので、仏の優しさと鬼の厳しさ、その両面を持つことの大切さと難しさを伝えていた。「中途半端が一番いけない」「金を追うな、人を追え」「融資に魂を込めろ」等のフレーズは、銀行マンとして当然持つべき考え方や姿勢だ。７２歳の熱血金融マンの姿によって、その考え方がいっそう鮮明に、かつ熱を帯びて伝えられていた。ただ、働き方改革が叫ばれている昨今において、朝６時半からの役員会は、正直、疑問に感じた。役員が来れば、そこに派生する職員も早く来る必要が出てくる。これを美徳化するのは難しいのではないかと思いながら見た。

また、１５期連続の増益とのことだが、実際の数字が全く示されていないことが残念だった。不良債権比率や自己資本比率などの数字も見せてもらわないと、増益だからすばらしいとは思えない。理事長の活躍を裏づけるものとしてやはり数字は必要だと感じた。ともあれ、多くの視聴者にはこの熱血金融マンの言葉の一つ一つが心に染みたと思う。

この番組は、登場する主人公の動きや考え方を一つの言葉、フレーズに区切り、整理した構成になっており、非常に見やすく理解しやすい。テンポがよく、時間を感じさせない番組で、毎回楽しみにしている。

○　９月６日(木)に発生した北海道胆振東部地震の報道について。発災当初、たまたま起床しておりテレビをつけていたのだが、現地の状況が非常に敏速に報道されている印象をもった。「おはよう日本」を見ていたが、画面の左下に２次元バーコードが出て

おり、アクセスするとＬ字の情報を一覧で見ることができた。忙しい朝は、気になる情報を見逃すこともあるため、大変ありがたいと思った。一方で、アナウンサーが「ＳＮＳなどで情報を現地に伝えてあげてください」と何度も呼びかけていたのが気になった。投稿が急増し、情報の混乱を招く可能性があると思ったので、大勢の方に公開で発信するのではなく、ＳＮＳのメッセージ機能などを使って、特定の知人と連絡しあえるものを利用するとよいのではないかと思った。

○　北海道胆振東部地震について、ラジオではずっと地震について報道しており、ＮＨＫの底力を深く感じた。私にとってラジオは生活の一部だが、子どもは、テレビで見ないと状況が分からないと言っていた。ラジオを聞き、言葉で状況を理解する訓練もわれわれに必要ではないかと強く感じた。

ラジオの放送の中で深く印象に残った呼びかけが２つある。１つ目は「夜、寝られない方のために一部屋、起きていられる部屋を作ってください。昼間その部屋で休むことができるような部屋を作ってください」というものだ。夜１０時には休むというライフスタイルの人ばかりではないので、この呼びかけはとても心に染みた。２つ目は、「できれば昼間、ラジオの音声を大きくしてください。」というものだ。みんなで情報を共有できるよう音量を上げようという呼びかけは、非常に適正だと感じた。ラジオの役目や伝えるべきことについて、常日ごろ研究しているのだろうと思った。

地域を見つめる放送局の意義、意思が、今回の地震でも大きく反映したと思っている。電気が消え真っ暗な中で、ラジオの音だけが頼りだった北海道では、ラジオによって心を強く持った方もいるだろう。ラジオの意味、必要性を強く感じた大地震だった。また、今回、北海道は広範囲が停電したが、３日間でほぼ復旧していた。３日間、何とか自分自身で命を長らえるための対策も必要だと思った。

○９月７日(金)のＪｏｕｒｎｅｙｓ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ「山形・飛島　恵みとともに」(総合 後7:33～8:00 山形県域)を見た。山形の酒田沖に浮かぶ人口200人の飛島を、アイルランド出身のジョン・ムーアさんが訪問し、地元の方々との交流を島の美しい風景とともに紹介していた。ジョン・ムーアさんが「島への旅は行ってみないとわからない、とてもわくわくするものだ。まるで初対面のデートみたいな」と格好いいことを言っており、日本人には言えないだろうと思いながら視聴した。

○　９月１４日(金)の東北ココから「日本一の芋煮会 世界一を目指す」(総合 後7:30～7:57 山形県域)は、１６日(日)に開催される、今年で３０回目になる「日本一の芋

煮会フェスティバル」についてだった。フェスティバルで使う山形の大鍋は、平成２３年に岐阜県高山市で６．１メートルの大鍋ができ、日本一の座を奪われていたのだが、今回、クラウドファンディングなどで資金を集め、６．５メートルの大鍋が完成し、日本一を奪還した。さらに、８時間でスープを提供した人数をカウントするギネス世界記録への挑戦も行われ、４時間半で１万2,695人に提供され、世界記録を達成した。ＮＨＫのニュースで紹介されたが、今回の番組では紹介されておらず、せっかくなので、世界記録達成の番組も制作していただければありがたい。

○　９月１４日(金)のきんよる秋田「秋田大曲　全国花火競技大会２０１８」(総合 後7:30～8:42 秋田県域)を見た。生放送との違いは、どの花火が何の賞を受賞したかを出してくれたことだ。新聞でも結果は掲載されるが、映像とともに振り返ることができたのはとてもよかった。しかし、中継番組のダイジェストではなく、改めて、解説者に受賞理由を説明してもらえるとよかったと思う。

○　９月１５日(土)のＮＨＫスペシャル「人工知能　天使か悪魔か　２０１８　未来がわかる その時あなたは…」を見た。６月に介護現場で活用されるＡＩを紹介する番組を見たが、今回はさらに進化していた。鹿児島のある町ではＡＩの天気予測をもとに避難指示や解除を出していたり、アメリカではどこで犯罪が起きそうかを予測し警察官を配備したり、さらに、将来犯罪に関わりそうな人をリストアップし本人に通知するなど、やり過ぎだと問題になっていることも紹介された。他にも、有効な臓器移植者を決める、結婚のマッチング、病気、アルツハイマーになるかの予測など、少し怖い世界に入っており、ＡＩの世界がそこまで来ているということが非常によく分かった。

日本の経済や政治など、専門家の予測が当たらないことも多いので、アイデアとしてＡＩが出す情報を活用するのも一つあるかもしれないと思った。また、そういう世界が大分近づいていることを感じた番組だった。

○　９月１５日(土)のＢＳ１スペシャル「脱北者の終わらない旅 ～南北融和ムードの中で～」（ＢＳ１ 後10:00～10:50、11:00～11:49）を見た。９月１８日(火)から南北首脳会談が開催されており、タイムリーな番組だと感じた。これまで脱北者に優しかった韓国が、政府も世論も国民も手の平を返したように脱北者に厳しくなっていることが分かった。主役は脱北者の漫画家で、脱北者の姿を克明に表現していた。ショックだったのは、今、脱北者の方々が、北から来たと圧迫され、韓国には住みたくない

と、韓国を出ていく「脱南」が起きているということだ。政権交代でくるっと変わる韓国の状況や、トランプ大統領の劇場型政治に翻弄される姿を追ったドキュメンタリーで、非常に感心した。難しいと思うが、韓国の方にもぜひ見ていただきたい。

○　９月１７日(月) プロフェッショナル 仕事の流儀「プロフェッショナル子ども大学」をタイトルに引かれて見た。いつもの番組構成とは異なり、伝説のヒットメーカー、佐藤章さんがものづくりの極意を子どもたちに伝える内容で、新鮮味があった。佐藤さんの言葉によって、行動が変わる子どもたちの姿が印象的で、自信が芽生えると行動が変わるというのは、大人にも通じることだと思った。また、番組ではチームワークの大切さもしっかり伝えており、まさに社会に通じるものだと思って見た。途中で星野佳路さんや卓球の石川佳純選手のコメントもあり、視聴者を飽きさせない、いい意味でアクセントになっていた。

○　９月１７日(月)の「のぞき見ドキュメント　１００カメ」(総合 後10:45～11:15)は、なかなかおもしろかった。マンガ週刊誌の編集部の様子を映していたが、よくぞこの企画を了承したものだと思った。人間模様を映し出す企画で、見る方はおもしろいが、写されたほうは居たたまれないのではないかと思いながら見た。１８人の編集者たちの性格や葛藤、人間模様が映し出されており、私自身も納得させられたり笑わされたり、普段のドキュメント番組以上におもしろい企画だとさえ思った。ナレーションやインタビューもなく、ＶＴＲに対するオードリーの２人の掛け合いだけで進行した。２人の掛け合いがなければ、ちょっと物足りなかったかもしれない。正直、非常におもしろく、こういう番組もいいものだと思った。

○　ニュース番組を見ていて発音で気になったことがある。「都市ガス」と「観光ガイド」という２つの言葉をアナウンサーが両方鼻濁音で発音していた。日本語化している外国語の複合語ではあるが、ガス、ガイドはもとの英語の発音を尊重し、濁音で発音したほうがふさわしいのではないかと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年７月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、各県の夕方６時台のニュース番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、８月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	(株式会社七十七銀行　常務取締役)
委　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発(株)　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業(株)　代表取締役社長)

(主な発言)

＜各県の夕方６時台のニュース番組について＞

○　宮城県の「てれまさむね」は、７月２日(月)に羽生結弦選手の国民栄誉賞のニュースについて特集で伝えていた。街頭インタビューでこれまでの羽生選手の演技で見たいものをたずね、順位をつけて紹介していたが、非常にいいアイデアだったと思う。

岩手県の「おばんですいわて」では、７月３日(火)に岩手県釜石市の防災センターの津波訴訟、仙台高裁で和解成立というニュースを伝えていた。この訴訟を長期にわたり丁寧に取材してきた記者の熱意や被災者への共感が伝わってくるいい内容だった。

秋田県の「ニュースこまち」では、６月２７日(水)に「ふるさとの道しるべ」

という企画で、八峰町本館を取り上げていた。丁寧な作りで、列車の映像や梅雨の晴れ間の夕日など、非常にきれいな映像が多く、ドラマを見ているような感じがした。

山形県の「やまます」では、「なまる丸」という山形弁でニュースを伝えるコーナーがあったが、狙いがよくわからなかった。他県の出身者に山形弁を知ってほしいのか、方言になじみがない若い人たちに知ってほしいのか、もう少し狙いを明確にしてほしいと感じた。

福島県の「はまなかあいづＴｏｄａｙ」では、６月２２日(金)「ココに福ありｆＭＡＰ」という企画で、広野町の商工会が買い物に行くのが困難な人と地元商店の橋渡しをしているという取り組みを紹介していて、とてもいい内容だった。どれくらい利用者がいるのかなど基本的な情報も入れるとさらによくなると感じた。

○　「てれまさむね」は、５０分間、飽きさせないような工夫が随所に感じられるよい番組だと思う。「Ｒｏａｄ　ｔｏ　2020年」という東京オリンピックに向けた特集があったが、見ている人にとって励みになるいい内容だと感じた。「カメラマンリポート」や「なままさむね」など、さまざまな企画を組み合わせながらうまく構成していると思う。また、「東北ピックアップ」や「大好き♡東北」など、東北６県を紹介するコーナーが充実していた。

青森県の「あっぷるワイド」は、若いキャスターが元気で明るくて非常に好感が持てた。６月２８日(木)に「当選者に聞く」という企画で、４月に当選した佐井村の村長にインタビューしていたが、当選してからだいぶたっており、このタイミングで放送する意味がよくわからなかった。

「はまなかあいづＴｏｄａｙ」の「ふくしま五七ＧＯ！」という視聴者から投稿された俳句を紹介するコーナーがよかった。視聴者とのつながりを作るためにも必要だと感じた。

○　「おばんですいわて」は、西日本豪雨の被害について、岩手県の人にも当事者意識が生まれるように、災害対策などさまざまな切り口で取り上げていて、非常によかった。盛岡の気象台の方が北上川の危険性について話したが、さらに深く取材をして番組で取り上げてほしい。また、「この人に聞きたい」や「キャスターズ　アイ」という企画は、毎回いい内容だと感じている。盛岡局の強み

として続けていってほしい。岩手県内のイベント情報を紹介する「いわてエンタメガイド」は、地元の団体が地域のために行うものなどは、有料の催し物であっても、ぜひ紹介してほしい。岩手の文化振興にもつながると思う。

○　７月９日(月)と１０日(火)の「あっぷるワイド」を見た。全国のニュースで、西日本豪雨の被災地の状況が放送され、それに続く形で、被災地への青森県内の支援の動きが取り上げられていてとてもよかった。その中で、リュックサックを使ってけがをした人をおんぶする方法が紹介されたが、とても役立つ情報だったと思う。また、災害が起きたときに、被災地の中に姉妹都市があればぜひ紹介してもらいたい。より身近に感じられるし、支援についても考えやすいのではないかと思う。「つながる道南ワイド」では、函館の情報を紹介している。新幹線で函館とつながっている青森ならではの企画でいい着眼点だと思う。「お国ことばで川柳」というコーナーは、津軽弁で進行されているが、青森には津軽弁と南部弁があるので、両方の方言で紹介するなどの工夫がほしいと感じた。

「はまなかあいづＴｏｄａｙ」では、福島県内の放射線測定値が伝えられている。東日本大震災について、風化が進む中で、毎日、放射線量をニュースの中で伝え続けているということは、非常に意義があることだと思った。

○　「てれまさむね」は、真下アナウンサーと松井キャスターの２人が進行していたが、ことばも聞き取りやすく、非常に感じがよかった。７月２日(月)には羽生選手の国民栄誉賞の特集、７月１０日(火)の「今日は何の日」では、仙台空襲から７３年という話題など、宮城県ならではの内容で興味深く見た。仙台局に見学に来た小学生が地域の話題を紹介する「ようこそＮＨＫ」。小学生が列に並んで、順番に話していく構成があまり好ましくなく、見学している自然な姿やインタビュー形式で収録するなど、見せ方にもう少し工夫がほしいと感じた。

６月２７日(水)の「ニュースこまち」では、「ふるさとの道しるべ」という企画があり、登場する人がみんな「ここはいいところだよ」と話しているのが印象的だった。幸せとは何かと考えさせられた

東北６県のニュース番組を見て、どの番組も構成がほぼ同じで、均質な感じがした。もう少し特徴があってもいいのではないかと思った。また、どの県の番組も天気予報に力が入っていた。リアルタイムでニュースを伝えるテレビの

価値として、天気予報は非常に重要なのだと実感した。これからも詳細に正しい情報を伝えてほしい。

○　「あっぷるワイド」は、出演者が若くフレッシュで、応援したくなるような雰囲気だった。６月２８日(木)に「聖火のキセキ」という企画があったが、非常におもしろかった。2020年の東京オリンピックまでの機運を盛り上げるという意味でも、地方でそのような企画をするのはとてもいいことだ。

６月２７日(水)の「ニュースこまち」の「ふるさとの道しるべ」は、地元の方々のインタビューと美しい映像、方言のやわらかさが相互作用して温かいいいコーナーだと思った。

「おばんですいわて」は、ニュースの変わり目に効果音が流れて、切り替わりが非常にわかりやすいと思った。７月３日(火)は釜石津波訴訟のニュースが取り上げられていた。取材した記者がスタジオに出演してもっと深く解説する方が、視聴者には伝わったのではないかと感じた。「とれたて市場だより」というコーナーは、市場の方がコメントしているので説得力があり、旬の食材を使ったレシピを紹介しているので、料理をする人にとっては非常にいいコーナーだと思った。

６月２２日(金)「はまなかあいづＴｏｄａｙ」の「ココに福ありｆＭＡＰ」という企画で、広野町の商工会が、いわゆる買い物弱者対策に取り組んでいることが紹介されていた。１つの番組としても成り立つような話題だったので、さらに内容を深めて全国に発信してほしい。

「やまる」は、大きなニュースや重要なニュースのとき、記者が出演して解説することが多い。アナウンサーがコメントするよりも視聴者にとっては説得力があっていいと思う。

気象情報は各県の番組で力を入れていたが、やはり自分が住んでいる地域の天気予報を詳しく紹介していると親近感があり、視聴にもつながっているのではないかと思った。また、気象情報の間に音楽が流れていたが、必要ないのではないかと感じた。

○　「てれまさむね」は、いつも地域密着型のニュースを取り上げていて、身近な情報を知ることができる。7月４日(水)「急増のワタリガニを新たな特産に！」というコーナーでは、東日本大震災を境にワタリガニの漁獲量が大幅に増えて

いるということを伝えていた。その原因についてもきちんと取材してあってとてもよかった。どういうところで入手でき、どんな調理法がいいのかまで伝えてくれるとさらによくなったと思う。７月１０日(火)、仙台空襲から７３年という話題について、一旦画面が暗くなってからコーナーが始まるなど、視聴者の意識を引くような工夫がしてあった。戦災復興記念館の情報だけではなく、戦後復興のシンボルとして建てられたという西公園の巨大こけしも紹介していてとてもよかった。

他の県の番組についても全国の大きなニュースを受けて、それぞれの県内ではどんな動きがあったのかという点を丁寧に放送しているという印象を受けた。全国のニュースが人ごとではなく、自分にとって身近なことだと感じられる工夫がされていてよかった。

○　「てれまさむね」は、羽生選手が国民栄誉賞を受賞した話題に長く時間を割いていて、地元の興味に応えていたと思った。

６月２７日(水)「ニュースこまち」と７月３日(火)「おばんですいわて」で、高校生の人材不足という内容を取り上げていた。特に、「ニュースこまち」で紹介した企業の手法は、他の企業でも参考になるいい内容だった。一方、７月２日（月)「てれまさむね」では、高校生の受験生をどう確保するかという話題があり、同じ東北でも地域によって人口減少の問題は明確に違うのだと感じた。

６月２８日(木)「やまなる」では、医療的ケア児について特集していた。特別支援が必要な子どもの未就学期の課題についてしっかり取材されていてとてもよかった。全国にも同じ課題があると思うので、広く放送してほしい。

「はまなかあいづＴｏｄａｙ」で毎日放送している放射線測定値について、今後もぜひ伝え続けてほしい。

○　「てれまさむね」は素朴で、地元感が出ていて安定感がある番組だが、やや地味な印象がある。アナウンサーやキャスターも明るく、親しみやすく、しっかり伝えようという姿勢は伝わってくるが、民放のニュースと比べると、テンポのよさという面ではやや弱いと感じている。コーナーの切り替わりがわかりにくいので、そこを工夫するともっとよくなるのではないか。

７月１３日(金)の「スポまさむね」のコーナーでは、第100回全国高等学校野球選手権記念大会の特集をしていた。過去の試合を当時の出来事や音楽ととも

に紹介しいて、当時を懐かしく思い出すことができるよい企画だった。
　また、「東北ピックアップ」では東北各地の情報をしっかり伝えている。ＮＨＫには東北全体のネットワークを大いに活用して民放と差別化を図ってほしい。

○　「ニュースこまち」は、出演者３人のチームワークがよく、楽しく拝見している。番組の後半から見ることも多いが、天気やその日のニュースを後半でも再度伝えているので、途中から見ても一日の動きが分かるいい構成だと思う。メインキャスターの２人が、実際に外に出て取材していることが多く、とても身近に感じられる。明るく楽しいのはもちろん、季節の知りたい情報、大切な知識もあり、年代関係なく見られるのはとてもよいと思っている。

（ＮＨＫ側）

よりよい番組にしていく上で大変貴重な意見をいただいた。委員のみなさまの意見は、各局に持ち帰って、それぞれの番組制作の参考にさせていただきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月２２日(金)再発見いわて「愛馬とともに　鈴の音高く　～岩手山麓チャグチャグ馬コ～」を見た。チャグチャグ馬コに参加する農家の夫婦や、高校生が馬と接する様子、行列を成立させるために馬の訓練や装束づくりも必要だということを取り上げていてとてもよかった。チャグチャグ馬コは、盛岡市、滝沢市、矢巾町が共同でやっているイベントだが、今回の番組では滝沢市を中心に取材をしていたので、歴史などについてはもっと広く取材して伝えてほしかった。

○　６月２４日(日)明日へつなげよう 証言記録　東日本大震災「暴走する原発に突入せよ～事故拡大を防いだ下請け企業～」(総合 前10:20～11:03)は、実写映像とイメージ映像を組み合わせて、福島第一原子力発電所に押し寄せた津波、建物が破壊されていく様子を時系列で構成していて、わかりやすい番組だった。何度も報道されている事実だが、改めて映像で示されると迫力があり、見る人の記憶に鮮明に刻まれていくと感じた。地元の下請け・孫請け企業の技術者た

ちの使命感に焦点を当てるという目のつけどころがよかった。

○　６月２６日(火)ハートネットＴＶ　シリーズ“医療的ケア児”成長とともに第１回「未就学期の悩み」は、治療を終え退院した後に直面する過酷なケアの実態、未就学期の居場所の問題について、現場の声をしっかりと拾い上げて伝えていた。全国規模の大きな課題だと思うので、今後も番組で取り上げてほしい。

○　６月２８日(木)昭和の選択「戦争の時代　天気予報は誰のものか？日本気象学の父・岡田武松」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後8:00～8:59)を見た。タイトルを見ただけで内容がわかっていいが、タイトルが長過ぎるのではないかと思った。この番組は、歴史を改めて知る楽しみを存分に味わわせてくれる内容で、いろいろな想像を膨らませることができた。司会者のコメントが平凡に感じられたので、もう少し違う角度からのコメントで番組を盛り上げてほしかった。

○　６月２８日(木)クローズアップ現代＋「人生を変えるスポーツ漫画～ドカベン　その半世紀が残したもの～」について、連載の最終回に合わせたタイムリーな放送だった。プロ野球選手がスポーツ漫画で影響を受けたというインタビューや居酒屋での一般のサラリーマンのインタビューなど、さまざまな人に影響を与えたことがよくわかった。ゲストに漫画研究家が出演していたが冷静な方だったので、もう少し熱く語ってもいいのではないかと感じた。

○　６月２９日(金)みちたん～ああ！すばらしきセカイ～「そばにいるよで２５回目」は、本当にびっくりするような内容ではないかもしれないが、哀愁漂ういい番組構成だった。福島のネギそばは、ネギが丸ごと１本のっているそばで、そばは女性、ネギは男性で子孫繁栄をあらわしているという由来も紹介され興味深かった。山形県の朝日町の空気神社は、まちおこしを兼ねてつくったということで、機会があれば行ってみたいと思わせる内容だった。秋田市の幸せを運ぶタクシーは、自宅で四つ葉のクローバーを栽培し、お客さんに幸せを与えるように配っているという内容で、その一生懸命さに共感を覚えた。

○　７月１日(日)日曜美術館「熱烈！傑作ダンギ アンリ・ルソー」は、２人の俳

優と学芸員がアンリ・ルソーについて熱く語り合う番組だった。俳優は、感性で絵を評価するのに対して、学芸員は学術的にアプローチをしていく。うまく対比されていて、「ダンギ」というテーマに沿ったいい番組だった。司会のフランス文学者の小野正嗣さんと髙橋美鈴アナウンサーは、ゲストの意見を引き出すのが上手で、好感を持って見ている。

○　７月３日(火)アナザーストーリーズ 運命の分岐点「Ｗｅ　Ａｒｅ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　奇跡の一夜　１０時間の真実」は、「Ｗｅ　Ａｒｅ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ」の誕生の舞台裏が描かれていた。最後に、選ばれたメンバーがソロパートを歌う映像が流れたが非常に感動した。毎回、知られざる物事の裏側を調べて紹介していてとてもおもしろい番組だと思う。

○　７月４日(水)探検バクモン「突入！ヨガの世界」は、ヨガを実践しているＳＨＩＨＯさんと片岡鶴太郎さんがゲストとして登場し、その話がおもしろかった。ヨガの達人ケン・ハラクマさんが、ヨガの厳しい修行というよりも呼吸法やめい想の目的などをわかりやすく教えてくれて非常によかった。

○　西日本豪雨について、民放に比べると非常に多くの時間を使って情報提供していたという印象がある。広域にわたる災害だったので、全体状況と個別の状況の両面から見せるための工夫がされていてとてもよかった。７月７日(土)「おはよう日本」では、西日本豪雨の被害状況を地図で紹介する際、画面を変えるのではなく、地図をスライドさせながら伝えていた。画面を切り替えてしまうと、どの場所なのかがわからなくなってしまうので、スライドさせるという手法はわかりやすかった。雨量については、設置雨量計の管理者まで表示されてよかったが、小数点がついたりつかなかったりしたので、位がわかりにくかった。小数点の位置を合わせる工夫がほしかった。

○　７月７日(土)「ＮＨＫスペシャル　ブループラネット　第３集　海辺　せめぎ合う海と陸の生命」は、美しい地球の映像が４年をかけて撮影されていてすばらしかった。マグロを入り江に追い込んで群れで狩りをするアシカやカニとウツボの戦い、海面すれすれを飛ぶ鳥をとる巨大魚など、本当に美しい映像で伝えていた。仲間由紀恵さんと豊川悦司さんのナレーションも味があってよ

かった。

○　７月９日(月)あさイチ「夫に疲れたら…打開策は“プチ別居”？」は、夫に疲れた妻が１カ月に１回、１週間実家に帰るなど夫と距離をとることで冷静に夫婦関係を見直すことができるという内容が紹介された。朝の番組としては不釣り合いな気がした。夫婦とは何か、家庭とは何かという大切な話につながる話題なので、もっと深く掘り下げて紹介するべきだと感じた。

７月９日(月) あの日　わたしは～証言記録　東日本大震災～「岩手県久慈市　宇部修さん」は、岩手県久慈市にある水族館で助かったウミガメのカメ吉の話だった。カメ吉は、八戸市水産科学館に預けられ５年間、飼育してもらった。科学館も震災の被害を受けているにも関わらず受け入れたという事実に感動した。この番組は、風化しつつある東日本大震災をいつも思い出させてくれる貴重な番組だと思うので、今後も継続してほしい。

○　７月１２日(金)「ＮＨＫスペシャル　緊急検証西日本豪雨“異常気象新時代”命を守るために」(総合 後10:00～10:45)を見た。大きな被害がわかり始めてから数日での放送だったので、そのスピード感に驚いた。ニュースでは被害の場所、規模、被害を受けた人数といったデータが前面に出てくるが、この番組では住民一人一人にスポットを当てて、どのタイミングでどんな行動をとったのかを知ることができて参考になった。被災地以外の人が災害を自分のこととして捉えるためには効果的だったとは思うが、被災地で見ている方にとっては行き過ぎた取材もあったのではないかと心配になった。番組内で、記者が「東日本大震災の経験を生かして、支援が偏らないように」というコメントしていたが、その通りで、支援を行き届かせる助けになるような報道を期待したい。

○　７月１３日(金)東北ココから　高校野球１００回「宮城　球児たちの軌跡」(総合 後7:33～8:45 宮城県域は、第100回全国高等学校野球選手権記念大会を盛り上げるいい番組だったと思う。ただ、ゲストはもう少し高校野球や野球の知識が豊富な人を起用してほしかった。宮城県の高校野球は、東北高校と仙台育英なくして語れないのは当然だが、公立高校についてもっと題材にすることでより視聴者の共感を呼ぶことができたのではないか。

○　７月１３日(金)東北ココから「やまがた百名山総集編（１）」を見た。山形県で放送している「やままる」の中の「やまがた百名山」というコーナーの総集編だと思うが、番組の最初でその説明が何もなかった。初めて見る人は「やまがた百名山」とは何なのかと違和感があったのではないか。また、単純に４回分の企画をつなげただけに見えてしまったので、スタジオで百名山について語り合う様子を収録して付け加えるなど、一工夫してほしかった

○　７月１６日(月)「世界最大級！ラオス　絶景の未踏洞窟に挑む」(総合 後7:30～8:43)は、洞窟探検家の吉田勝次さんの挑戦に密着取材した番組で、臨場感があり、映像もすばらしい番組だった。吉田さんは８人の隊員と共に洞窟探検をしていたが、その中に若い女性が２人いることに驚いた。最後に今回探検した洞窟が世界屈指の大きさであることがわかり、歴史的な場面に立ち会ったような感覚も味わえた。

○　朝の連続テレビ小説「半分、青い。」は、とてもおもしろく、毎回欠かさず見ている。ＳＮＳで毎回情報を公開する戦略がとてもいいと思う。

○　朝の連続テレビ小説「半分、青い。」は、大変おもしろい。主人公の結婚を祝うビデオメッセージが出てきたが、全て出演者がアドリブで収録したということだった。それを知ってから見ると本当におもしろい。中でも豊川悦司さんのコメントがすばらしかった。ＳＮＳで情報発信をして視聴につなげているが、最近、番組の見方が変化してきていると感じた。

○　７月２日(月)「サンドウィッチマンの天使のつくり笑いｉｎ　宮城県名取市」は、公開収録だったので、笑い声など臨場感もありとてもおもしろい番組だった。音声だけで動きのあるコントを伝えるのは難しいと思うので、司会のアナウンサーが動きの様子が伝わるコメントを入れるなど、もう少し工夫がほしかった。新人芸人のお笑い勝ち抜け戦は緊張感が伝わってきてとてもおもしろかった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年６月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、６月８日(金)ドキュメント７２時間「１円パチンコに哀歓あり」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、７月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発(株)　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業(株)　代表取締役社長)

(主な発言)

＜ドキュメント７２時間「１円パチンコに哀歓あり」
(総合　６月８日(金))について＞

○　「ドキュメント７２時間」は心の内を深い部分まで掘り下げて伝えてくれる番組だと思っていたが、今回はインタビューが表面的だと感じた。５月の大型連休の３日間に撮影していたが、普通の日も１日入れて客層がどのように違うのかも見たかった。華やかなパチンコ台とお客さんの日常から離れたいという心の闇の深さがとても対照的で切なくなった。石巻には全国でも珍しい朝７時開店のパチンコ店が密集していると紹介されたが、その背景についてあまり説明がなく、もっと印象に残る工夫があってもよかったと思った。被災地に住む

方が心地よくいられる場所が、パチンコ店以外にもたくさんできるといいなと、この番組を見て感じた。

○　インタビューを通じて、番組の内容が深まっていったと感じられなかったのが残念だった。パチンコが一つの逃げ場、心がすさんだときに救いを求める場になっているという現状にさみしさを感じた。今回の番組を肯定的に捉えていいのか疑問を感じた。被災地である石巻＝パチンコという図式を出すことにつながってしまうのではないかと心配になった。今回のテーマにパチンコ店という場所を選んだ理由を聞きたい。

○　家、仕事場以外の第３の場所にパチンコ店がなっていることに驚いた。さらにパチンコ店の休憩スペースに、いつも来ている人が来なくなると心配して電話をするという人間関係も生まれていて、まさにサードプレイスだと思った。居場所を探している人たちにとってパチンコ店が居心地のいい、今日も笑って生きていたいと思える場所になっていた。行政が作った特別な施設ではなく自然にそういう場が生まれていることがすばらしいと感じた。そこに気がついて番組として取り上げたことを賞賛したい。

○　東日本大震災のあと、パチンコ店の駐車場がずっといっぱいだということを聞いて、なぜだろうと思っていた。番組内のインタビューで「パチンコで全て忘れられる。音がないといろいろ考えてしまうからうるさいほうが落ち着く」とあり、震災後の不安な気持ちをパチンコ店に行くことで押さえていたのだと分かった。パチンコは依存症につながる問題もある中で、今の日本では娯楽なのか、賭け事なのか、あるいは趣味なのか、いろいろ考えさせられる内容だった。

○　番組冒頭のナレーション「知らない人は本当に知らない。それがパチンコという世界」という言葉が印象的だった。東日本大震災から７年以上経って、被災地である石巻の現状が見えてきた。無になれる、全て忘れられる、うるさければうるさいほど逆に落ち着くというインタビューから、震災地ならでは心情が映し出されていたように感じた。パチンコ店に自分の居場所を求める人が多いという現実が石巻で起きていることに驚いた。

今回の撮影の舞台になったパチンコ店を選んだ理由を聞きたい。

○　パチンコ店に来る人の多くが高齢者で、その理由が暇つぶしや大変な日常を忘れたいというものだった。パチンコ店がそういう人の集まる場所になっていることに驚いた。石巻の場合は震災による心の傷を忘れたいという人が一時期多かったと思うが、現状では日本全国で同じような状態なのではないだろうか。行くところがない、暇だからパチンコをやるという人が多くて、日本の社会の行く末を見たような気がしてむなしさが残った。「ドキュメント７２時間」は、視聴者に見て考えさせる番組だと思うが、今回の番組にはどのようなメッセージを込めたのか聞いてみたい。パチンコ店と被災地という２つのポイントが一緒になり、震災の影響なのか、高齢化社会による変化なのかを混同していて、何を一番伝えたかったのか分かりにくかった。

○　パチンコ店は軍艦マーチが鳴り響き、たばこの煙が漂う印象だったが、休憩室がホテルのようにきれいになっているなどとても驚いた。番組を見て、人それぞれ歩んできた人生の中で見つけた自分の居場所は、みんな違うということを改めて感じた。障害のある中学生の子どもを寝かしつけてから来る人や愛犬を亡くしたときに泣きながらパチンコをした人など、さまざまな思いを抱えている人が登場した。そういう人たちの居場所にパチンコ店がなっていることが興味深かった。

○　ディレクターがお客さんから問い詰められたり、取材拒否されたりする場面があったが、それでもめげずに取材をしていい話を集めたと思う。震災でさまざまな心の傷を抱えた人たちが集まる被災地のパチンコ店をテーマに選んだ着眼点はよかったと思う。ただ、店の中だけの取材だったので、表面的で、本質にまで迫っているようには見えなかった。できれば取材した人の家まで行って話を聞き、心の空白や孤独感などにもっと迫ってほしかった。取材の舞台としてパチンコ店を選ぶということには多少迷いもあったのではないかと推察している。パチンコは依存症につながる問題が昔から指摘されているので、被災者の癒やしの場や心のオアシスという好意的な取り上げ方にひっかかりも感じ、どう見たらいいか迷う部分もあった。

○　冒頭のナレーションが、～かもしれない、～みたいなどあやふやな表現が多く、番組の目的は何なのかわかりにくかった。パチンコ店の休憩スペースで、知恵の輪をする女性が登場した場面を見て初めて、パチンコが好きとか嫌いという目線で見る番組ではなく、視聴者に何かを考えさせる番組だと理解できた。「音があることで心が落ち着く」というインタビューを聞き、音があることで逆に心が落ち着く人もいることが分かった。被災地のパチンコ店が舞台だったが、被災地だけではなく、高齢化や過疎化が進んでいる場所では当たり前の光景なのではないかと感じた。

○　一番驚いたのは、パチンコ店に安らぎを求めている人の多さだった。あの騒々しい音だからこそいろいろなことが忘れられるというインタビューが印象的で、その気持ちになってみなければ理解できないことかもしれない。パチンコ店に来る人の気持ちを少し知ることができた。石巻が舞台ということで、もっと震災が前面に出る番組かと思っていたが、どこにでもあるパチンコ店の人生模様だった。たまたまそうなったのか、それとも被災地でもパチンコ店の人生模様は変わらないのか、どちらだったのだろうか。見方によっては、パチンコ＝ギャンブルを美化してしまう番組と捉えた人もいるかもしれない。感じ方の問題なので難しいところだが、難しい問題のある場所だからこそ、さまざまな人間模様を見ることができたのかもしれない。

（ＮＨＫ側）

「ドキュメント７２時間」は、３日間、スタッフがある場所に張りついて、何のためにここに来ているのかをインタビューし、心の機微を語ってくれる人を集めて番組にしている。見ている人と普遍的な重なりを、ある定点から描いていこうという趣旨の番組なので、場所がどこであれ、その普遍性は同じだということを考えて作っている。震災直後、そして今もたくさんの人がパチンコ店に集まっているということは、そこに見ている人と共通する普遍性を描けると考えた。ギャンブル依存という問題もあると認識していたが、今の日本の断面を伝えられると思った。

なぜあの店舗を現場に選んだのかという点は、取材する際、

パチンコ店は非常に音がうるさいので、パチンコ台の前では、インタビューできず、休憩スペースのような音がしない場所に来てもらってインタビューすることになるかもしれないと考えた。何軒か見て回り、一番休憩スペースが充実していたあの店舗を選んだ。

＜放送番組一般について＞

○　５月２０日(日)ＮＨＫスペシャル「縮小ニッポンの衝撃 労働力激減 そのとき何が」は、非常に衝撃的な内容だった。人口ピラミッドは2050年に日本が世界で初めて棺桶型になるという話が紹介され、私たちの子どもの世代は大変だということを改めて感じた。若年層の働き手のかわりに高齢者が派遣労働の担い手になっていることが紹介されたが、それにより労働災害や事故が増加していることには危機感を覚えた。さらに、外国人の労働者については、国の制度のあり方を議論すべきだと感じた。

今回の番組だけではないが、ＮＨＫの番組では、冒頭で内容のダイジェストを紹介してから本編に入る構成が多いと感じている。同じ映像を２度見ることになり、まどろっこしい。もっといろいろなつくり方に挑戦してほしいと思う。

○　５月２１日(月)鶴瓶の家族に乾杯「熊本地震から２年　藤井フミヤと益城町・西原村で出会い旅」について、ぶっつけ本番とは思えないドラマチックな予想外の展開に驚いた。災害の被災地のその後の様子をニュース番組とはまた違った視点で知ることができたいい番組だった。藤井さんが仮設住宅の集会所でギターを弾いて歌うなど、被災した人たちを随分勇気づけたと思う。笑福亭鶴瓶さんは、どんな場所に行ってもその地域の意外なよさを見つけ、地域の誇り、自慢をおもしろく紹介していて毎回感心する。

○　５月２５日(金)新日本風土記「古事記への旅」は、とてもいい番組で感銘を受けた。伝説と伝統と現代社会のコミュニティが一本の線でつながっている。古代の日本を見る中で、今もその精神が生きていることを強く感じることができた。

○　５月２８日(月)クローズアップ現代＋「追い詰められる暴力団 新たな犯罪が」を関心を持って見た。暴力団排除条例など、警察の取り締まりの強化によって、資金源を断たれ、生活費にも困窮した暴力団員が犯罪に手を染めるという実態がよくわかった。

○　５月２８日(月)芸人先生「金言ＳＰ」は、コミュニケーションの手法を漫才やコントという観点から伝授するという番組で、いろいろな気づきをくれる内容だった。芸人が自分たちの芸と仕事、人を笑わせることや人の心をつかむということに対して真剣に取り組んでいる様子がわかり、私たちの仕事のコミュニケーションにも生かせる部分が多々あった。今後もずっと続けてほしい番組だ。

○　５月３０日(水)「おばんですいわて」(総合 18:10～19:00 岩手県域)で、映画「孤狼の血」の原作者の柚月裕子さんの特集インタビューを見た。岩手県釜石市出身で、両親を震災で亡くしている柚月さんが、ふるさとのこと、震災のこと、作品について語っていた。どんな小さな登場人物でも履歴書を書いて、細やかな人物像を描こうとしている姿勢がわかるとてもいいインタビューだった。東北にはすばらしい作家が生まれてくる風土があると思う。ぜひＮＨＫの視点で文学を生み出す東北という地域性を特集してもらいたい。

○　６月２日(土)ＥＴＶ特集「“核のごみ”に揺れる村～苦悩と選択　半世紀の記録～」は、難しい問題に真正面から向き合っていてとてもよかった。六ヶ所村を最終処分場にはしないと約束していた政治家や官僚が、自分の在職中に出る結論ではないと思ってしまうところがあると話した田中真紀子さんの言葉が印象的だった。貧困からの脱却のためには何かを受け入れざるを得ないのかということを強く感じて、とてもせつない気持ちになった。

○　６月３日(日)明日へつなげよう「イナサの春にはげまされ」は、若林区の荒浜地区を取り上げた番組だった。仙台湾でアカガイをとっている漁師の佐藤吉男さんが、とてもいい顔していて、存在感があり得がたいキャラクターだと思った。震災後、新しい団地に移ったり、災害公営住宅に引っ越したり、老人ホームに入ったり、いろいろな人を紹介しているので、復興のあり方を考えさ

せてくれる番組になっていると思う。このシリーズの強みは、荒浜地区の自然や地区の行事を2004年の１年間に渡って映像におさめていること。当時の映像と比較しながら、震災の被害とその後の復興の様子を追い続けられるので、番組に厚みが出ていると思った。また、三宅民夫アナウンサーがずっと語りを続けている点もいいと思う。これからも荒浜地区の人たちがどのような生活を送っていくのか、追い続けてほしい。

○　６月４日(月)プロフェッショナル仕事の流儀「ただこどもたちのために かこさとし最後の記録」は、とても感動的な番組だった。今年５月に亡くなったかこさんが、最後の最後まで子どもたちのために創作に向かおうとするありのままの姿が描かれていて感銘を受けた。ＮＨＫだからこそ死期が迫る中で取材させてもらえたのではないかと思う。

○　６月８日(金)きんよる秋田「秋田鉄道出会い旅　鳥海山ろく線と五能線の旅」を見た。秋田に赴任して３年目で秋田のことをあまり知らない秋田局の中川安奈アナウンサーと秋田で生まれ育った男性ディレクターが旅をする企画だった。前回の秋田内陸線編と違い、話のやりとりがスムーズで、おもしろかった。笑いや涙もあり、次は何線になるのか楽しみになった。

○　６月８日(金)あしたも晴れ！人生レシピ「ＡＩでどう変わる？超高齢社会」は、介護の現場にロボットが導入されている実例が紹介されてとても参考になった。ロボットができることは、まだこのレベルなのかと感じたが、介護の現場でのロボットの導入は必要なことだと思うので、どこまで実用化できるのか、今後の最新情報も番組で取り上げてほしい。番組内で「ＡＩロボット」という言葉がたくさん出てきたが、ＡＩ（人工知能）の定義があやふやなまま使われていた気がするので、しっかり整理してＡＩということばを使ってほしかった。

○　６月９日(土)お願い編集長　ＳＷＩＴＣＨインタビュー達人達（たち）「阿川佐和子×ふなっしー」（Ｅテレ 後2：00～2：59)は、組み合わせのおもしろさに興味を感じて視聴した。阿川さんが、ふなっしーに対して、着替えの服は何着あるのか、中の人は何人いるのかなどの鋭い質問をしていて、そこがよかっ

たと思う。ふなっしーの意外な一面が見えてきて、興味深かった。ふなっしーから阿川さんへの質問が弱かったのが残念だった。

○　６月１０日(日)ダーウィンが来た！「密着３０年　知られざるツキノワグマ」を見た。動物カメラマンの横田博さんが1,000時間以上、１頭の雌熊に密着した様子が描かれていた。母熊が子熊を抱いて頭をさすりながらお乳あげる映像には本当に感動した。身勝手な犯罪を起こす人や無責任な親がたくさんいる社会の中で、熊がわが子の頭をさすりながらお乳をあげる様子に涙が出た。これからも貴重な映像を捉えた番組づくりを期待している。

○　６月１２日(火)アナザーストーリーズ　運命の分岐点「その時、市民は軍と闘った～韓国の夜明け　光州事件～」は、この３０年で民主化が進んだ韓国のことを明確に解説していた。韓国で光州事件をテーマにした映画がつくられたが、その制作に関わった人たちがブラックリストに名前が上がっていたという報道もあり、民主化されたとはいえ、厳しい国だということを改めて考えさせられる内容だった。

○　６月１５日(金)「ＮＨＫ仙台放送局開局９０周年記念番組」(総合 後7：30～8：14.30 宮城県域)を見た。戦後の風景、ラジオやテレビ放送が始まったころの青葉通り、数々の災害の歴史など貴重な映像を見ることができ、テレビ局の役割は、今起きていることを伝えるということだけではなく、過去の記録ということも大きいのだなと実感した。視聴者のリクエストによるもう一度見たい宮城の懐かしい風景のトップ３が紹介されたが、１つのテーマでさまざまな時代の映像が紹介され、それぞれの世代の懐かしい時代がよみがえったと思う。昔の映像を見ただけでは、現在のどこの場所なのかわからない部分もあったので、もう少し工夫してほしかった。

○　６月１５日(金)「ＮＨＫ仙台放送局開局９０周年記念番組」は、石井かおるアナウンサーが生き生きと番組進行していた。一緒に進行していた山形局の柴田徹アナウンサーの紹介の字幕が東北大学出身となっていたが、仙台にいた人だと無理やりアピールしているように感じられ違和感があった。ゲストの杜けあきさん、マギー審司さん、元楽天の斎藤投手の取り合わせも非常によかった。

番組内での視聴者からのお便りが紹介されたがとても効果的だったと思う。宮城の映像と言いながらも仙台中心の映像だったのは残念だった。

○　６月１８日(月)に発生した大阪北部地震について、発生直後のニュースと「ニュース　シブ５時」を見た。字幕の漢字にルビをつけたり、簡単な日本語を使うなどの工夫が見られ、すばらしいと思ったので、今後もぜひ続けてほしい。「ニュース　シブ５時」は、被害の状況がまとめられていて、とてもわかりやすかった。ただ、小学生が亡くなったという被害について、当日の夕方に子どもへのインタビュー映像が放送されたが、子を持つ親の心情を考えると早すぎるのではないかと感じた。もう少し配慮が必要だったのではないか。今回は被害が局所的な災害なので、報道が減る傾向にあると思うが、状況の変化をしっかり捉えて情報を発信してほしいと思った。

○　６月１９日(火)「はまなかあいづＴｏｄａｙ」で、来年１０月からの保育料無償化について報道していた。メリットばかりではなく、財源がどうなっているかという点も紹介してほしかった。

また、待機児童の問題について、解消しなくてはならないという点ばかりが報道されるが、別の視点も必要ではないか。保育園に子どもを預けたい人が多いということは、女性の潜在労働力があるとも捉えられる。待機児童が生まれるということはそういった可能性があるということも伝えてほしい。

○　視聴者意向の中で、５月２３日(水)「おはよう日本」のリポート「限界集落の人気喫茶店」への問い合わせが２３件でとても多い。その理由をお聞きしたい。また、連続テレビ小説「半分、青い。」について、東北での視聴率はどうなのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

「おはよう日本」のリポートは、ナレーションをつけずに字幕と映像で全てを表現する演出と限界集落でコーヒー店を営むというシチュエーションがうまくマッチしたので、興味を持って見ていただいた結果ではないかと分析している。

連続テレビ小説「半分、青い。」の視聴率は、東北各県で多少

ばらつきはあるが、以前の「ひよっこ」や「わろてんか」と同様に多くの方に見てもらっている。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年５月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、４月２７日(金) みちたん～ああ！すばらしきセカイ～「ゴールデンだよ！２４回目」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、６月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜みちたん～ああ！すばらしきセカイ～「ゴールデンだよ！２４回目」
(総合　４月２７日(金))について＞

○　今回は、３つの話題を取り上げていたが、まさに地域のディープな情報だと感じた。ただ、ディープ過ぎて、その魅力が伝わらないものもあった。宮城県石巻市の田代島でマリリン･モンロー似の超セクシーなスター猫を探す話題で、ディレクターが案内役になって聞き取りしながら探していくのだが、わざとらしく見えてしまった。案内役を立てず、情報の紹介だけでもよかったのではないだろうか。「みちたん」は、ガイドブックには載っていない情報を紹介しているので、近くに旅行した際には、思い出して楽しめるのでいい番組だと感じて

いる。

○　午後７時３０分からの放送だったが、この時間帯に見たいと思う番組ではないと感じた。午後６時１０分からの各地域のニュース番組の中で「みちたん」コーナーをつくって放送した方がいいではないだろうか。岩手県一関市の厳美渓のだんごの話題を「空飛ぶスイーツ」として紹介したが、「空飛ぶだんご」と素直に伝えた方がよかったと思う。普通に紹介しておもしろい話題を無理やり引き延ばしているように感じたので、もっとコンパクトな作りにした方がよくなるのではないか。時間帯が変わったことでコンセプトが変わったのか、視聴率はどうなのか聞きたい。

○　田代島の猫の話題はスター猫を探すという視点がおもしろいと感じた。田代島に行ったことがある人でも、スター猫を探すという新たな目的ができ、もう一度訪れてみたいと思ったのではないか。厳美渓のだんごの話題では、だんごと一緒に届くお茶がこぼれない理由を紹介していたのでさすがの構成だと思った。ディレクターが挑戦し失敗した場面もあり、より難しさが伝わったと思う。４代目店主がお客さんの写真を集めているなど、お客さんを思う気持ちが伝わってきた。また、福島空港に設置されている福島つながる自販機の話題は、これぞ「みちたん」のディープ情報だと感じた。出てくるものが絶妙に肩の力が抜けてしまうものばかりで、買った方のリアクションがおもしろかった。「みちたん」は、旅の主目的ではなく、この情報を知っていたらさらに旅が楽しくなる、プラスアルファの情報が見つかるのでいつも楽しみにしている。

○　田代島のスター猫を探すプロセスには感心した。見つけるまでの努力を称賛する。「みちたん」は、どことなくばかばかしいおもしろさがあって、それは一生懸命真面目に取材に取り組んでいる姿勢とテーマとのギャップから生まれるのだと思う。音楽の使い方も非常に上手だと感じた。また、厳美渓のだんごは、なぜロープでだんごを運ぶようになったのかという部分まで踏み込んで紹介していてよかった。ディレクターがロープでだんごを運ぶことに挑戦しうまくいかなかったシーンを見て、やはりいろいろなところに熟練の技があるのだと感心した。「みちたん」は取材対象を探す苦労がしのばれるが、このおもしろさはやはり地域の魅力の一端を担っているものなので、そこが視聴者を楽しませて

いるのだと思う。

○　田代島の話題は、スター猫を探すというコンセプトがあり、大変おもしろかった。養蚕業が盛んだった田代島でネズミから蚕を守るために猫を飼うようになった歴史も紹介されて興味深かった。厳美渓のだんごの話題は、140年もの歴史があることやだんごの味を昔から変えていないこと、４代目店主がお客さんの写真を撮って飾り自分の励みにしているというエピソードなど、親しみを持って見ることができた。福島空港にある自販機や中ノ沢温泉の食堂にある謎のことば付きおみくじの話題は、非常にマニアックでおもしろかった。短時間に３つも話題を詰め込んで楽しませてくれる「みちたん」、今後も期待している。

○　田代島の話題では、蚕を狙うネズミを捕るために猫を飼うという歴史の紹介は勉強になった。中ノ沢温泉の食堂にあるおみくじは、出てきた言葉に全く意味が無かったので、番組で取り上げる話題としてはふさわしくなかったのではないか。番組で紹介するならば、そこに納得できる意味があってしかるべきではないか。また、福島空港の自販機については、買った男の子が出てきた商品を見た時の残念そうな顔が印象に残っている。失望感があり見ていてかわいそうだった。それをおもしろいと感じる人もいるので、番組の印象が二つに分かれると思う。

○　これまでの「みちたん」は、あまり知られていないディープな話題が多かったが、今回は知っていることをもっと掘り下げていくディープな話題が多く、印象が違った。一番おもしろいと感じた話題は、福島空港の自販機。どんなものが出てくるのか期待して待っていた少年が、商品を見てぼう然とする。番組のサブタイトルが「新感覚紀行番組」なので、あの少年の顔でそれを感じた。今後も期待している。

○　田代島でスター猫を探すプロセスが長く感じた。見つけた猫も、マリリン・モンローに似ているわけではなくがっかりした。ただ、その猫を紹介するシーンの字幕や音楽の演出がおもしろかった。これまで「みちたん」で紹介された場所に行ってみたいと思うことが多かったが、田代島に行きたいとは思わなかった。厳美渓のだんごの話題では、機械で作っていると思っていただんごが手づ

くりで、糸を使って切っていたので驚いた。４代目店主のお客さんを思う人柄が伝わってきてよかった。金曜日の夜に家族で笑って見られる安心な番組だと思った。

○　今回の番組で取り上げられた田代島の猫と厳美渓のだんごは、既に地域で十分認知されている話題で、「みちたん」らしからぬディープとは言えないテーマを取り上げたと思った。番組の演出も、以前の何となく緩い力みのない雰囲気の番組という印象ではなく、相当力が入っていたように感じた。厳美渓のだんごはお茶をこぼさないように対岸に送るという職人芸が紹介され、多くの人が知っていることを改めて別の角度で取り上げていて感心した。取り上げた話題はディープではないとは思ったが、その内容は確かにディープだったのかもしれない。「みちたん」は、普通の紀行番組にはないディープさと緩さが売りの番組で、この番組だからこそ紹介できるテーマも多い。金曜夜間に移っても、その番組のポイントは忘れないでほしい。地元の人が知らないディープな魅力にこだわって番組作りをしてほしい。

（ＮＨＫ側）

毎回どの話題がおもしろかったのか、おもしろくなかったのか、視聴者の生の声を聞く機会があまりないので、意見を聞けてとても励みになった。番組のコンセプトについて、最大の狙いは、その場所の魅力をテレビを通して伝えることだと思っている。魅力が伝わることで、そこに来る人が増えることを目的としている。一般的な紀行番組は、全国的に誰もが知っている人気の観光地を紹介するが、まだ知られていない魅力を発見していくのが「みちたん」という番組だと思っている。番組で紹介する話題は、視聴者に何かしら感じてもらえる部分があるかどうか判断して選んでいるが、２４回も続いているので、全く知られていないものはだんだんなくなりつつある。誰もが知っている場所でもまだ知られていない面を掘り起こして、今後も「みちたん」を続けていきたいと考えている。また、放送時間が金曜午後７時半になり、家族で見ることが増えると思うので、家族で楽しめるような場所選びをしていかなければいけないと考えている。

（ＮＨＫ側）

金曜の午後７時３０分という時間帯だったためか、今回は非常によく見ていただいた。木曜の午後１０時２５分に放送していたときに比べても高い視聴率をとっている。

＜放送番組一般について＞

○　４月２１日（土）ＮＨＫスペシャル　シリーズ金正恩（キムジョンウン）の野望　第２集「３９号室　外貨獲得の闇」は、インパクトのある内容だった。これほど徹底的に取材して北朝鮮の内実を紹介したテレビ番組は少ないと思う。３９号室が集めた莫大な資金があることで独裁体制が維持できているという、北朝鮮という国家の秘密がよくわかった。今、北朝鮮をめぐる情勢が毎日のように変わっていく中で、相手国の内情を私たちが一人でも多く知るということは非常に意味のあることだと思うので、今回の番組は非常にタイムリーでよかった。

○　４月２５日(水)探検バクモン「外務省　外交史料館」について、防衛省や財務省の公文書管理のあり方が国会で問題になっている時なので非常にタイムリーだった。この番組が公文書管理に対する静かな批判になっているようにも感じた。日米修好通商条約の原本や降伏文書の原本など、江戸時代の末期から戦後に至るまでの貴重な文書が紹介されて、国の公文書の多くがいずれ歴史の貴重な資料になっていくことを強く感じた。公文書の意味を問いかけてくるようないい内容だったと思う。この番組はあまり人が行かない場所を紹介してくれるので、毎回興味深く見ている。爆笑問題の二人とサヘル・ローズさんの掛け合いが絶妙で、堅い内容でもおもしろく見られる。

○　４月２１日(土)ＥＴＶ特集「僧侶たちの原発事故」は、東日本大震災と原発事故で混乱状況に陥った福島の人々を支えようとする３人の僧侶たちの姿が描かれていて、感銘を受けた。番組の冒頭と最後にロウソクの光が映されたが、とても印象に残るいい演出だった。

○　４月２４日(火)クローズアップ現代＋「郵便局が保険を“押し売り”！？～郵便局員たちの告白～」は、とてもすばらしい内容だった。「高齢の母が郵便局員に保険を押し売りされた」という１通のメールがＮＨＫに寄せられ、実態を探るためにＳＮＳで情報提供を呼びかける。放送に先駆けて取材過程をＳＮＳで公開し、寄せられた情報をもとに取材を深めていくという内容だった。一つの発見から社会に対する警鐘、不正への提言までを番組の中で行っていて、とてもいい取り上げ方だと思った。

○　４月２４日(火)「クローズアップ現代＋」は、よくぞここまで取材したと称賛したい。支払い総額より保険金が低い保険に加入させたり、高齢者に契約の際、家族を同席させないように仕組んだり、金融機関の人間として決してやってはいけないことを組織ぐるみでやったという事実を伝えていた。消費者を守ることにつながるので、問題提起だけではなく、改善に向けた形で追跡取材をしてほしい。

○　４月２７日(金)新日本風土記・選「東北の春」は、すばらしい番組だった。地域の誰も知らない、あるいは知っているけれども深く入っていけないような事柄を番組にきちんとまとめていく、これはＮＨＫしかできないことだと思う。これは５年前に制作された番組だったが、それぞれの場所が今どうなっているのかを知りたくなった。その後を描く番組を作ってもいいのではないか。ぜひ地方局から発信してほしい。

○　５月２日(水)ノーナレ「“幸せホームレス”との１０日間」は、ホームレスなのにお金に困らないどころか幸せという元芸人の小谷真理さんに密着した番組だった。ホームレスをＮＨＫが肯定しているような内容に感じられて非常に残念だった。ホームレス対策を行っている行政やＮＰＯ団体などの人たちが見てどう思ったのか心配になった。

○　５月４日（金）「関西発ラジオ深夜便」で、明日へのことば「銃に倒れど、ペンは折らせず」という企画に感銘を受けた。1987年５月３日に発生した朝日新聞阪神支局襲撃事件についてジャーナリストの樋田毅さんのインタビューを伝えていた。「同僚の無念を晴らしたい。そして、また新聞記者

として事件の真相を知りたい。この２つのみで今まで過ごしていた」ということばが印象に残った。「明日へのことば」は、人間として深い感銘を受ける話題が多い。もっと多くの人が聞ける時間に放送することや、若い人に聞いてもらう工夫をして欲しい。また、東北からの発信も期待している。

○　５月６日(日)小さな旅「ふるさとの鉄路と笑顔舞う駅舎で～山形県　フラワー長井線～」を見た。高校生が電車で通学する様子や長井駅にある直売所にお年寄りが集まって会話を楽しむ様子など､人の温かさが感じられてよかった。それを引き出していた山田敦子アナウンサーは、安定感があり好感が持てた。一番心に残ったのは、長井市の自転車屋の場面で､「動きだした自転車は雪国山形に春を告げる」というナレーション。長井市は雪が多いので、冬場は自転車に乗れないため、自転車が春を告げるというコメントになったと思うが、そのインスピレーションは雪国の人にはないので、逆に新鮮な感じがした。

○　５月６日(日)「小さな旅」は、ゆっくりとした景色が心地いい番組だった。高校生が電車の中で宿題をする様子や写真部の生徒たちが電車で移動して駅で撮影会をする様子など、高校生の足としてフラワー長井線が愛されていることが伝わってきた。あやめ公園駅が、地域の人の募金でできたことや待合室が近くの工業高校の生徒たち手作りだというエピソードなどが紹介されてとてもよかった。駅だけではなくて、駅に向かう高校生を支える自転車屋のエピソードもあり、番組にめりはりがついていた。最後の「花咲く鉄道に人々が集う」というコメントそのままに、鉄道を中心とした沿線の人々の暮らしを感じることができるとてもいい番組だった。

○　５月６日(日)ＮＨＫスペシャル　ブループラネット　第１集「大海原　青い砂漠を生き抜く」の映像に圧倒された。海の透明度、サメや鯨の巨体の迫力、イワシの群れに食らいつくイルカやマグロ、どの映像も今までに見たことのない映像でとてもすばらしかった。イギリスＢＢＣとの国際共同制作で、４年の年月を費やしたとのことで、ＮＨＫにしかできないまさにスペシャルな番組だったと思う。次回も楽しみにしている。

○　５月１１日(金)東北ココから「西郷どんの教え今も」は、庄内藩と西郷隆盛

との関係が今もなお色濃く残っていることを紹介した番組だった。なぜ西郷隆盛が庄内藩を優遇したのかという点をもう少し掘り下げてほしかった。「南洲翁遺訓」について勉強する会を紹介していたが、参加者が３人だけでさみしい感じがした。もう少し紹介の仕方に工夫があってもよかったのではないか。

○　５月１１日（金）きんよる秋田「クマヤマ」は、県から委託されて熊の駆除をしている鳥海マタギを追った番組で非常に感動した。無駄な音を入れずに、木を踏みしめるマタギの足音、風の音、水の流れ、鳥の声など、熊が現れたときの鼓動まで聞こえてくるのではないかと思うほどリアルな感じが出ていた。マタギの人たちにもカメラを取り付けて撮影していたので、熊を追い込む猟の様子がさまざまな角度から映し出され臨場感があった。なぜ熊が里山に下りてくるようになったのか、イラストと共にマタギのインタビューで説明されて非常に分かりやすかった。おりを使って熊を有害駆除するのではなく、自分たちが神として仕留めたいということばなど、胸を打つことばがたくさんあった。全国放送するなどたくさんの人に見てもらいたいすばらしい番組だった。

○　５月１１日(金)「ニュースウオッチ９」で、ＳＮＳの偽情報を追跡する企画があって興味深く見た。情報の真偽のほどをきちんと現場に行って確かめて報告をしていて高く評価すべきだと感じた。多くの人が視聴するニュースの中で特集としたことは意義のあることだと思う。

○　５月１２日(土)ＮＨＫスペシャル「仮想通貨ウォーズ～盗まれた５８０億円を追え！～」は、ＮＥＭという仮想通貨が５８０億円分交換会社から流出した事件を追跡する内容だった。ネット世界の情報の拡散がどこからどこにつながるのかが、可視化されていて、盗まれた仮想通貨がどう拡散していったかが分かりやすく説明されていた。ネットの世界は複雑で、普通では分からない闇の社会が広がっていることが分かり恐ろしくなった。事件の解決に至らなくても、こうした問題を世の中に広く知らせること自体が抑止力になると思うので、今後も番組でしっかりと取り上げてほしい。

○　５月１２日(土)ＳＯＮＧＳ「ＳＯＮＧＳが変わる！スペシャル」は、これまでの番組に出演したアーティストの豪華な映像が紹介された。忌野清志郎さん

や竹内まりやさんの映像がすばらしかった。番組の責任者に大泉洋さんが就任したが、大人の音楽番組という雰囲気を今後も大事にしてほしい。旬のアーティストの出演や特別な演出をするなど、ＮＨＫにしかできない内容を期待している。

○　５月１３日(日)発見！あおもり深世界「八戸　巨大朝市のヒミツ」(総合 後1:05～1:32東北ﾌﾞﾛｯｸ除く山形・青森）は、大変おもしろかった。朝市の経済効果が２０～２５億円ぐらいあるということを初めて知った。扱う商品の種類は3,313点ということにも驚いた。９４％が南部地方の出店者という地産地消の成功事例で他の地域にも応用できる部分があるのではないかと感じた。また、市場内にあるコーヒー屋に常連客が集まって憩いの場になっているというエピソードもあり、人とのつながりがこの巨大市場で生まれていることも分かった。非常に意義のあることを紹介してもらったと思う。

○　５月１３日(日)明日へつなげようのエンディングで「花は咲く～楽天バージョン」を見た。楽天の梨田昌孝監督や東北ゆかりの選手が歌う様子が紹介され、非常に感動した。

○　５月１３日(日）ダーウィンが来た！生きもの新伝説「密着！東京大自然(２）奥多摩　生きものたちの熱～い冬」は、ナガレタゴガエルの変わった習性を伝えていて興味深かった。映像もきれいでとてもよかった。

○　「いないいないばあっ！」と「おかあさんといっしょ」は、子どもと一緒に話をしたり体を動かしながら見ることができてとてもいい番組だと思う。「おかあさんといっしょ」の「へんてこライオン」というコーナーがおもしろかった。ほかの絵本作家のものでも見てみたいと感じた。ちょうど夕飯の準備をする時間帯に放送しているので、子育て中の人は助かっていると思う。

○　「チコちゃんに叱られる！」は、民放に近い演出の番組だと思う。特にチコちゃんの歯にきぬ着せぬ毒舌がおもしろいが、それ以外にも視聴者を飽きさせない工夫を続けてもらうことで、もっといい番組になるのではないか。

○　今年は戊辰戦争終結から150年を迎える年だ。東北から見た戊辰戦争あるいは明治維新というものを番組でぜひ取り上げてほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

平成３０年４月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、４月１３日(金) 午後７時台の各放送局の地域放送番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、５月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

副委員長	藤村　ゆき	(こまめ小町コーポレーション　代表)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　編集局次長兼生活文化部長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発(株)　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　常務取締役)

(主な発言)

＜４月１３日(金) 午後７時台の各放送局の地域放送番組について＞

○　東北ココから「“闘将”がのこしたもの～楽天　星野仙一の信念～」は、タイトルからも期待していたが、内容がとてもすばらしかった。星野さんは、試合中に選手が失敗するとベンチを蹴って怒っている姿がテレビで映し出されることが多く、激高型の監督だと思っていたが、今回の番組で紹介された本人のインタビューで見方が変わった。「怒りっぽいし、気が強い、短いと言われるけれど、みんな見る目がないよな。俺は選手がかわいくてしょうがないから怒っているんだ」と笑いながら話していた。それは本当の笑顔だったので、非常に印象深い。星野さんが小学校時代、難病の友達を背負って学校に送り迎えしていたというエピソードについて、教科書にも掲載されていたと紹介され、子どもの頃から信念を持ち、心の強い人だったいうことが伝わった。また、ゲストとし

て出演していた明治大学の野球部の同期、堤喜一郎さんのコメントが番組の中で際立っていたと思う。次回以降も期待したい。

○　「東北ココから」は、星野さんの過去のインタビューも入れて、コンパクトだが内容の濃い番組に仕上がっていた。星野さんは、怒りっぽい、気が短い、戦う男の代名詞という印象が強かったが、この番組を見て変わった。星野さんが戦うということは、争うということじゃなくて挑戦する、チャレンジするということだった。「勝負に負けることは次につながるチャンスだし、勝つことは勝ち続ける努力をするチャンスだ」というインタビューがあり、これまで気づいていなかった星野さんの本質に迫っていたと思う。現在の学校教育の現場では、一人一人の個性を尊重して競争させないという流れもあると思うが、星野さんの戦う心、挑戦する心を持つことで得られる良さを理解して、子どもたちにも競争させることも大切だと感じた。

○　「東北ココから」は、選手や古くからの友人、本人のインタビューの映像などで、星野さんの人物像がよく描かれていたと思う。一度抜てきした選手はミスしても使い続ける、リスクを考えず成長を喜びとするという考えのもと、何人もの若手をうまく導いていた。星野さんは熱い方で怒りっぽいという印象だったが、とても優しい人だったという人物像がよく伝わってきた。星野さんのリーダー像もよく分かり、人の育て方について、学ぶところが多い番組になっていた。ただ、一つ一つのエピソードが短く、もの足りなさも感じた。東北楽天ゴールデンイーグルスの監督時代の話を詳しく伝えるなど、もう少し長く特集してほしかった。

○　「東北ココから」について、第１回に星野さんを取り上げたことは大成功だったと思う。作り手側の意気込みが感じられ、充実した内容だった。岡山県にある福祉施設で子どもたちと交流していたエピソードなど、今までほとんど報じられることのなかった星野さんの一面が詳しく報じられていて、星野さんの優しい人柄が伝わってきた。また、堤さんが出演したことで番組の構成がうまくまとまったと感じた。星野さんを「星野」と呼び捨てにして、朴とつなしゃべり口で星野さんについて語る姿が印象的だった。若干、星野さんを理想的に扱い過ぎているような面も感じられたが、いい番組だったと思う。

○　「東北ココから」は、第１回のテーマを東北の人にとって大きな存在である星野さんにしたことで、インパクトのある内容になっていた。チャンスを与えて辛抱強く信じ続ける、小さな成長を見つけて喜ぶという、人を育てる上でとても大切なことを星野さんのエピソードを通して伝えていて、胸に刺さる思いがした。岡山県の福祉施設で、障害のある子どもたちにティーボールというスポーツを教えていたというエピソードでは、子どもたちのきらきらした顔や助け合う姿が印象的だった。ゲストの堤さんがとてもよかった。堤さんのお話から星野さんの温かい、人が好きだという人柄がとても伝わってきた。一つ気になったのが、キャスターが堤さんに「何かエピソードは？」と質問していた部分で「何か忘れられないエピソードがあるそうですね」など、聞き方に工夫がほしかった。旬の話題を取り上げた１回目がとてもよかったので、２回目以降も楽しみにしている。

○　「東北ココから」は、星野さんと親交の深い多くの方に取材し、さまざまなエピソードから星野さんの生き方や思い､信念を伝えていた｡その中のエピソードの一つ、星野さんの小学校当時の話「星野君と定金君」として、小学校の道徳の教科書に掲載されているのには驚いた。今を生きた偉人だったのだと思った。今回は、星野さんと子どもたちとの触れ合いやその信念を中心に紹介していたが､星野さんの選手指導の方法は､一般の会社での若手社員･部下の指導･育成にも通じるものがあると感じた。若手社員などにどのように接し、育てていくべきなのか、番組の中にヒントがあったよう思う。残念だったのは、３０分という時間の制約があったせいか、番組の最後が尻すぼみであっさりしていた。もう少し番組の最後に厚みを持たせることで番組全体が締まったのではないだろうか。４月からスタートした「東北ココから」。以前の「クローズアップ東北」をさらに発展させ、より地域に密着し、地域の目線で番組を作ってほしい。

○　きんよる秋田｢サッカーで秋田を変える～Ｊ３クラブ社長の挑戦｣について、冒頭で、丁寧な説明があったので、サッカーをあまり知らない人でも理解できる内容だったと思う。昨年、Ｊ３で優勝したが、秋田に１万人入るスタジアムがないためＪ２に昇格できなかったブラウブリッツ秋田。スタジアム建設や

チーム強化に奔走する社長の岩瀬浩介さんの苦悩がよく描かれていた。１万人応援プロジェクトを立ち上げ、3月の開幕戦では１万2,000人もの人たちを会場に集めることができたときの岩瀬さんの笑顔が印象的だった。サッカーで秋田を活性化させるということを目標に置いた強い信念。秋田の出身ではない岩瀬さんが、サッカーで秋田の未来を変えることが本当にできるのか分からないが、この人なら秋田を変えられるのではないかと期待せずにはいられなかった。

○　再発見いわて「最高の終わりを求めて～八重樫東 再起の記録～」は、ボクシングの元世界チャンピオンの再起の話なので、「再発見いわて」という題名には合わないのではないかと感じた。最高の終わりを見てほしい、理想のスタイルでボクシングを終えたいという八重樫選手の生き方にだんだん引きつけられていった。ただ、ボクシングの知識があまりない人にとって、階級の話が分かりにくかったと思う。八重樫さんの今後の試合の予定など、これからの話まで紹介して欲しかった。羽隅将一アナウンサーの安定した語りは、とてもよかった。

地域番組を作る上で、東京目線で作っていると感じる番組、地方目線で作っていると感じる番組などがあり、ＮＨＫは難しさを感じているのではないかと思う。地域からの発信を目指すのか、番組の地産地消を目指すのかという点をもっと議論した方がいいのではないか。地方の民放局に比べて、転勤があるため情報収集力では圧倒的に不利な面があると思う。それをどうクリアしていくのか考えるべきではないか。そのために市民が参加できる番組、市民と一緒に作る番組を作っていただきたい。

（ＮＨＫ側）

地域改革を進めていくと、その担い手は現在の全国転勤型の職員だけではなく、地域に根づいた人材も必要ではないかと考えている。地域職員という制度もある。また、今年度は県域放送番組を増やす計画にしている。全国放送でつくった番組に少し枠をつけて地域放送向けにし、違った形で見せる取り組みも行っていく予定だ。

（ＮＨＫ側）

市民参加型の番組として、秋田局では「ディレクソン」という番組を制作する。来月イベントを行い、その様子を番組にする。秋田の視

聴者の方に、番組のアイデアを出してもらい、それをＮＨＫ側が番組にしていく。東北では秋田が１回目なので注目して欲しい。

○　ココに福あり　ｆＭＡＰ「＃３　いつだってポジティブポジぃちゃん図鑑」では、２人のおじいちゃんを紹介していた。なぜおばあちゃんではなく、おじいちゃんだったのかは分からなかった。７０歳を越えても仕事も趣味も充実した人たちで、人付き合いも広く、高齢者にとって課題なのが孤独だと思うが、その問題とは縁遠い人だった。登場した２人のおじいさんは、東日本大震災を経験していて、その辛さをどう乗り越えたかも描かれていた。その時に合わせて草野心平さんの詩「死んだら死んだで生きてゆくのだ」が紹介されたことが印象的だった。私たちに元気と勇気をくれるぽっと明かりが灯るような番組だった。

○　発見あおもり深世界「八戸　巨大朝市のヒミツ」について、朝市の歴史やどうして人気があるのかをさまざまな点から探っていて、とてもおもしろく拝見した。番組の中で朝市について一般の人にとったアンケートを紹介した。「どれも安い」という意見しかないと紹介されていて、どんなアンケートだったのかもう少し詳しく知りたかった。弘前大学の教授がこの朝市は、年間２０～２５億円の経済効果があると説明していて驚いた。出店者、行政、買い手、それぞれがいろいろな努力をしていることでうまくいっていると思う。人口減少が進む中で、地方の経済をどう支えていくか、この朝市は大きな指針になるような気がした。

＜放送番組一般について＞

○　３月１７日(土)「経済フロントライン」を見た。経営というのは、本当は借金をしてでも設備投資をして事業を拡大していくのが本質だと思うが、日本は膨大な内部留保を積み立ててしまい、賃金には回らないという状況がよくわかった。出演者のコメントも的確で納得した。「いい物とかサービスだったら価格を引き上げて構わない」、「一番経営者が言ってはいけないことは、『先行きが不安だから賃金を上げない』」、「従業員側もスキルを上げないと賃金は上がらない」など、非常にわかりやすく経済を分析していた。この番組は、１週間の経

済ニュースをまとめて、日本経済を的確に分析していてとてもよかったので、終わってしまったのがとても残念だ。

○　３月２１日(水)オイコノミア「１０代に伝えたい経済学」は、お笑い芸人で芥川賞作家の又吉直樹さんが大阪大学の大竹文雄教授と共にいろんな事柄を経済学の視点で解き明かす番組だった。最終回ということで、若者と一緒にこれからどうやって生きていくのかということを、経済学の視点から考えていた。又吉さんが「経済学は味方だ」というような言葉で締めくくっていたが、６年間のこれまでの内容にふさわしい最終回だったと感じた。

○　３月２６日(月)プロフェッショナル　仕事の流儀「いまこの瞬間に、全力を～吹奏楽音楽監督・藤重佳久～」にとても感動した。「自分が生きている証しを音に表す」「笑顔で演奏すれば笑顔の音になる。眉間にしわを寄せていたらそういう音になる」「全力が全力を引き出す」など、藤重さんの言葉が印象的だった。指導を受けた子どもたちの人生に残る言葉であり、だからこそ子どもたちが笑顔で藤重さんについていっていることが伝わった。

○　３月２６日(月)ノーナレ「津軽　雪空港」について、ナレーションがないことが、これほど音を敏感に感じさせてくれるのかと新鮮に感じながら見た。風の音や除雪車が走る音、飛行機の音、たくあんをかむ音など、いろいろな音があったが、音のないところから雪の音が聞こえてくるのではないかと思わせてくれる番組だった。青森空港では、滑走路を除雪する精鋭部隊をホワイトインパルスと呼んでいたが、そのホワイトインパルスが限られた時間の中で除雪する様子や整備士が主翼部に積もった雪を取り除く様子などを丁寧に紹介していた。番組で紹介された除雪車の運転手や整備士など、裏方の人たちの日々の着実な仕事の積み重ねで、私たちの社会が動いているということを実感させてくれる番組だった。ナレーションがないからこそ感じられたのかもしれない。秀逸な番組だった。

○　３月２９日(木)にっぽん紀行「ガミガミおばちゃんの駄菓子屋～山形市～」は、山形市にある駄菓子屋のおばちゃんと子どもたちの交流を追った番組だった。番組の中で、駄菓子屋の現代的なあり方、本質を描き出そうとしていたと

思う。駄菓子屋に長居する子どもたちがたくさん登場したが、居場所がない子どもたちが多いのではないかということも考えさせられた。駄菓子屋に来れば友達もいるし、おばちゃんとも話ができる、そういった面も駄菓子屋の存在意義なのではないかと感じた。

○　３月３１日(土)特集ドラマ「どこにもない国」後編(総合 後9:00～10:13)を見て、民間人を置き去りにした軍の無責任だけではなく、国に対する怒りが湧き上がってきた。旧満州に住んでいる人たちが生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされたにも関わらず、国はその人たちを見捨てた。この番組のタイトルの「どこにもない国」は、国の無責任を象徴したようなタイトルだと思った。当時の悲劇が忘れ去られていく中で、今こういうドラマを作ったというのは非常に意味があることだと思う。実話に基づいただけあり迫力があって、時代考証もしっかりしており、出演者の演技も含めて非常に質の高いドラマになっていた。放送前の告知をもっとしっかりやってもよかったのではないか。ぜひ再放送してほしい。

○　３月３１日(土)地球ドラマチック「あなたの知らない“自由の女神”～隠された謎に迫る～」は、大変おもしろい番組だった。自由の女神はもともとフランスの建築家が自分の名を残すため、スエズ運河に建造しようとしたものだったが、資金難などう余曲折を経て、最初に建った地はパリだった。その後ニューヨークに移転し移民を受け入れるシンボルになったということだった。足に鎖が巻かれている意味など、まだ解明されていないこともあるというが、これまで知らなかった事実が多く興味深く拝見した。

○　４月２日(月)「あさイチ」は、司会が入れ替わったことで、どのように進めていくのか興味を持って見た。博多大吉さんが最初の一言で「皆さん、違和感しかないでしょう、私たちもです」と笑いをとっていて、さすがお笑い芸人だなと思った。近江友里恵アナウンサーも「ブラタモリ」に出演しているときから、ほんわかとして雰囲気がいいと思っていたのが、そのよさが番組を明るくしていた。最初にこのキャスティングを聞いたときはうまくいくのかと思ったが、バトンタッチがうまくいっていたと思う。

○　４月３日(火)世界ふれあい街歩き「ルネサンスの誇り　フィレンツェ～イタリア～」について、街の中を歩いて現地の人々に声をかけて話を聞いたり、お店に入ったり、実際にその街を歩いているような感覚で見られ、単なる旅番組ではないところがとてもいいと感じた。バーチャルリアリティーの世界が進むと、その場所に実際に行かなくても街を散策する体験ができるようになるのかもしれないが、海外旅行の良さは、ただ風景を見るだけではなく、現地の人と会話ができるという点もあるので、それを体感できる番組になっているのが非常にいいと思う。

○　４月４日(水)「もりすた！」を見た。ガラス張りのスタジオから放送している　ため、外の光が入ってとても明るい雰囲気で、その日の天気も分かり、昼の番組にぴったりだという印象を受けた。フレッシュな印象で、初回ということもあり､緊張感が伝わってきた｡メインキャスターの森下絵里香アナウンサーが自己紹介の中で、東北にゆかりが全くないと言っていたので、地元の人が当たり前になって気がつかない東北の魅力を見つけて発信してほしいと思った。曜日ごとのコーナーの紹介があったが､「みちラビ」や「明日へのことば」に興味が湧いた｡「もりすた！」はガラス張りのスタジオで、後ろに回ると映ることができるので、仙台観光に来たら「もりすた！」に映るということが定番になればいいと思った。

○　４月４日(水)又吉直樹のヘウレーカ！「なぜ植物はスキマに生えるのか？」は、お笑い芸人の又吉直樹さんと専門家が、ふだん見過ごしているような小さな疑問の本質に迫るという番組だ｡普通は思いもつかないような角度から研究、探求していこうという姿勢が見られて、おもしろく拝見した。これからも期待したいと思う。

○　４月７日(土)ＮＨＫスペシャル「＃失踪若者行方不明３万人」を見て非常にショックを受けた。１０代から２０代の若者が年間３万人以上行方不明になっているその背景には、ＳＮＳ上に「裏アカウント」をいくつも持って、親や友達さえも知らない“匿名”で見ず知らずの人間と簡単に接点をもつという現実があった。若者の相談に乗るＮＰＯの人たちが助けようとしても、結局家には戻れない。ネット社会が進んだことで、人との接し方がうまくできない若者が

増えているのではないかと思う。９人の若者の命が奪われた座間市の事件ともつながる。ＮＰＯや行政が入っても、止めようのない現実があり、とてもショックを受けた。

○　４月７日(土)「ＮＨＫスペシャル」について、若者の失踪はどうして起こるのだろうと思いながら見た。単なる若者のコミュニケーション能力の不足では済まされない、今の時代の閉塞感の中から生み出された一つの病ではないのかと感じた。若者の相談に応じるＮＰＯ法人BONDプロジェクトが大切にしてきたのは、逃げていく少女を追いかけて束縛してはいけない、束縛することはまた同じことをその少女たちに強いることだという点で、非常に共感した。居場所づくり、自分をわかってほしいという思いを感じている子どもたちにどう向き合えばいいのか、番組では結論は出なかったが、いい問題提起を投げかけたのではないかと思う。

○　４月８日(日)ダーウィンが来た！生きもの新伝説「神社の島へＧＯ！青森ウミネコ物語」は、３万羽のウミネコが毎年やってくる八戸市にある蕪島の様子を紹介していた。２０年も同じ場所に巣づくりしているつがいがいることや巣と巣の間隔がわずか６０センチメートルしかないため縄張り争いがおこることなど、おもしろいエピソードが描かれていた。

○　４月９日(月)クローズアップ現代＋「急増する“墓じまい”新たな弔いの形とは」を興味深く見た。散骨、樹木葬、バルーン葬など様々な弔い方を紹介していた。中でも一番驚いたのは、スマートフォンの中に“仮想の墓”を作るというサービス。その価値観には違和感を持った。ライフスタイルの大きな変化で、全国的にいろいろな墓じまいの動きがあることを知ることができた。

○　４月１１日(水)に再放送されたＮＨＫスペシャル　未解決事件Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」(総合 前0:40～1:53)と１２日（木）の同番組「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」（総合 前1:04～1:53)を興味深く見た。「これは小尻知博さんだけに向けられたものではない。みんなに向けられた銃弾であり、それは民主主義に向けられた銃弾である」という言葉の重みを感じた。１日目は再現ドラマで、事件を追う記者の立場から描いていて、２日目はドキュメンタ

リーで、ＮＨＫ独自の取材から捜査の過程を追っていく。二つの面から見ることで、よりこの事件の本質を知ることができたと思う。

○　４月１３日(金)「チコちゃんに叱られる！」は、岡村隆史さんが司会の新番組ということで楽しみにしていた。身近な話題をおもしろく、分かりやすく紹介していた。一番驚いたのがソメイヨシノはクローンの木で、全国に何万本もある木は実は１本の木からできているので、同時に開花するというもの。チコちゃんの声が木村祐一さんで､おもしろいが､非常にことばづかいが荒いので、賛否があるのではないか。チコちゃんの表情が話に合わせて変わるがどうなっているのか気になった。今後も楽しみにしている。

○　４月１４日(土)「きこえタマゴ！」は、司会のＪＯＹさんとキャスターの安治美穂さんの２人の掛け合いのテンポがよく、子どもたちが話しやすい雰囲気で進行していてよかった。近年、災害時にラジオを活用する重要性が言われているが、子どものうちからラジオに親しむことが大切だと思う。子どもたちが参加できるラジオ番組は非常に重要でこれからも力を入れていってほしい。

○　４月１５日(日) 目撃！にっぽん「“心”を彫り込む～震災７年　亡き家族とともに～」は、ノミ一つで木の仏像を刻み、震災で家族を亡くした方に贈る僧侶の話しだった。涙なくしては見られない内容で、とてもいい番組だったと思う。

○　４月１５日(日)「目撃！にっぽん」は、東日本大震災で 1,000 人もの方が亡くなった東松島市。多くの地元の方々を弔った清泰寺の住職。その住職がノミ一つで彫る仏像をもらうことを待ちわびる人々。その人々の気持ちが、表情や何気ない言葉で表現されていた。震災で家族を亡くした方の心情とそれに寄り添うための住職の思いを丁寧に表現して伝えていた。今後も震災の悲劇について、より多くの方を取材し、映像として後世に残してほしい。

○　４月１５日(日)明日へつなげよう「活断層の村で生きる～熊本地震　西原村２年の記録～」は、２年前の熊本地震で被害の大きかった西原村の対照的な２つの地区を取り上げて、集団移転するのか、現地再建するのかという地区の葛

藤を追いかけた番組だった。２つの地区の特徴を分かりやすく説明し、それぞれのケースで役場職員の立場からも描かれていたため、さらに分かりやすく番組が進行していたと思う。役場職員と住民が言い合いになる場面もあったが、お互いにどうしたらこの西原村の状況がよくなるかという地区への愛情にあふれた言い合いで、よくここまで取材してくれたと感動した。今年は岩手・宮城内陸地震から１０年、宮城県沖地震から４０年という節目の年なので、この２つの災害についてもぜひ番組で取り上げてほしい。

○　３月１６日（金）みちたん「私みちたん立ち見したわの２３回」（総合 後 7:30～7:59.30 東北ブロック）は、田中要次さんの独特のナレーションで進行する、肩ひじ張らずに見ることができる番組だった。毎回、よくこんな情報を見つけてくるものだと感心している。今回紹介された作並温泉で開催される回文の全国大会も全く知らなかった。制作者は力を入れて取材していると思うが、あえて全体的に緩い雰囲気に作り上げている。田中さんとディレクターの掛け合いなど、遊び心もこの番組に欠かせないアクセントになっている。４月から毎回、夜７時台に放送されるが、肩ひじ張らず見られる番組作りは変えないでほしい。

○　連続テレビ小説「半分、青い」について、主人公が生まれたのは 1970 年代初頭だが、当時の住宅の雰囲気をできる限り細部にわたり正確に再現していたと思った。テレビの上にある置物や茶の間の家具や電化製品など、懐かしさと共にそこまでやるかと感心させられた。また、子役の演技が素晴らしく、微妙な心の動きもきちんと演技し表現されていた。今週から主人公が永野芽郁さんに代わり、人気俳優の佐藤健さんも起用されている。登場人物やストーリーそのものがいかに展開していくか、今後に期待したい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局